
Gamer ' s Lover

悪い顔の猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gamer's Lover

【Nコード】

N0599P

【作者名】

悪い顔の猫

【あらすじ】

茶霧智（さぎり とも）は県内のある国立大学に通う女子大生。今日もMMORPG「冒険者」にログインし、仲間と共に冒険する。彼女にはゲーム中に好きな男性が居た。そんな彼女が現実世界で変な男と知り合う。というお話。

第一話 冒険者（前書き）

初めての方ははじめまして。他の作品の読者様にはこんにちは。悪い顔の猫と申します。今回は知人の「恋愛小説は書けそうに無い」という指摘に反発して、恋愛物に挑戦しようと思ってみました。しかし、ただの恋愛でもつまらないと、廃人量産システムであるMMORPGを少しだけ舞台にかじらせています。チャットログなどで、少しだけ専門的な言葉も出てきますが、それは後書きにでも解説を載せようと思います。この話は不定期連載になると思いますので、気長に待っていただける方は目を通してください。

【注意】

作者は他にも2作品と書いていますが、これは全く趣向の異なる物語です。この作品の雰囲気や鷓呑みにして見るとエライ目に会いますので、心の準備をしてから読むようにお願いします。

第一話 冒険者

第一話 冒険者

【チャットログ】

チャムさんがログインしました。

ハーヴェスト：お、チャムおつー・w・

チャム：お、ハヴさんいましたねw

ハーヴェスト：どうせ暇だしね^^；ニートなめんなよ

チャム：キャハw ニートでもゲーム内じゃ強いっしょw

いちか：ー、ー、

チャム：あ、いちかいたのねw w w w w w w w w w

いちか：うむ、なんかまた私が入れない空気だったんで空気でいよ
うと思っただけだw

チャム：なによそれ？w

ハーヴェスト：チャムは俺の嫁・・・

チャム：w w w w w w w w w w w w w w w w

チャム：もしかして2人で狩ってた？

ハーヴェスト：んだ！でもまだ亡者の入り口だよ

チャム：クレリックいりませんか！？

いちか：バッファアがいるからいらないかも？w

チャム：いちかwwwwwしよぼヒールしかないくせにwwwww

いちか：^w^

ハーヴェスト：経験も金もしよぼくなる・・・

チャム：またクエストで骨集めて売ればいいでしょw

ハーヴェスト：・・・

いちか：私新しい武器ほしいのよ

ハーヴェスト：もうすぐ30だからねw 俺も30グレ揃えなきや名

チャム：名w

ハーヴェスト：誤字くらい許せよwwwwww

チャム：私ももうすぐ28だあw。寄生させて？w

ハーヴェスト：(´・`・´)

いちか：仕方ないから待つてる・・・

チャム：あざーっす W W W W W W W

ハーヴェスト：ワープポイント使えよ・・・

チャム：お金ない・W・

ハーヴェスト：何時までいる？

チャム：明日も講義あるし12時くらいかな

いちか：いやいや・・・今日は合コンでしょ・・・ 8時から約束してんじゃん

チャム：あー・・・ メンドクセ いちか行くの？

ハーヴェスト：嫁が寝取られる・・・

チャム：チャライのしかいないから大丈夫っすよ W W W W W

いちか：一応ほら、付き合いもあるしね？^^；

ハーヴェスト：いつてらっしやい^-^

チャム：その笑顔に悪意を感じる W W W W W

ハーヴェスト：時間ないからもう行くよ W W W W W いちかかもーん

チャム：待つて W W W W W W W W W W W W W W W W

私の名前は茶霧智（さぎり とも）。現在20歳で大学生。彼氏
いない歴20年。別にもてないわけじゃない。むしろ男は腐るほど
寄ってくると思う。でもどの男も性交目的の軽薄な男に見えて好き
になれない。別に同姓が好きじゃなく、ノーマルな女。でも男
と付き合いたいとは思わない。今の恋人は専らゲームだ。巷で人気
になっているMMORPG『冒険者』が私の恋人。実はこのゲーム
内に好きな男が居たりする。彼はいつも下ネタを言い、私を笑わせ
てくれる。でも悪意を感じない。場に合った的確な言葉で私の少し
荒んだ心を癒してくれる。自称二トの30男。でもゲーム内で素
性を明かす人間は少ないだろう。本当のところは分からない。二ト
だ暇だと言ってはいるけれど、彼はいつも私達と同じ時間にログ
インし、レベルも然程離れていない。ハーヴェストは実はメインキ
ャラではなく、名のある廃人キャラがメインなのかもしれない。で
も彼のログイン画面を見たこともない私は真実を知ることが出来な
い。そう、私は彼の真実を何一つ知らない。何処かミステリアスな
彼だからこそ好きなのだろう。キャラクターとチャットしか彼を知
る術は無い。いつかは会って話してみたいと思っているが、彼が
ハンサムな好青年である可能性は半々だろう。もしかしたら脂ギツ
シユなキモヲタかもしれない。でも、今私を一番理解し、一番優し
くしてくれるのが彼だ。ゲームの血盟内で近々あると噂されている
オフ会。彼も参加するのだろうか？もし参加するならば、私も勇気
を出して行ってみよう。彼が私の幻想の中の彼と違っていても、彼
を嫌いにはなれないはずだから。

【パーティーチャットログ】

チャム：疲れたー 休もうよ

ハーヴェスト：だな。今何時だ？

いちか：7時前

ハーヴェスト：そかそか あ、お前ら合コンじゃなかったっけ？

チャム：もうぶつちの方向で・・・

いちか：チャム・・・ 行こうよ

ハーヴェスト：楽しんできたまえレディ達（・・・）

いちか：寂しそうwwwwww

チャム：私がチャラ男に好きにされてもいいの？・・・w

ハーヴェスト：イヤデス

チャム：じゃ、行かないwwwwww

いちか：ハヴちゃんwwwwww

ハーヴェスト：チャムの可愛い顔も好きだけど、いちかのおっぱい

も捨てがたい・・・

チャム：みたことないくせにｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

いちか：私D・・・

ハーヴェスト：Dかつぶハアハア・・・（””）

チャム：私だつて少しはあるわｗｗｗｗｗｗ

いちか：チャムちゃんはスレンダーな巨乳ちゃんよ？86のEだっけ？

チャム：いちか！！！

いちか：一、（

ハーヴェスト：おさんには刺激が強すぎるわい・・・ 鼻血出た

チャム：想像すんなｗｗｗｗｗｗ

いちか：ハヴちゃんは童貞だからな

ハーヴェスト：30だから魔法を使えるよ・・・

チャム：やかましいｗｗｗｗ

ハーヴェスト：あ、ダチから電話きた

チャム：でてら

いちか：そろそろ私達も準備しよっか？

チャム：私いきたくないーい

いちか：我俣いわない

チャム：ハヴちゃんと一緒にいたいー

ハーヴェスト：残念ながら無理だな

チャム：戻ってたのかよWWW

いちか：何か予定はあった？

ハーヴェスト：んだ、わしの友達がお食事に誘ってくれるとき。友達少ないから行かないと捨てられる^-^

チャム：寂しいw

いちか：おk　チャムも準備するー

チャム：ハアー　気が乗らない・・・

チャム：ハヴちゃんの友達って男でしょ？

ハーヴェスト：他に想像できるか・・・？

チャム：いんや？

ハーヴェスト：なら聞くなよwwwwww少しは察してくれw
wwwwww

チャム：^p^

ハーヴェスト：はらたつ子www

ハーヴェスト：んじゃまたのーノシ

ハーヴェストさんがログアウトしました。

チャム：いちか、ハヴちゃんって謎よねー

いちか：？

チャム：ニートのくせに用事多くない？

いちか：ニートかどうかは分かんないよー

チャム：だよねー でも社会人のハヴちゃんて想像できんわー

いちか：さて、私も落ちて支度するね。チャムもさっさと準備しな
よ？あとでメールするから

チャム：あいお

いちか：またねノシシ

いちかさんがログアウトしました。

チャム：^^ノシ

憂鬱な時間がやってくる。私は合コンが嫌いだった。大学内では女子グループでたまに催される合コン。私は男と付き合う気がないことを明言しているが、そんな私を心配し、一花はいつも私を誘う。女子グループ内での付き合いもあるのだけれど、やはり余計なお世話であることに変わりはない。今日は大学近くの飲み屋に集合だった。一花は可愛い淡いブルーのワンピースにシンプルなネックレス。髪は綺麗にアップされていた。この娘は清純を地で行っている。趣味はファンタジー小説を読むことだそうだ。メルヘンという言葉がこれほど似合う女の子も今の社会では少ないだろう。故に私は一花が合コンに行くことに少しだけ反発する気持ちがあった。合コンなどに行かなくても、彼女ならきつと素敵な彼が出来るに違いない。少なくとも合コンなどに参加する男に彼女は勿体無いと思う。今日もお嬢様なオーラを発しながら私に駆け寄ってきた一花と対照的に、私はシンプルなTシャツに赤いジーンズ。およそやる気の無い格好で彼女を驚かす。

「智ちゃん・・・。またそんな格好で・・・。大学にはスカートで来るくせになんで・・・?」

「やる気出ないって言ったでしょ? いいのよ。ちゃんと化粧だけはしてるから。」

「智ちゃんは本気出すと可愛いよ? わざわざ可愛くない格好しなくてもいいのに。」

「わざと可愛くない格好してるのよ。これで男の気を惹かなくて済むわ。」

「勿体無いなあ……。」

私と一花が話していると、大学の友達も現れた。彼女達もそれなりにやる気のある格好をしている。バッチリ化粧をし、勝負服に身を包んでいた。

（すっごいやる気だなー。でも一花のほうが可愛いよね……。
何か素材が悪いって言うか着こなせてないし……。）

内心ですごく失礼なことを思いながら、男の登場を待つ。待ち合わせ時間は19時50分。1分でも遅刻したら私は帰る気でいた。しかし、私の期待も虚しく3人の男が19時45分には現れる。こちららは4人。男が1人少ないと言うのも失礼な話ではないだろうか？

「あら？結城君。そっち3人？」

私達の代表である企画した女子が相手のユウキ君という男に話しかけた。

「ああ、山ちゃん悪い。もう来ると思っただけどさ……。」

山ちゃんというのは企画した女子。山岡晴美という名前だ。だから山ちゃん。

「あ、来た来た。おい、アキバこっちだよっ！」

今度はアキバか。秋葉系だったら笑えるのにと思いつつユウキ君の手を振る方向に目を移す。そこには可愛らしい車が止まっており、中から少し背の高い男が出てきた。あの狭そうな車に似つかわしくない大柄の男だ。私の身長が165cmあるが、少しヒールの高い靴を履いているにも関わらず、彼の目線は頭の上にあつた。きつと180ちよつとはあるだろう。顔もキリリとした感じで、他のチャラ男とは一線を画している。彼も少しやる気を感じないTシャツにジーンズ。腕には日本製の時計を嵌め、髪はラフに何も付けずに適当に櫛で梳いただけという感じだ。

「どういうことだ？」

それがアキバと呼ばれた男の第一声だつた。どうやら合コンとは聞いていない様子。ユウキ君はそんなアキバ男を駐車場の隅に呼び寄せ、何やら話している。少し私のほうをチラチラ見ているのがいけ好かない。最初から低いユウキ君の評価は私の中で一気に落ちる。アキバ男は腕組みしながら何度か頷いていたが、やれやれという顔をして皆に合流した。

「じゃあ、中に入りますかっ！」

テンションが高いのがうざい。ユウキ君と以下2名の男は、楽しくて堪らないという顔をしている。アキバ男だけは列の最後尾に少し離れて、ボキボキと指を鳴らしながら付いてくる。予約していた大きめの個室に8人は入る。全員が小鉢のお通しを置かれ、最初は生ビールで乾杯ということになったが、アキバ男だけはコーラを注文した。車で来たからだ。所謂ハンドルキーパーという役なのかもしれない。

「一人だけKYな奴が居ますが、気にせずにつ！今日はお互いの親

睦を深め、大いに楽しみましょっつ！！！！」

ユウキ君のお決まりの言葉で始まり、男から順に自己紹介を始める。今時こんな合コンもないだろうと思う。まるでお見合いだ。男達の名前は私の記憶には残らない。実際に他の2人の男は名前を名乗ったにも関わらず、私は彼らの苗字すら覚えなかった。いや、聞いていなかったと言うべきか。ただ目の前に座ったアキバ男のつまらなそうな欠伸を目の端で捕らえ、その仕草を観察していた。彼は自己紹介中にいきなりタバコを取り出し、一言「吸いますから近付かないように。」と言うと部屋の隅に背を持たれてスパスパやりだした。そして自分の自己紹介になると、「俺は数合わせだから気にしないで。皆は勝手にやってくれ。」という言い草。完全に空気を読まない人と判断する。ちょっととした苛立ちが私の中に芽生え、一花は面白い人だと私に小声で耳打ちした。

「おいおいアキバ、少しは空気読んでくれ。こいつの名前はアキバミノリって言うんだ。今日は1人来れなくて急遽呼んだから機嫌悪いのよ。みんなゴメンネ。」

ユウキ君が申し訳なさそうに女性陣に声をかける。私はやる気のない自分のことは棚に上げて、このアキバミノリに腹を立てていた。

(ちょっと失礼すぎないこの男……。まあ女が勝手に寄ってきてますっつてルックスだけど、調子に乗ってるんじゃない?)

アキバミノリは、こちらの鋭い視線に気付いたが、少しだけ口の端に笑いを浮かべてそっぽを向いた。今、絶対に鼻で笑ったに違いない。そこに山岡晴美が席を移してきて、アキバミノリにアプローチを開始するが、意に介さない様子であしらわれている。

「ねえねえ、茶霧さんって経済学部でしょ？」

ユウキ君が機嫌の悪い私に話しかけてきた。私は生返事だけを返す。あなたに興味はありませんと態度に出さないと、学内で会った時に声を掛けられるからだ。下手すればそのままお茶に誘われる。そんなことは真つ平だった。こんな髪を明るく染めた男など、眼中に無い。そんな私の冷たい態度にも関わらず、ユウキ君はさらに質問をぶつけてくる。

「俺は工学部なんだっ！こっちは女の子少なくてさ、こんな合コンでもないと女の子と知り合うチャンスも無いわけだよ。もしかして俺のこと軽い男だと思ってる？だとしたら心外だな。俺はけっこう誠実だよ？今日はせっかく知り合っただし、お互いにもっと楽しもうよ？今日は2次会3次会まで企画してるから、絶対参加して行ってね？」

私が聞きもしないのに、ユウキ君はペラペラと喋る。今日の狙いは最初から私だったのかもしれない。先ほどのアキバミノリとのやり取りで薄々感じていたが、予感が確信に変わる。一刀両断にしておかないと、後々面倒なことになりそうだ。

「ねね、番号とアドレス教えてよ。」

「悪いけど。」

「ん？」

「私、髪を染めてる男って嫌いなんです。」

「。。。。。」

「それとお喋りな男もね。」

ユウキ君の顔が見る見る曇った。少し可哀想だが、気のある素振りで男を振り回すのはもつと悪いと思う。だからいつもの如く、適当に理由を付けてバツサリと斬り捨てた。ユウキ君は小さく「そっか、ごめんね……。」と呟くと私から離れて行った。当然このやり取りは大つぴらに行ったわけではない。場の空気を一気に変えてしまふので、いつの間にか皆に気付かれないようにやる術を私は身に付けていた。ただアキバミノリだけは、こつちを見てニヤリと笑っている。全て見ていたらしい。他の2人も同じように適当な理由を付けて斬り捨てると、やることのなくなつた私は、暇つぶしにアキバミノリの対面に席を移す。うちの女子2人も、先ほどアキバミノリで撃沈しているのをこつそり見ていたので、明らかに今まで合コンで出会ってきた男とは違うコイツに少しだけ興味が出たのだ。

「ねえ、アキバ君でいいのかな？」

「ああ、あんたはサギリさんだよな？」

「そつよ。茶色い霧で茶霧。名前は智よ。知るの下にお日様の日で『とも』。アキバ君はどんな字書くの？」

「俺は秋の庭でミノリはそのまま実行の実で『みのり』だ。よく『みのる』と間違われるけどな。」

「そっか、秋庭君って今日は数合わせなんですよ？」

「そつだよ。そついうあんたも数合わせか餌でしょ？」

「餌？」

「そそ、あんた目当ての男を呼び寄せらんだよ。所謂撒き餌だ。あんたの名前で男を集めてるんだよ。気付いてないのか？」

「いやいや、皆が私に彼氏を作ろうとお節介を焼いてくれるだけよ。そんな気毛頭無いんだけどね。」

「いやいやいやいや、あんた餌だよ。経済のサギリトモは美人で農学部でも有名だもん。その名前出せば合コンで男集めるのなんか簡単でしょ？俺も実際見て納得したよ。でもやる気ねえカツコしてんな？」

「褒め言葉として受け取っとくわ。でもやる気ないのはお互い様でしょ？あなたも相当やる気ないわよ……。」

「俺は飯だつてんで来ただけだよ。呼び出されたのもさつきだしな。最初から女が来るって分かってたらもう少しは空気読むよ。今日の態度はあいつらに対する当て付けだ。あんたらにも不愉快な思いさせて悪いとは思ってるんだけどな。でももうすぐお開きみたいだから、やっとゆっくり出来るよ。」

「へー、いつもそんなじゃないんだ？」

「流石にいつもこうだと友達も出来ないだろうが？コミュニケーション能力くらいあるわ。でも今日はそんな気分になれない。家に帰ってゆっくりとゲームでもするよ。猫のご飯もまだだしな。腹空かせてっから早く帰ってやらないとね。」

「猫飼ってるの？」

「ん？ああ、最近だけどな、捨て猫を拾ったんだ。3匹いたんだけど、箱の中で2匹は死んじゃっててさ、唯一の生き残りが俺の部屋に居るわけだよ。マンションの裏に穴掘って埋めてやったんだ。切ない世の中だよなあ。あんな可愛い子猫を平気で捨てる奴の気が知れんよ、マジで。」

「マンションって猫飼っていいの？」

「そこに食い付くな……。うちのマンションはOKなんだよ。猫って可愛いぜ？毛もモフモフしててさ。俺が帰ったらニヤーンって鳴きながら走ってくるのよ。飯食ったらゴロゴロいいながら膝の上で寝てね。今は女より猫だな。」

「男の一人暮らしに猫って少し悲しいような気もするけど、猫が可愛いつてのは同意ね。うちも猫飼えたらな。」

「お前のとこ猫ダメなのか？」

「普通のアパートはそうよ……。あんたのアパートが異例なのよ。」

「そつとも言う……。」「

「あれ？智が男の人と仲良く話してるのって初めて見たかも？」

ほんわかした言葉が横から聞こえた。一花だ。彼女も他の男に執拗なアプローチを受けたようだけど、綺麗に受け流してきたらしい。天然の一花は口説かれていることすら気付いていたか微妙なところだけ。

「仲良くないわよ。猫の話で少しだけ盛り上がったただけなんだから……。」

「猫？アキバ君は猫好きなの？」

「飼ってる。」

「行く。」

「はい？」

「一花？」

「猫見に行く。」

「行ってくてあんた……。」

呆気にとられたような秋庭実。少し焦った様子がおかしい。

「猫触りたい。」

「いやいや、俺って一人暮らしだよ？」

「何か問題あるのそれ？」

「一花、大問題よ普通は……。」

「男の一人住まいに女が来るってことは大問題でしょ……。」

「猫と遊ぶだけじゃダメ？」

「まあ俺は構わんが・・・ね？」

「私が許さないわよ。」

私は断固として反対した。一花を男の家になど行かせるわけにはいかない。最悪の場合貞操の危機だ。

「だそうだ。」

秋庭実は少し笑いを浮かべて残念というゼスチャーをする。

「でも行く・・・。」

「一花っ！」

「智も一緒に行くよね？」

「え？」

いつの間にか時計は夜の10時を回っていた。

第一話 冒険者（後書き）

クレリック：回復専門職。上級職になると高レベルのヒールを覚える。チャムの職

バッファー：エンチャンターとも言う。身体能力をアップさせる魔法を使う。バイキ トとかそんなの……。いちかの職

ハーヴェストはウォリアー：様々な武器を使いこなす近接戦士系の職業。

茶霧 智（さぎり とも） キャラクター：チャム

MMORPG「冒険者」を楽しむ美人。男嫌い。20歳
県内のある国立大学 経済学部

神崎 一花（かんざき いちか） キャラクター：いちか

茶霧智の友人。同国立大学に通う学生。経済学部。19歳

ハーヴェスト

MMORPG冒険者を楽しむ自称二トの30男。チャムの一番の友人。変わり者

秋庭 実（あきば みのり）

同国立大学に通う学生。合コンで2人と知り合う。農学部。20歳

神崎一花は他作品にも出ている同一人物です。あの事件が起こらなければというifの設定で登場しています。だって作者は一花が大好きなんですもの。今度こそ幸せになって欲しい。

第二話 ハネムーンサラダ（前書き）

一花と実。鋭い方はこれだけで薄々感じていたでしょう。

このタイトルッ！ええ、このエピソードはある漫画から引用した物で溢れています。二宮ひる先生、あなたの作品が大好きです。2人の名前はこの素敵な作品から引用しました。主役だけは自力で考えてますが、もうね、名前考えると山田太郎しか浮かばなくなってきました……。

第二話 ハネムーンサラダ

第二話 ハネムーンサラダ

一度清算し、合コンのメンバーは居酒屋を出る。男女8名はさすがに大人数だ。ガヤガヤと談笑を奏でながら、幹事の2人（ユウキ君と山岡晴美）以外は外に出て夜の涼しい風で体の火照りを覚ました。一花は秋庭実と猫の話に夢中になっていた。私はそんな2人を横目に見つつ、絡んできた男Aと男Bを冷たくあしらう。まだ未練があるような顔付きだったが、やんわりと断ると食い下がるので分り易く振ることにした。

「今日は楽しかったです。もう会うことは無いと思いますが、今日のことには忘れません。」

ニツコリと笑顔を浮かべ、男Aと男Bにそう告げる。「もう会うことは無い」がポイントだ。大抵の男はこれで引き下がる。

「クツクツク……。すげえなああの女。」

どこからか押し殺した笑い声に混じって私の悪口が聞こえた。もちろん出所は分かっている。神崎一花が困ったような顔をしながら口の前に人差し指を立てて「シー、聞こえたら怖いよう」などと言っていた。

「アキバクン。」

「ハイハイ、ドウシマシタ、サギリサン？」

「コロスワヨ？」

「マジこえええっ！！！！」

私と秋庭実のやり取りはこれだけだったが、彼はもう耐えられないとばかりに大爆笑を始めた。ふざけた男だ。そんな中、清算を終えた幹事2人が戻り、これからの予定が発表される。当然だけど私に付き合う気などさらさら無い。

「私パースッ！」

秋庭実も続く。

「俺もパースッ！」

さらに一花も続けた。

「智ちゃん居ないなら私もパースウ。」

立て続けに3人もパスが出ると合コンは終わりだ。強制終了になる。

「ううう・・・、もしかして楽しくなかった？」

ユウキ君は悲しそうに呟いた。そこに山岡晴美がすかさずフォローを入れてる。案外、彼女は世話好きというか弱ってる者を放っておけないタイプなのかもしれない。

「いやいや、結城君。智は異常なんだから。良かったら私達だけで飲み直しましょう？」

もう1人の女の子も同意して、男3人、女2人の程よくバランスの取れたメンバーで飲み直すことに話は決まり、私達を置いて次の場所へ移動していった。残された私と一花、それに秋庭実は何となく顔を見合わせていたが、少しすると1人が無言で歩き出した。ポケットに手をつ突っ込んで、キーを取り出す。そして愛車に乗ると、エンジンを掛けた。

「ああああ、秋庭君待ってえええええっ!!!」

男の一連の動作を呆気に取られて見ていた一花が、慌てて車の前に立ちただかる。いくら可愛い小型の車でも、轆かれれば死ぬというのに大胆な行動だと思った。普段は大人しい一花だが、時に信じられないくらい大胆なことをする傾向があった。私も数度だが、口を開けてポカンとしたことがある。彼女の名誉のためにここでは言えない。

「あ、秋庭君、猫……。」

そこまで猫を見たいのかと私は呆れてしまった。猫を見に行くという話は、私も行くことで了解を得ようとした一花の案をあつきり却下して、立ち消えになったはずだったのに。

「あれ本気だったのね……。いや、乗りなよ一花ちゃん。」

「やったっ!!!」

嬉しそうに助手席のドアを開け滑り込む一花。私はしばし時が停止していたのだけど、手を振る一花を見て正気に戻る。今度は私が車の前に立ちただかる羽目になった。

「待ちなさいっ！！！」

またしても発進を妨げられ眉を顰めながら秋庭実が窓を開けると、私に向かって手招きした。

「まだ何かあるのか？心配しなくても取って食ったりしねえから。」

取って食わない保証など無い。寧ろ、ほとんど100%の男が美味しく頂きたいのではないのかと思う。この男が赤いリュックの女子やベンチに座るツナギの男にしかときめかないなら話は別だけど、そんな趣向の男などそうそう居ないと私は知っている。

「そんな言葉で騙される訳ないでしょう？私も行くわっ！」

「この車ってさ……。」

「いいから乗せなさいっ！！！」

「いや、だからね……。」

「さっさと開けてっ！」

「もういや、乗り心地は保証しねえからな？」

「何を言って……」

男は面倒臭そうに何やらゴソゴソしていたが、車の後ろで何かが外れる音がする。よく見るとトランクが口を開けていた。

「何の真似かしらね……？」

「いや、だから見たらわかるだろう？」

まだ状況を理解しない私に一花がクスクス笑いながら説明する。

「智ちゃん、この車は2人乗りだよ？」

「・・・嘘。」

ようやく状況を理解した私。つまり秋庭実は、もう乗れないからトランクに詰まっっていると私に言いたかったらしい。冗談にも程がある。

「な？だからあんたはもう帰りなさい。」

「あなたの家って遠いの？」

「どうかな・・・。ここからなら車で10分くらいか？」

「じゃあ、私から案内して、それから一花を迎えにくれればいいわよね？」

「ハア？」

「あんたが一花を乗せて行った後、戻ってくる保証なんか無いでしょうつ！」

秋庭実はまた顔を顰める。そして無言で車から降りると、居酒屋に面した市道に向かって歩き出した。何をしているのかと腕を組んで見ていると、手を上げてタクシーを拾う。それから運転手と2、3

会話をしていたが、やがて私を手招きした。

「この運ちゃんに道は説明してるから、あんたはタクシーで行け。心配なら一花ちゃんも連れて行けばいい。ほら、金だ。」

秋庭実は私の手に千円札を2枚握らせ、一花を車から呼び寄せ事情を説明した。一花は少し残念そうな顔をしていたが、すんなりとタクシーに乗り込む。秋庭実はそれだけ確認すると、愛車に乗ってさつさと出て行った。一人置いてけぼりを食らった私に、タクシーの運転手が声を掛けた。

「お姉さん、乗るの？乗らないの？」

タクシーに揺られながら、私と一花は見慣れぬ景色を目で追う。タクシーのメーターはすでに1600円まで上がっていた。深夜割り増しだとしても、結構な距離だと思う。やがてタクシーは停車して、清算が行われた。目の前には20階くらいはある大きなマンションがある。私は謀られたと思ってしまった。だって学生が住める物件じゃない。

「あーのーおーとーこおおおおおつー!!」

怒りで肩がブルブルと震えている私を余所に、一花はキョロキョロと辺りを見回す。この娘は騙されたとも思わず、必死に秋庭実を探しているのだ。しかし、10分待っても秋庭実は現れない。一花は途方に暮れている私を尻目に、意を決してマンションのエントラン

スに向かう。こんな大きなマンションのエントランスなど用も無いのに入るのは気が引けたのに、一花は構わずに進んで行く。

「ちょっと、一花どこ行くのよ？」

「え？秋庭君来ないから、管理人さんに部屋まで連絡取ってもらっただよ？」

「・・・あなたここにいつが住んでると本気で思ってる？」

「うん？」

「私達、騙されたって気付いてる？」

「アハハッ！まさか。」

「あんたって人を疑わない性格だったわね……。将来は詐欺に気をつけなさい……。」

その言葉を聞かずに、一花はあっさりとエントランスに入り管理人と何か話し始めた。管理人は好々爺と言った感じのお爺さんだったけど、すぐに傍の電話機でどこかに電話を掛けた。

（まさか・・・、警察を呼んだとかじゃないわよね？）

私は不安になり、一花の後を追ってエントランスの中に入る。何事か話していた管理人は、受話器を置くとオートロック式の玄関まで出てきて、暗証番号を打ち込んだ。これは管理人用のパスなのだろう。ポポピパポピツと音が鳴り、玄関があっさり開いた。どうやら中に入れてくれるらしい。訳も分からない私をまた置いてけぼりに

して、一花は手を打って玄関の内部に走りこむ。そしてエレベーターのボタンを押した。

「……1507号室ですよ。早く入らないと扉閉まっちゃうよ?」

一人だけ取り残されている私に管理人さんはそう言っつて、腰をトンと叩きながら管理人室に戻っていった。

「智ちゃん、置いてくよ?」

まだ混乱状態の私に一花の暢気な声が掛かり、私はやっと玄関をくぐった。

エレベーターは静かに上がっていく。独特の高揚感に私は緊張を強くした。別に悪いことなどしていないのに、喉が渴き手に汗を握つてしまう。秋庭^{あひの}実^{じつ}は一人暮らしだと言っていた。こんなマンションに一人暮らしなんて、どこかのボンボンなのだろうか?

「何かすつごいところに住んでるね。秋庭君つてお金持ちなのかな?」

相変わらず物怖じしていない一花に、私は軽く溜息を吐いた。お気楽なものも大概にして欲しい。

「もう何がなんだか分からなくなってきたわね……。猫見たらさつさと帰ろつ?」

「えー、1600円も払ったのに勿体無いよ。」

「あなたのお金じゃないでしょ……。」

「そだね。智ちゃんゴチになりますっ!」

「私のお金でもないわよ……。」

「……あれ?」

「秋庭君のお金よ。でもまあこんなところに住んでる人なら端金だったみたいね。」

「ふむ、やっぱりお金持ちなのね……。」

その時、エレベーターが止まり扉が開いた。ここは15階だ。長い廊下にポツポツと扉や窓が付いている。廊下は吹き曝しではなく、ちゃんと窓が付いていて夜景が綺麗に見えた。この作りからも、やはり高いマンションであると思ってしまう。2人で部屋の番号を見ながら歩いて行くと、6番目の部屋、この階の角部屋が秋庭実の家だった。1504号室は存在しないようだ。4は縁起が悪いとかいう理由だと思う。目的の部屋に辿り着くと、ドキドキしながらポタンを押す。一花と管理人のやり取りは聞いていなかったの、ここが秋庭実の部屋だとは確信が持てなかった。チャイムが流れると、数秒してから前触れも無くドアが開いた。普通はインターホンで何か反応があるだろうと思う。私は危うく鼻をドアで潰されるところだった。

「あ、危ないわねっ!」

「どうでもいいが入らないのか？」

部屋は驚くほど広かった。きつと20畳くらいあるに違いない。自分の狭い8畳ワンルールの倍以上の広さがある。それにキッチン、バス、トイレ、寝室、他にも2個ドアがあつた。一家族が楽に生活できるスペースがある。世の中の不条理を呪いたくなる光景だ。自分と歳も変わらない男が、こんな居室を自由にしていると思うと理不尽に腹が立つた。当の本人は、台所で適当に料理している。何でも腹が減つたからパスタを作っている最中だつたらしい。いい匂いが仄かの漂ってくる。私はというと、通されたりビングのソファに腰を掛け、一花と一緒に猫と遊んでいた。秋庭実は今居ない。奴がキッチンにいる間に猫を堪能しなければならぬので、必死にその感触を楽しんだ。

(最高・・・、何この可愛い生き物・・・。)

私はそれほど動物の映像やぬいぐるみで騒ぐタイプじゃない。でもこの小さい毛玉には、私の琴線に触れるものがある。その一挙手一投足は全てが愛らしい。この毛玉を胸に抱く一花が少し憎たらしく見えるほど、私は夢中になってしまった。持って帰りたい衝動に駆られる。

「あんまりコネコネするなよ？怒ると鼻とか耳とか噛むぞそいつ。」

不意にパスタの入った大皿を持った秋庭実が部屋に入ってきて口を

開いた。いい匂いが鼻をくすぐる。そういえば先ほどの合コンではほとんど飲み食いしていなかったことに気付く。空腹を認めてしまつと私の胃腸は激しく自己主張を始め、きゅるるゝんと情けない声を上げた。部屋の空気が凍りついた気がした。一花は啞然とした顔で目を真丸く開いている。秋庭実はテーブルに皿を置いた姿勢で固まつた。私はと言うと、お腹を押さえた格好で下を、フローリングの床を眺めて木目の年輪を数えるしかなかった。最初に動いたのが秋庭実だった。何も言わずにキッチンへ戻ると、木製のでかいブラシのようなものと皿を3枚もって現れる。さらに引き返すと、フォークとスプーンを3本用意してテーブルに並べた。一花は猫を抱えたまま、無言でテーブルに座る。私はまだ年輪を数えていた。秋庭実はさらにレタスを千切つただけのサラダをテーブルに並べる。そして無言でテーブルに着くと、サラダとパスタを自分の皿に盛り合わせ、黙々と食べ始めた。一花は凍りついた空気を融かそうと懸命に口を動かす。

「ねね、このサラダってさ、意味深だよね？」

「そうか？材料がこれしかなかったんだよ。味気なくて悪いな。俺はドレッシングを掛けない人だからそのまま食ってくれ。」

「あー、えつとね。これってレタスだけじゃん？」

「そだね。」

「レタスオンリーッ！」

私はまだ木目と睨めっ」。

「レタスオンリーだな。」

「レットアスオンリーッ！」

「発音ちげえぞ？」

「むふふ、Let us onlyだよ。」

「私達だけにしてくれって意味か？」

「うん。」

「そっか、Lettuce onlyとLet us onlyを掛けたんだな。よく考える。」

「これはね、新婚さんや恋人達が、私達だけにしてくださいって意味で頼むの。その名もハネムーンサラダって言うのだった！」

「京都でお茶漬けを出されたら帰れって意味と同じだね……。」

私はまだ年輪を数え終われずに呻くように呟いた。

「ふえ？」

「いいわよ……。私帰る……。」

私は無性に自分が惨めに思えてその場から立ち去ろうとした。

「あ……。智ちゃん違うのっ！私そんな意味で言ったんじゃない……。」

「いいのよ。」

何だか涙が出そうだった。私のお腹の音で先ほどまでの雰囲気は消え失せ、一花まで空気を換えようと変なトリビアを披露する始末。何だか全て自分のせいと思えてきた。ここで帰ればこの猫とも今生の別れになるだろうし、何とかして残りたかったがプライドも私の邪魔をした。こんな恥を晒してまで残る気にはならなかった。

「腹の音くらいで何をいじけてんだか……。どうでもいいが冷める前に食ってから帰れよ。電車でもまた同じ目に会うぞ?」

私の気持ちを察したようなタイミングで秋庭実の悪態が聞こえた。まだ私を辱めたいらしい。

「いいか?これは皆で食うために作ったんだぞ。お前らがあの3人にずっと絡まれて飯もまともに食べてないのくらいお見通しなんだよ。それに人に振舞われた物は完食するのがマナーじゃないのか?」

「悪かったわねっ!マナーくらい守るわよっ!」

私は怒りを覚えてテーブルに着く。猫がヨチヨチ歩きで私のほうへ歩み寄ってくると、ポンと肩に飛び乗った。思わず笑みが零れる。

「ほら、ダンゴムシもまだ居ろってさ?」

「うん、そだね。」

「うんうん、ダンゴムシちゃんもそう言ってるし、頂きましょう。」

それから私はパスタを口に運ぶ。オリーブオイルとバジルの香りに

ツンと辛味がありアクセントになる。これは何と言うパスタだったか思い出せなかったが、素直に好きな味だった。

「どうだ？悪くないだろう。」

「うん、美味しい……。」

「ダンゴムシはこっちだ。お前のもちやんと用意してるからな。」

そういうと少しお湯でふやかしたカリカリを小さな器に入れてテーブルに置く。肩から猫が飛び降りて、ムシヤムシヤと食べ始めた。

「よかったねえ。」

一花は本当に嬉しそうに笑いながら猫を見ていた。そしてふと何かに気付く。

「ねえ、さつきから違和感なく呼んでるのっておかしくない……」
「？」

「何が？」

秋庭実は怪訝な顔をした。

「いや……、ダンゴムシって……、この子の名前じゃない……
よね……？」

「そいつがダンゴムシだぞ？」

『いやあああああああああ……！……！……！……！……！……！……！』

当然のように広い室内に女2人分の悲鳴が木霊した。

第二話 ハネムーンサラダ（後書き）

ダンゴムシは次話で改名されるでしょう。

丸まったらみたらし団子に見える + 噛み付くから虫 = ダンゴムシ

秋庭君の素敵な発想力に皆様も脱帽でしょう。作者はことういう意味の無い設定こそ力を注ぐべきだと考えています。何でダンゴムシなんだと思った方の疑問も氷解しましたね？

今回はゲームパート無しです。30ニート君の出番はありませんでした。これからきつと活躍してくれます。たぶんね・・・へ）。、
。（）

第三話 萌える闘魂（前書き）

何だかんだでもう3話目ですね。けっこう誰も見ていないので気兼ね無く書けます。

反応が無いのは寂しいけれど、まあ練習と思えばいいのかな？w
この『冒険者』は『Lineage?』と言う実在のオンラインゲームを元に勝手に設定をいじっています。あんまりパクりすぎも悪いので、適度に違う設定にしていると書いた具合です。

第三話 萌える闘魂

第三話 萌える闘魂

話題は主に子猫の新しい名前だった。秋庭実が言うには、動物病院にはすでにダンゴムシで登録したと言う。この愛らしい茶色の毛玉を、受付のお姉さんがどんな気持ちでダンゴムシと登録したか分からないが、きっと不憫に思ったに違いないと思う。私は断固として改名を奨めた。この先、ずっとダンゴムシと呼ばれるこの猫が堪らなく可哀想だった。一花も顔を真っ赤にして改名を求める。秋庭実が出してきたルーズリーフにシャープペンシルを持つと、新しい猫の名前候補を書き上げていく。

「ん〜、茶色いしメープルとか？」

「待て待て、雌なんだからメートルが良くね？」

「いやいや、それって国民的ヒロインじゃないの。そんなベタなの嫌よ。それに語呂が似てるってだけじゃない。」

「智ちゃん。」

「何よ一花？」

「いや、猫の名前……。」

「却下。俺が寂しい男と思われる。」

「う……。」

「私も夜な夜な名前を連呼されるなんてゴメンナサイだね。悪夢を見そうよ。」

「言うねえ。まあ俺もそれはゴメンだ。」

「茶色、ブラウン、ロングヘア、尻尾がフサフサ。この子の特徴をもっとこう生かしましょう。」

「茶色なら智ちゃんの苗字にも入ってるじゃない。茶と霧ちやむでチャムとかどう?」

「一花、それって意味分かってて言ってるでしょ?」

「うんっ!」

「却下ね。」

「く。。。。」

「チャムね。響きはいいな。それでいくか?」

「だよねっ!だよねっ!」

「ちよっとっ!一花。」

私は慌てた。自分の名前ではないが、大事な分身の名前だ。付けた理由は一花が述べたとおりで、実に単純だった。一花の「いちか」よりはマシだと思うが、やはり気恥ずかしい。しかし、一花の強引な奨めもあって、秋庭実^{あきね}はチャムで決定してしまった。もしくはダ

ンゴムシの2択を迫られ、止む無く私も同意せざるを得ない。それから一花は食器を洗い、私はTVを見ながらチャムと戯れ、秋庭実是他の一室に入ってしまった。客が居るというのに、無礼な男だと思っただけで、私には都合がいい。思う存分チャムをこね回す。じやれて噛み付くが、それもまだ子供の力でさほど痛くない。寧ろ口の内側の上辺りがムズムズし、背筋がゾクゾクして気持ちが悪かった。決して痛みで快感を覚えるタイプではないので悪しからず。やがて一花も加わり、楽しい時間は我を忘れさせるほど私達を熱中させて、時間も忘れてしまっていた。

時計は午前の2時を指していた。私は我に返って啞然とする。他人の家で、しかも男の家でこんな時間まで何をやっているのかと冷静に考えてしまう。一花はすでにおねむで、チャムを抱いてソファでウトウトとまどろんでいる。私達がもう終電を逃していることは明白で、帰るには徒歩かタクシー、若しくは秋庭実を叩き起こして車を出してもらうくらいしか選択肢が無かった。

(そう言えば、秋庭実は何をしてるのかしら？あれから一度も見えない気がするわ・・・。)

私は一花とチャムを起こさないようにソツと席を立つと、リビングのドアを開けた。そして廊下に立つ。左右に3つのドアがあり、1つは寝室と思われる。ドアの前に「Don't Disturb」の札が掛かっているからだ。一人暮らしなのに無意味な物がある。

(まさか寝てるなんて事は無いはずだから、このどっちかね・・・。)

私は寝室は無視して、廊下の右に2つ並んだドアを選択。あとは二者択一だ。さらに右のドアを選択し、ノックしてみる。返事は無かった。軽く舌打ちし、左のドアもノックする。また返事が無い。

(もしかして寝てんのかよっ！)

私は深呼吸すると寝室の前に立った。男の寝室など入るのは初めてである。ナニをするわけでもないのに、無性に緊張した。数秒胸に手を置いて自分を落ち着かせる。そしてノックをした。返事が無い。

「どこだよっ！」

ついに声が漏れた。すると、後ろのドアが何の前触れも無く開く。ギョツとして振り返ると、眉を顰めた秋庭実の顔があった。どうやら最初の部屋が当たりだったらしい。ノックで出て来いよと思う。

「夜中に大声出すなよ……。何か用か？」

「ノックしましたけどね……。って言うか、反応してよっ！」

私はつい声のポリウムが上がってしまった。私のドキドキを返して欲しい。勇気を出して寝室までノックした自分が恥ずかしい。

「うるさいな……。ヘッドフォンを付けてレポートしてたんだよ。明日の朝一なんだよな。」

「あら、勉強なんてしてたのね？意外だわ。」

「俺だつて学生だぜ？しかも農学だからな。レポートめっちゃ多いんだよ……。」

「理系は大変ね。でもあんた農家にでもなるの？ああ、田舎の大きな農家のボンボンか……。」

「何言つてんだ？俺の家は普通の家庭だよ。親父は公務員だ。母親は専業だし、ボンボンじゃないよ。」

「嘘吐くのが下手ねえ。こんな家に住んでて普通な訳ないでしょう？」

「ああ、これは宝くじで当たった200万を元手にデイトレードで稼いだからだよ。十分だと思ったから今は止めちまつたけどな。」

「はい？」

「だから自分で稼いだんだよ。親は関係ない。」

「幾ら稼いだのよ……。」

「教えるわけないだろうが……。でもまあ食うだけなら一生困らないかもな。」

「お……億ですかっ！！！！」

「声がでかい……。そんなにあるかボケ。」

「そりゃ声も大きくなるわよ……。」

「で、何の用事だったんだ？」

「あ、そうだった。帰りたんだけど、送って？」

「嫌なこった。自分でタクシーでも拾え。」

「こいつてどこなの？」

「ああ、ここは久留里町だぞ。」

「うちから10kmくらいも離れてるのね。一花は電車で2駅か。無茶すれば歩いて帰れるわね。一花の家に泊まるのかな……。」

「女の子をこんな夜中に2駅も歩かせるかよ。泊まってけ。」

「冗談でしょ……。」

「そこが寝室だから好きに使えよ。お客様用だから。」

「え？」

「その札が掛かってる部屋。」

「あんたの寝室じゃないの？」

「俺のはここだ。一人暮らしでそんな札付ける意味が無いだろうが？」

本当に私のドキドキを返して欲しくなった。

私は寝室に入る。すっかりとベッドはメイキングされていた。しかしベッドは1つしかない。仕方が無いので私は寝てしまった一花をベッドで寝るように誘導した。寝ぼけたまま一花はベッドに入り、猫を抱いたまま眠ってしまう。随分と猫にも気に入られたらしく、一花の腕の中から逃げ出す気配は無い。私は少し苦笑いした。だつて完全に私の負けなんだもの。

(さて、私はどこで寝ようかしらね・・・?)

一花はベッドでスヤスヤと寝息を立てている。もう1人寝るスペースはギリギリで、下手をするとチャムを押し潰してしまうかもしれないので、私はベッドで寝ることは諦めていた。あとはリビングのソファくらいしかない。歯を磨きたいが、残念ながらお泊りセットは無かったので諦める。部屋の外に出ると、秋庭実が寝室に入るところだった。中の様子が見えるが、ベッドとデスクトップのPC、TVくらいしかない簡素な部屋だった。時計がすでに3時を回っている。

「まだ起きてたのか？明日の講義あるんだろ？」

秋庭実が意外だという顔をして尋ねてきた。私は今から寝るところだと言おうとしたが、ふとある物を見つけて黙ってしまった。秋庭実がベッドに座った瞬間にPCが衝撃でスリープモードから起動してデスクトップが露になる。そこには真っ青な海と数個のフォルダとアイコンがあるだけだったが、その中に見慣れた物があったのだ。

「冒険……者……?」

まさかの光景だった。ユーザーはすでに100万人を突破していたが、自分と一花以外の冒険者ユーザーを見たのは初めてのことで、頭がフリーズしてしまう。

「どうかしたのか?」

ハッと我に返ると、秋庭実がすぐ傍に立って腕組みしながら私の顔を覗き込んでいた。私は瞬時に後ろに飛びのいたが、閉まっていたドアに後頭部をぶつける。ゴツンと結構派手な音が部屋に響いた。いつの間にか寝室内に足を踏み入れていたようだ。

「おいおい、どうした?」

後頭部を押さえて座り込んだ私に、心配そうな顔で歩み寄った秋庭実を手で制して大丈夫とアピールする。イテテと軽くもらしながら私はようやく立ち上がった。

「ねえ、あんた冒険者やってるの?」

弱弱しい声で私は秋庭実に問う。やっていなければアイコンなど無いはずなのに我ながら莫迦な質問だと思った。

「え?あー、これはほら、あれだよ。」

「どれよ？」

「前にやるうと思ってDLまでしたんだが、結局やってないんだよ。」

「は？インストールまでしててやってないの？」

「あ、ああそう、インストールまでしたんだった。」

秋庭実はしどろもどろになりながら答える。どうも歯切れが悪い。何かを誤魔化そうとしているようだった。

「やらないなら消しちゃえばいいのに……。」

私が実にシンプルな答えを教えてあげる。やらないならこんな重いデータなどインストールしないほうがおかしいのだ。

「いや……、いつかやるうと思ってたんだけどな。レポートとか忙しくてね……。」

「何焦ってるのよ？私は別にネットゲーマーを馬鹿にしたりしないわよ？だって私がやってるんだもん。」

「へ？」

「だから私もやってるんだって、冒険者……。」

「やってんの？」

「うん、もうすぐ30になるわよ。」

「こんなマゾゲーでLv30なのか？」

「そうよ、悪い？」

「いや、そんな女も居るんだなと感心しちまっただけだ。」

正確には私のチャムはLv27だ。あと4%ほどで28になる。結局合コンに来たせいで上げきれなかったのだ。ちなみに27でも1%上げるのに20分は狩りをしないとダメだ。このゲームは滅茶苦茶にレベル上げが面倒なのでも有名だった。そこがマゾゲーたる所이었다。現在のレベルキャップは50。50以上はいくら狩りをしてレベルは上がらないようになっている。所謂カスタム（カウントストップ）だ。そこまで行くと、サブの職を同じキャラクターで選べるようになる。これも難しいクエストが絡むらしいけど、私はまだまだ先の話なのでよく知らない。巷ではすでにカスタムになってサブ職を楽しんでいるユーザーも居るが、まだまだ少数だったというか、現時点で実装されて半年。ニートか主婦でもない限り、時間を限定される一般ユーザーは無理だと思う。

「で、やるの？」

「やろうとは思ってるんだ……。」

「じゃあ、今からやろうよ。私ももう寝る時間なさそうだし。今から寝たら講義に出たくなくなっちゃうわ。」

「え？今からか？」

「うん。」

このゲームは操作もなかなか難しい。クリックゲーと呼ばれる種類だけど、やり方を知らないとパーティーなどで必ずパニックになる。それを初心者の秋庭君にしっかりレクチャーしてあげようと思ったのだ。行く行くは立派な戦士に育て上げ、自分の狩りパートナーまで育てば苦労しなくなる。そしていっぱい稼いでもらって、装備を貢がせよう。そんな妄想で頭の中が一杯になる。

「やるって言ってもな……。俺はカードなんか持ってないし、ネットキヤッシュも無いが？」

「あ、大丈夫、最初のプレイは7日間無料だから。」

「だったな……。」

「あら？知ってたの？」

「やる前に色々調べる性質なんでね。」

「じゃー、さっそくアカウントから作成しましょうっ！」

最初はユーザーのアカウント作成からだった。これは現住所や名前、あとは連絡用のメールアドレス、電話番号などが必要になる。支払いはネットキヤッシュやウェブマネー等の電子マネーかカードで決算となり、手軽にやるなら電子マネーが簡単だった。月々2000円の課金になるが、それ以外は一切かからない。秋庭実は手馴

れた様子で住所や電話番号、携帯のアドレスなどを打ち込んでいく。パスワードやユーザー名は私には見せてくれなかった。これを知られると他人にも簡単にログインされるので、アカウントハックなどの危険が出る。装備をシーフし、売ってゲーム内の通貨に変え、それをリアルで売る。RMT（リアルマネートレード）と呼ばれる行為だ。現実のお金でゲームのお金を買う。そしてゲーム内でいい装備を揃えて満足する馬鹿な輩も実際に存在するので厄介だ。これは常に需要があり安定した市場となるので、中国や韓国などの業者と呼ばれる人種がゲーム内で横行するのだ。こいつらはさらにBOT（ボット）と呼ばれるプログラムを使い、キャラクターを24時間稼働させ狩場を占拠して延々と通貨を稼ぐ連中も居る。これはGM（ゲームマスター）などに通報するとBAN（追放、ゲームアカウト凍結など）されるが、それも一度や二度の通報では無理な話で、複数からある程度の通報が溜まるとやっと動くという程度だ。なぜなら個人を永久追放するやり方なので慎重にならざるを得ない。私怨などで通報する馬鹿も多数居るので、ゲーム運営側もおいそれとやれる行為ではない。それにアカウント1個や2個の凍結ではビクともせず、無限に沸いてくるのが業者という者達だ。日本語も通じないし邪魔でしかない。

「さて、認証のメールがくるはずだから待ちましょう。」

全ての操作が終わると、秋庭実が持ってきたコーヒーを飲みながらしばし待つ。やがて彼の携帯が何の味気もない電子音で着信を伝えた。

認証が終わると、すぐにゲームを起動してログインが出来るようになる。初めてログインした瞬間から7日間、計168時間が無料期間となる。私はすぐにアイコンをクリックしゲームを起動させた。立ち上がりが私のPCより数段速い。かなりのハイスペックだった。ちよつとした嫉妬が脳裏を過ぎるが、すぐにどうでもいいことだと頭の隅に追いやった。画面には幻想的な巨大な樹木が映し出されて、中央にログイン用のメッセーボードが出ていた。冒険者の象徴とも言える世界樹の画像だ。私のPCより画質が数段上で、私の脳裏に、もういいかな。とにかく秋庭実にごログインをさせた。ついに彼の冒険の始まりだった。半分は強制だったけど。

「まずはキャラクター作成からだね。何の職するの？」

「ん、補助職とか？」

「却下、ヒューマかダークエルフがいいんじゃない？戦士系でっ！」

「それって強制だよな・・・。」

「うん、でも初心者にはヒューマかな。火力はダークエルフが強いんだけど、HPが少なくて玄人向けだと思うから。」

ついでに説明しておく、このゲームは種族が数種類用意されている。ヒューマと呼ばれる私達人間に酷似した種族。ステータスのバランスが良く、初心者向け。次にエルフ、HPは低めだが、素早さが高い。さらにダークエルフ、HPは全種族中で最低だけど、火力は最強の種族。エルフとダークエルフは同じPT（パーティー）に所属出来ないなどのデメリットもある。つまりこの2つは仲が悪い設定なのだ。次にドワーフ族。工房や素材集めなどが得意だけど、火力は全種族最低。さらに鈍器しか装備できず、遠距離攻撃も無い。

お金儲けは得意だが、一向にレベルが上がらないマゾゲーの中でもマゾキャラだ。ただ女性タイプは幼女で、一部の変態男がこぞってキャラを作成している。ドワーフ娘は9割9分の中身が男だと思っただほうがいい。男性キャラはお爺ちゃんだ。最後に獣人と呼ばれる種族。男はライオンの頭部、女は猫の頭部を持つ近接戦闘に特化した種族で、主に爪を模した武器を使う。先の3種族はさらに戦士系、魔術師系から選択し、そこから上位の職に発展する。戦士系は剣闘士や騎士、弓職や短剣使いなど、様々に進化する。魔術師系は召喚士や魔法使い、ヒーラー、エンチャンターなどに進化する。つまり最初が肝心という訳でもないのだ。職はたくさんあり、レベル20に転職するまでは戦士か魔術師しかないので、そう悩む必要も無い。

「よし、これでいこう。」

秋庭実は、私が軽く説明している間にキャラの選択をし、すでに外観はカスタマイズしていた。選択したのはダークエルフの女性。ボンツキュッボンツのナイスバディーに妖艶な笑みを浮かべている。私の手が自然に動きデリートを押した。素敵なお姉さんは一瞬にして消え去り、キャラ選択画面に切り替わる。

「うおっ！何すんだこの野郎。」

「こっちの台詞よ。」

「別に女性キャラでもいいだろうがっ！」

「そこでわざわざDE（ダークエルフ）を選ぶのが舐めてる証拠よ。」

「

「おっばいでかいし美人じゃないかっ！」

「男なんて所詮は下衆よね。」

「なんでゲームでそこまで言われなきゃいけないんだ……。」

ブチブチ文句を言う秋庭実を無視して、私はヒューマの男性を選択し勝手にカスタマイズを始める。そして出来上がったのはハーヴェストにそっくりなヒューマの青年だった。やはり大好きな外観にしてしまう。髪の色が違うのがせめてもの情けか。ハーヴェストは赤、秋庭実は青の髪にする。

「ほら、名前は好きに決めちゃいなさい。」

「結局お前の言いなりかよ……。」

文句を言いつつ名前を入力する秋庭実。彼が考えたのは『燃える闘魂』だったが、すでに存在する名前らしかった。舌打ちして次に入力したのが『萌える闘魂』。あっさりと認証され、萌える闘魂は冒険者の世界に旅立った。

第三話 萌える闘魂（後書き）

やっぱり思い描いていた展開とは違ってきてますね。どこから恋愛に発展するのでしょうか？・w・

でも筆は進むんですよ。ゾンビ物2つを連載していると、同じような展開に辟易してきて、1話書くのに5〜6時間は使うわけですが、これだとせいぜい2時間で書けてしまいます。しばらくは気分転換にこっちの連載を伸ばした方がいいのかもしれませんが。主人公が女の子と言うのも新鮮でいい物です。会話以外を主観の女性視点で書いていますが、文章が他の2作品と微妙に違っているのに気付けますか？

作者はリアルではこちらのよような言葉遣いをしている気がします。

第四話 変わらない日常（前書き）

今回は茶霧さんの日常などを細かに説明してみました。あんまり面白くないね^p^

あとは冒険者というゲームのシステムなどちょこちょこ。これも説明なので面白くないね（´・`・´）

第四話 変わらない日常

第四話 変わらない日常

広大なマップの中、秋庭実の操る萌える闘魂はルーキーの館と呼ばれる場所に辿り着く。これから戦闘やアイテム使用に関するチュートリアルが始まる。私はその全てを把握しているので、簡単に説明しながら彼を最短で卒業させた。本来なら30分はかかる行程を僅か10分ほどで終了させ、ヒューマの故郷である「始祖の島」でレベル上げを開始した。町に入ると、まだ始めたばかりのような冒険者や、すでに高レベルであるう冒険者などで賑わっている。この島は、始めたばかりの人間を血盟（個人が盟主を務める小コミュニティ）に勧誘する先駆者も多数訪れるのだ。血盟に入っているキヤラは、その血盟の旗が名前の横に付くので、無所属の人間は一目瞭然となる。まだ右も左も分からない初心者を援助して共に冒険したいと願う血盟もあれば、害と呼ばれる集団まで様々な人々が集う町だった。

「ここで最初のクエストがあるけど、やる？」

「よく分からんが、やったほうがいいのか？」

「うん、経験値ももらえるわよ。」

「ならやっつくか。」

私の説明でどんどんとクエストを受けていく萌える闘魂。その間も、知らないキャラクターが声をかけてくる。初心者丸出しの初期装備にクエスト巡りをやっているから、どう見てもルーキーにしか見え

ない。そんなキャラは格好の鴨となってしまう。

「この旗うぜえな。」

「ああ、こいつらはPK血盟よ。一般人を殺して装備品のドロップを奪ったりする外道。こいつらのせいで折角集めた装備を取られて引退するプレイヤーも結構居るらしいわ。」

「どんな場所にもゴミは存在するもんだな。」

「ええ、それも一つの楽しみ方なのかも知れないけどさ。私は弱者相手に、しかもこんな匿名のゲームでしかやれないってのは社会のゴミだと思っわね。」

「恥ずかしい集団でOKか？」

「だね、最底辺だと思う。」

「弱者ってことは低レベルしか狩らないのか？」

「うん、自分達は40台なんかの強いキャラなんだけど、狙うのは大体20台までかな？強いキャラだと返り討ちにされた場合に自分が詰むことになるから。」

「負けたら詰みなのかよ？」

「そうよ。PKは名前が赤くなるんだけど、その状態で死ぬとボロポロと持ち物をドロップしちゃうの。PKKって言って、PKを専門に狩る人も居るくらいだからね。」

「ふーん、で、PKって何の略だ？」

「プレイヤーキラーの略よ。PKKはさらにそれをキルする人ね。」

「なるほどね。」

「ドロップって何だ？」

「持ち物を落とすことよ。モンスターを倒しながらお金や素材なんか拾ってるよね？それもドロップ。このゲームは死んだら物を落とすから注意して狩りしてね。」

「ああ、俗に言う遺品か。さっき見た装備の価格をこの落ちるお金だけで買うとなると相当時間かかるんだけど……。このゲームの装備って高すぎないか？」

「それもマゾゲーって言われる所以なのよね……。RMTが横行するのもそのせい。PKなんかが沸いてるのも同じ意味かな。装備を奪われるスリルも味わって欲しいみたいだけど、運営も無茶くちややると思うわよ。さすがに前回のアップデートで武器は落とさなくなっただけど、防具でも相当な値段よ。スリルがあるのは変わりないってわけ。」

「うわぁー、俺やる気無くなってきたんだけど……。」

「大丈夫よ、明日私がいい装備貸してあげるから。」

「いや……。お前らとつるむ気無いんだけど。」

「何言ってるのよっ！あんたはこれから私達の血盟『銀の翼』でー

緒にガンバルのよ?」

「ええええっ!リアル知り合いが居る血盟なんかゴメンだつての。そんなだつたらやめるわ。」

「え、本気で言ってる?」

「ああ。」

「じゃーいいわ、気が変わったら教えてね。装備は貸してあげるけど、お金貯まったら返してね。」

「あざーっす。」

「気持ちがかもってないわね。」

そして夜が明けるまで萌える闘魂は戦い続け、始発が出る6時にはレベルも7まで上がっていた。

始発に乗るために一花を叩き起こすと、私はすぐに身支度を整えた。チャムをずっと抱いていた一花は寝癖を私に直してもらいながら別れを惜しんでいる。

「チャムちゃん、また来るからね……。」

「ふみやあ……。」

後ろ髪を引かれる思いの一花を引っ張り、私達是最寄の駅に急ぐ。そして講義には何とか間に合った。ちなみに山岡晴美は昨日飲みすぎたと言って講義を休んでしまっていた。メールで出席よろしくとだけ連絡があった。何があったかは聞かないほうがいいと思い、出席簿に名前だけ書いて提出しておく。一花は黙々とノートをとっていたけど、私は徹夜の疲れもありグッスリと眠ってしまったのは秘密だ。

「智つては寝すぎ。」

「昨日は徹夜だったのよ……。ふああ……。まだ眠い……。」

「今日は昼までだからがんばろーっ!」

「一花、ノートよろしくねっ!」

「ずるいーっ!!--!」

「私もう限界なの、今日バイトだし。」

「ねね、秋庭君と何かあった?」

「何も無いけど?」

「徹夜したって……。一人で遊んでたわけじゃないでしょ?」

「うん、秋庭を私達の世界に引き摺り込んでただけよ。」

「私達の世界って?まさか……。」

「そのまさかよ、彼は冒険者になったのよ。」

「うそーっ！本当に？」

「うん、キャラの名前は押さえてるから、その内勧誘しましょ。」

「やったーっ！！これでチャムにまた会う口実が出来ちゃった。」

「その時は私も付いて行くわよ？抜け駆けなんてさせないからね。」

「ふふふふ、智ちゃん、チャムはもう私のものなんだからね。」

「まだ負けてないわよっ！」

「無駄無駄あ。」

そしてまた、私は惰眠を貪り、帰りに一花のノートをちゃっかりコピーして家路に着いた。

自宅アパートに帰った私は、まず簡単に部屋を掃除して洗濯を済ます。昨日やっていないので今日中に片付けたかった。それから、書きかけのレポートを開くと一気に書き上げた。これで来週のレポートは心配ない。来週のプレゼミで使うレジユメだったが、アダム・スミスに関しての自分なりの考察をまとめるものだった。経済学部では登竜門のような題材だ。

「ふう・・・、やっと落ち着けたわね。週末はやっぱり思いっきり遊びたいし、これも試練だわ・・・。」

それから私はアルバイトの準備に取り掛かる。塾の講師をやっているので、必ず予習は必要だった。授業は1コマ1時間半で、受け持ちは英語と数学。相手は小学生から中学生。時給は2000円と高めで、月水金に6時から10時まで働いている。これだけでお小遣いには十分な額が毎月稼げていた。学費とアパート代以外は親に頼っていない。反対を押し切って県外の大学を受けたので、無駄な世話はかけないように気を配って入学時から続けているバイトだった。バイト先までは歩いて15分。シャワーを浴びてスーツに着替え化粧を施す。人に見られる職なので、このくらいは必要だった。5時半には塾に着く。他にもアルバイトの学生は数人居たが、女の先生が多いので変なナンパに会うことも少なかった。前にナンパ目的で入ってきた男が居たけど、すぐ塾長にクビにされた。ここは学業をするところ、不埒な輩は要らないと公言している。

「おはようございます。」

「ああ、茶霧先生おはよう。」

「智先生おはよう。」

今日は若い女の先生と塾長と私の3人。私が教えるのは小学生の部と中学生の部で算数と数学をやることになっている。間に30分の休憩が入るけど、休憩時間も次の時間の予習などでトイレ以外の休憩など取れないために時給が発生するので、4時間で8000円は保証してもらっていた。9時30分に授業を終えると、次の授業の打ち合わせをして10時きっかりにタイムカードを押して家路に着

く。今日は皆がよく授業を聞いてくれたので、気分が良い。塾長は高校生の英語と数学の担当で、いつも10時まで質問などを受け付けているのでまだ教室に居るはずだ。挨拶を済ませると私はテクテク歩いてアパートを目指した。

家に帰る前にコンビニで色々と買い物を買わせる。もうすぐ使い切るコスメの買出しや、オヤツや飲み物などなど。レジで3000円ほど出す羽目になったが、快適な冒険ライフのためと割り切る。私は晩酌などしないし、タバコも吸わない。冒険のお供はチョコレートや飴玉だった。今日はいつも品切れになっている小梅キャンデーを買えたのでラッキーだった。自宅に帰り着くと着替える前にPCを立ち上げる。起動時間に服を着替え、化粧を落とし、準備が出来たら即ログイン。これが私のスタイルだ。スエットの上下に髪はヘアバンドでまとめて、とても人前に出られる格好ではないが、楽なので仕方が無い。コーラをコップに注ぎ、買ってきたチョコレート菓子を机の隅に置くと、私はすぐに冒険者のログイン画面を起動する。昨夜見た秋庭実のPCの倍の時間をかけてログイン画面が立ち上がった。LOADING画面が疎ましい。私はパスワードを入力すると、すぐにキャラクターを選択する。今はチャムしか居ないわけなんだけど、その内に新しいキャラクターも作成することを考えたほうがいいかもしれない。秋庭実も引き込んだ手前、レベルが合うキャラでも作って一緒に遊ぼうかと言う考えが頭を過ぎる。

(まあ同じ血盟には入らないって言われてるから、そこまでしなくてもいいかな?)

ゲームでは他人でいて欲しいという彼の考えも何となく理解できる。すぐに余計なことはしないでおこうという結論に達した。その間に、いつの間にかローディングが終了していた。

【血盟チャットログ】

いちか：あ、チャムキタ　　（　　。　　。　　）　　ク！！

ハーヴェスト：みつのっり！ボンバイエ！みつのっり！ボンバイエ！

萌える鬨魂：・・・

薩摩大根：チャムこん

いちか：チャム遅かったね？

薩摩大根：彼氏でもできたか？（・・・

いちか：チャム反応なしー

ハーヴェスト：同級生居るぞ？・w・

チャム：あんた何してんの・・・

萌える鬨魂：いやさっぱり・・・

氷の貴公子：彼はチャムの同級生だって？^^

チャム：そうですけど・・・

いちか：名前聞いてたから勧誘した（・・・）

チャム：いや、うちは入らないって言うてたからビックリしただけ

氷の貴公子：新しい子が仲間になって嬉しいよ^^

薩摩大根：もうすぐしたら皆ログインするからさ、狩りに連れてこ
うぜ

萌える鬨魂：いや、俺は別のところ行ってくて・・・

薩摩大根：逃がさんよ

スノークさんがログインしました。

いちか：秋庭くんも一緒にやろうよー

チャム：いちか、本名はやばいよ

いちか：あ、そだよね・・・

ハーヴェスト：あきばみのり君ってこの人は知っちゃったよ・w・

氷の貴公子：まあまあ^^ 忘れるってことでいいでしょ？^^

スノーク：盛り上がってるね？新人さん？

薩摩大根：本名を晒されなくなかったらここにいるんだ

いちか：きょうはくwwwwwwwwww

ハーヴェスト：もう逃げられんなw

氷の貴公子：今日から仲間になる当今くんでおk?^^

スノーク：当今w w w w w w w w

いちか：当今w w w

薩摩大根：てことで血盟ハントに行こうぜ

チャム - > 萌える鬨魂：あんたいいの? こうなったらこの面子止まらないけど?

萌える鬨魂 - > チャム：これが昨日言ってた囁きチャットだな。これは他には見えないのか?

チャム - > 萌える鬨魂：うん、私とあんただけの会話

メールさんがログインしました。

萌える鬨魂 - > チャム：正直しんどいけど、一花ちゃんが勝手に勧誘飛ばしてきてさ、PTだと思ったらこのざまだ

チャム - > 萌える鬨魂：笑えるわね^p^

薩摩大根：メールちゃん、狩りいくぞー

メール：いきなりですかw w w w

萌える鬪魂 - > チヤム：ほとぼりが冷めたら出て行くよ

萌える鬪魂 - > チヤム：しばらく厄介になるわ

チヤム - > 萌える鬪魂：じゃあ今日は知らないところいっぱい連れて行ってあ・げ・るわ

萌える鬪魂 - > チヤム：きしょ

氷の貴公子：いざ、巨人の塔へ^^

いちか：巨人とかwwwwwwwwwwwwwwwwww

ハーヴェスト：あそこ40台の狩場wwwwwwwwwwwwwwwwww

メール：死ぬでしょwwwwwwwwwwwwwwwwww

薩摩大根：俺が守ってやるお

スノーク：わたしは38だからおk

メール：大根なんかじゃ守れないwwwwwwww

チヤム：レベル上げられるならおk

萌える鬪魂：俺レベル8なんだが

氷の貴公子：大丈夫だよ^^ぼくが48だから死なせない^^

チヤム - > 萌える鬪魂：きしょって言うな・・・

高レベル狩場巨人の塔で、秋庭実の歓迎ハントが行われた。私も実は1回しか来た事が無い。後からログインした血盟員2人も加わり、狩りは滞りなく行われ多数の戦死者を出して幕を閉じた。終わる頃にはチャムのレベルは28となり、萌える闘魂はレベル13まで上がっていた。萌える闘魂はLv10から使用できるグレードで最強の装備を貸してもらい、その後も着々とレベルアップするだろう。私も負けていられない。早く30になって新しい装備を買わなくちゃいけない。金策が出来るか微妙だけど、それでも地道にお金を貯めて買うしかない。苦労した装備だからこそ、感動も一入ひとしおなんだ。そこは他人に甘えたらいけないと思う。秋庭実はハヴさんからDグレードの装備一式を借りていた。同じヒューマの戦士系なのでお下がりにみたいなものだ。それに20からはCグレードを着れるようになるので、案外短い付き合いになるのかもしれない。それよりも私は装備が欲しい。明日から露店放置で要らない物売りさばかなくちゃ。

第四話 変わらない日常（後書き）

銀の翼：チャム、いちか、ハーヴェストの所属する血盟

氷の貴公子：血盟主。^^を多用する人は経験上ですが痛いのが多いです

薩摩大根：血盟員。高校生らしい。

スノーク：血盟員。自称主婦。

メイル：血盟員。自称OL

血盟とは、他のゲームではギルドなどと呼ばれるコミュニティ。チャットは違う色で表示される血盟チャットがある。

チャットに関しては、一般は白、囁きは紫、血盟は青、PTは緑など、色分けされて見やすくなっている。ここでは全部白黒なんだけども・・・。

装備グレード表

E	グレ1	9
D	グレ10	19
C	グレ20	29
B	グレ30	39
A	グレ40	49
S	グレ50	

補足はこんなもんかな？次回あたりから話を少しずつ動かしましょうかね（ゝ・ゝ）

第五話 匂い（前書き）

朝も早くからおはようございます。

今日も元気なおっしゅとー……（……）

第五話 匂い

第五話 匂い

無事にプレゼミの発表も終え、私はしばしの休息期間に入った。

来年のゼミを決める大事な発表会だ。一花と2人で志望したが、一花は希望が多すぎて漏れる形になり、この教授のゼミを受けられたのは私だけだ。大企業にも太いパイプを持つと噂される教授で、毎年プレゼミから高い競争率となる。3年次から始まる本格的なゼミの前にゼミの予行演習のような形でプレゼミという物があるのだけど、ほとんどはこのメンバーで固定されるので、卒業するまで今のメンバーとの付き合いになる。理系の学部で言う研究室のような物で、これは必修の単位で合計8単位必要だった。今回の発表は我ながらうまく出来たと思う。教授にも褒められ、これで落とされることも無いだろう。だって私の発表はもう来ない。全員が一度ずつテーマを与えられて発表するのだから、二度目は無いのだ。

「茶霧さんの発表良かったわね。私にもコツとかあれば教えてよ。」

「私はもう終わっちゃったけど完全に負けね……。来年このゼミに残れるかな……。」

ゼミは12名で男9名女3名、圧倒的に男が多かった。ゼミ生の女生徒は必然的に仲良くなる。私はゼミの友人と会話しながら発表を終えた安心感を味わい、階段を降りていた。ここは経済棟の3F、個室レベルの講義室がいくつかあり、その一室でゼミは行われている。3人で階段を降りていると、背後から声をかけられた。一花だ。彼女もこの時間は別のプレゼミを受けていた。私と一花はゼミの友人等にサヨナラを言いつつ、経済棟を抜けてキャンパスの大通りに

出る。これから講義は無く、2人でカフェにでも行こうと言う話になっていた。お互い彼氏も居ないのだけど、恋人はゲームですと言うのも恥ずかしい。会話は自然と男関係になった。

「智もさく、もっと積極的に行けば彼氏なんてすぐ出来ると思うんだけど、やっぱりそんな気なし？」

「無いわよ。一花こそ可愛いんだから彼氏でも作れば？」

「ふふふ、私はもういいのよっ！」

「は？何それ？もしかして彼氏出来たのっ!？」

「うんにゃ」

「脅かさないですよ……。一瞬殺してやるっかと思っちゃった。」

「智こわっ!!!!!」

「冗談よ……。でも私の可愛い一花を誑かす悪い男は排除しちゃうわいとねっ！」

「うん、それもちょっと怖い……。でも私は今彼氏なんか要らないんだ。」

「どう言う意味よ？何か楽しいことみつけた？」

「うん、最近さく、秋庭君の家に入り浸ってチャムと遊び呆けてる。」

「・・・・・・・・・・聞いてないわよ。」

「うん、だって今話したんだもん。」

「最近ログインも少ないと思ってたらそんなことしてたのねっ！」

「秋庭君の家からログインしてたり・・・。」

「あんた達付き合ってたの？」

私は冷静を装いながら、一花の表情の変化を見る。なんとなく面白くなかった。何だか急に一花が大人びて見え、急速に私から離れて行ってしまふ、そんな悪い予感で胸が締め付けられそうだった。

「うんにゃ？」

「付き合っではないのね・・・でも遊びでそんなことしちゃ駄目じゃない。もしものことがあったら責任取ってくれないかもよ？」

「うん？」

「ちゃんと避妊はしなさいよ。」

「あー、あと半年したら病院で避妊するって言ってたわ。」

「出来てたら手遅れじゃないっ！今日からしなさいっ！！！！」

「まだ無理よ。それにまだ出来ないって。」

「そんな子供じゃないんだから・・・。生理周期もちゃんと測って、

危険日には拒否するの。分かる？」

「まだ生理きてないんじゃないかな。それにあるのかな？生理。」

「あんた何言ってるの？もうすぐ20歳の女がそんなこと言って・・・。」

「あれ？私の話？」

「他に誰が・・・。」

「あはははははははっ！！！！」

不意に一花はお腹を抱えて笑い出した。私は戸惑ってしまう。こんな反応されるなんて思ってもみなかったのだ。

「何よっ！人が心配してるのに。」

「ゴメンゴメン、でも可笑しくて。ふふふふ。」

「どつ言う意味よ・・・。」

「だって今のはチャムの話だよ。あの子は女の子だからね。それで話が食い違ってる、でも智も真剣でさ。おつかしくて。」

「な・・・。」

「私と秋庭君はそんな関係じゃないよ。何か従兄妹のお兄ちゃんって感じなのよね。」

「てことは私の早とちり？」

「うんむ。」

「あんたなんばいいよつとねっ！うち一人で本気になって恥ずかしかっ！」

私は耳まで真つ赤になってお国言葉が飛んで出た。ちなみに出身は長崎県。でもそがんことは関係なかばい。

「あはははっ！智最高っ！！！方言もつと言つてえええええええっ！！！！」

「離島出身者にそがんこと言われたなかつ！あんたもちつたあ方言ば使つてみんねっ！たまに使つと何か懐かしだよ。」

「うちは観光の島で標準語なのよ。知ってるくせにっ！」

「せからしかあつ！」

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！！！！」

「まだ笑つかつ！ずっと長崎弁でゆうちやろつか？」

「やめてええええええっ！！ひっひえひひひひひひ……。」

「あ、引き笑いになったつ！本気で馬鹿にしよんねっ！！そがんけんがあんたあ彼氏の一人もできんとはいつ！ちつたあ女の恥じらいば持たんねっ！」

「あつひやははははははっ！！！！！」

笑い転げる一花と捲くし立てる私。カフェの客がドン引きしているのに気付いた時は遅かった。2人で真つ赤になって会計を済ませると、そそくさと店を出る羽目になってしまった。

一花はまた秋庭邸で遊ぶそう、電車に乗って行ってしまった。

肉体関係は無いと公言していたが、私は気が気ではない。早速携帯電話を取り出すと、最近登録した番号を呼び出す。短いコール音のあと、少し懐かしい声が返ってきた。思えばあの夜から、あの男には会っていない。

「なんだ？どちら様でしょうか？」

「・・・あんた舐めてる？」

「おお、これはこれは、茶霧嬢ではございませんか。素で登録忘れてた。」

「今すぐ登録しなさい。」

「御意のままに。」

「聞いた話によるとさ、一花が毎日遊びに着てるそうね。」

「バレルの早いな。」

「うん、今一花がゲロった。」

「ふむ、で何だ？」

「あんた本当に何もしてないんでしょうね？」

「うん、一花ちゃんがそう言ったならそうだろう？」

「含みを持たせる言い方ね……。」

「すごい心配みたいだな？」

「当たり前でしょっ！」

「だったらお前も来れば？」

「遠いのよ、そこから。」

「迎えに行つてやるよ。家どこだ？」

「へ……？」

「俺は車持つてるんだから軽いもんだ。すぐ行くから目印を教えろ。そこまで迎えに行つてやる。」

「わ、分かったわよ……。えっと、
×郵便局分かる？」

「何だ、そんなに離れてないぞ。電車だと大回りだけど車なら10分以内だな。じゃ、出るわ。」

「ま、待ってっ！ちよつと準備するから。」

「待たない。」

一方的に電話を切られる。リダイヤルするが通じない。私は慌てて電車に飛び乗った。今居るのは大学最寄の駅だ。

(しまったぁ……。大学にすればよかったかも……。)

私は後悔しながらも、電車が早く駅に着くように祈っていた。

結局、電車の待ち時間や駅から郵便局までの時間やらで、着いたのは電話してから30分を軽く超えていた。駐車を覗くと、見覚えのある黒い車が停まっている。相変わらず可愛い車だったが、乗っている本人は可愛くない。仏頂面で腕組みをしながら一点をみつめていた。つまり私の姿をジッと睨みつけている。さっき携帯を見たら着信が3回あったけど、全部電車内で取れなかったのだ。

「あははは……。待った？」

「かなり。」

「だよね……。」「

「そろそろ帰る準備してたぞ。」

「いやん・・・、乗せてつてよお兄さん。」

「それが遅れた奴の態度か？」

「仕方ないじゃないっ！私が電話したのは大学の駅近くだったんだからっ！」

「言い訳は聞かない。で、乗るの？乗らないの？」

「乗るに決まってるでしょ・・・。」

秋庭実は無言で右手を動かすと、ガチャンと言う音で鍵が開いた。施錠していたらしい。彼の怒りは本物だろう。それでも律儀に待ち続けるのは彼の生真面目さなのかもしれない。

「ありがと・・・、待たせてごめんね。」

「最初から素直にそう言えばいいんだよっ！」

私が素直に謝ると、さっきまでの曇った顔が嘘のようにニヤリと笑い車を走らせる。私は自動車に乗るのは久しぶりだった。自分では持っていないし、男性からの誘いは全て断っている。女友達にも自動車を持っている人は居ない。そんなわけで風を切って軽快に進む自動車に心が弾んだ。車内には昔聞いた記憶のあるスローバラッドが流れ、仄かなハーブの匂いと、それに混じって秋庭実の匂いが鼻腔を擽る。女は匂いには敏感だと思う。特に男性の匂いはそれぞれが違う。私はこの匂いを少しだけ気に入ってしまった。家でもそうだったが、男性の物はその人の匂いで溢れる。女性も男性を誘うフェロモンを出しているらしいが、そんな物を気にしたことは無

かった。でも今、私は秋庭実の匂いに包まれ、少し中てられてしまったようだ。自然に頬が朱に染まっているのが自分でも分かってしまう。男性として身近に秋庭実を感じてしまっていた。彼のことを好きだと思ったことは無いのだけれど、こんな些細なことから意識してしまう。

(ああ、やばい……。これって麻薬だわ……。)

ドギマギしているのを隠すように、私は口を開いた。

「何だか喉が渴かない？」

「ん。」

短い返事。

「暑いよね？」

無言でクーラーに手を伸ばす秋庭実。

「素っ気無いよね？」

「何が？」

「あなたの態度。」

「そうか？」

「うん。」

秋庭実は興味も無いと言う仕草でギアをチェンジする。その何気ない動きにも男性らしさを感じてしまった。よく男の人が運転する姿や、タバコを吸う仕草や、仕事をしている姿にときめくと聞くが私には関係ないと思っていた。でも私も普通の女の子だったらしい。一花に手を出させないためだったのに、何でこんなことになっているんだろう。

「飲み物ほしいな。」

「もうすぐ着くよ。」

「少しドライブして欲しい。」

「え？」

「もうちょっとだけ車に乗っていたいの。どこかお奨めの場所があればけどね……。」

「意外だな。」

私も意外すぎる発言に内心驚いてしまったけど、自然に口から言葉が出た。しまったという感情があるけど、それを押し殺してさらに口は流暢に言葉を紡ぐ。

「私が相手じゃ不服かしら？」

「いえいえ、そんなことはないですよ？」

「じゃあ、このままね。」

「ああ、じゃあどこにお連れしましょうかね。」

「お任せするわ。」

「ダムなんてどうでしょう？今の時期だと風が涼しくていいんじゃないでしょうか？」

「決定ね。途中でコンビニに寄ってね？一花にも連絡しとかないとまずいし。」

「了解しました。」

「なんで敬語なのよ・・・？」

「いや、我俣姫に振り回される哀れな馬子って感じかなと。」

「ぷっ、何よそれ？」

「そのまんまの意味だよ。じゃあ、気を取り直してUターンだっ！」

くるりと車は来た道を戻り始めた。これからのドライブに私の心は期待で一杯になってしまった。

秋が見え隠れする山の中の一本道を車は進む。この車は2人乗りの軽自動車なのだが、屋根が後部のトランクに飲み込まれ、オープンカーに変貌していた。そういう車らしい。ダイハツのコパンだか

ポペンだか言う車だそう。冷静になって考えると、これはもしかしてデートに近いのではないかと思う。でもそんなことは口に出さない。爽やかな風を直に感じながら、車は坂道を登っていった。そろそろ日は傾いてきている。山間の渓谷に建造されたダムまではもう少しだ。曲がりくねったワインディングロードは先を見せることもなく延々と続くように思えたけど、先ほど見た看板では残り5kmと表示されていた。一花はさっき管理人のお爺さんに鍵を開けてもらって入ったと連絡があった。事前に秋庭実が電話で一報入れておいたらしい。途中のコンビニで買ったココアがすっかり冷めてしまっていた。結構な時間を車に揺られている。2人の会話は他愛の無いものだったけど、冒険者半分、学校のこと半分といったところだった。今までは男性と2人で出かけるなんて考えもしなかったのに、今日はどうしたと言うのだろう。随分久しい感情が私の中に燃り始めている。

「秋庭君、なんだか無理やりでゴメンね。」

「いいよ、俺はドライブ好きだし。それにしても何だかあんたの印象が変わってきたよ。」

「え？どんな女だと思ってたの？」

「氷の女王みたいなイメージ。」

「何よそれえ……。」

「だって合コンでのあんたしか知らなかったわけだし、仕方ないよな？」

「う……、興味が無い男には素っ気無いのが一番なのよ。」

「さすがは経済の雪女。」

「誰が言ったのそれ？」

「色々噂は聞いてたんだよね。轟沈した皆さんから。」

「うーん、確かにたくさん沈めたかも……。」

「まあいいさ。まだ会って間もないけど、色んな茶霧智を見せてもらってるしね。」

「今はどんなイメージになった？」

会話の内容では冷酷無慈悲な女と思われていたに違いない。その印象の変化がとても気になる。

「変な女に昇格したかな？」

「く……。」「

「ゲームの中ではキャラが全く違うし、いつもと違うイメージ。ギャップが激しくて正直よく分からない。」

「ゲームはゲームでしょ？匿名だからこそ出せる自分もいるわ。どちらかと言うと素の私よ。あれがね。」

「そうかもしれないな。」

しばし会話が尽きる私達。ちょっとした無言。その時、山間に鮮や

かな青が見えた。

「着いたよ。久しぶりに来たな。」

「けっこう涼しいわね。」

2人でダム近くの小さな駐車場で車から降りる。水を塞き止める巨大な壁。その上を歩く。なみなみと水を湛えたダムは、少し暮れかけた空の色を反射して青から紫に変化する。風が意外に冷たい。山の中はやはり秋が近付いている。半そでだと少し寒いくらいだった。

「ん？寒いかな？」

「ちよつとね。車もオープンにしてたから少し冷えただけかも。」

「まあ9月だしな。」

「だね。あと3ヶ月で今年も終わるし。」

「そう言うのは少し気が早い気もするけどね。でも大学も半分が終了するって考えるとちよつと寂しいかもな。」

「3年次からは本格的に就活だし、遊べるのは2年次までだよな。」

「俺は院を考えてるから就職活動はしないよ。」

「そつか。経済は院なんか行っても意味ないから私は4年で終わらね。」

「単位足りればな。」

「う……。」

秋庭実は大学院まで進学するつもりらしい。もっと不真面目な生徒だと思つてたけど、また意外な一面を発見する。ほとんど知らなかったのだから新鮮な驚きがあるのは当たり前だけど、私は彼のことをもっと知りたくなつていた。

薄暗くなり、私達はダムを後にした。随分とお喋りに夢中になつていたこともあり、秋庭邸に着いた頃にはもう時間は7時を回つていた。一花はソファでチャムを抱いて横になつている。TVを見ながら眠つてしまつたらしい。無防備にも程があると思うけど、ここがこの娘のいい所でもあると思つてしまふ。男だったら堪らないくらい可愛く見えるのだらうな。秋庭実にはどう写つているのだらうか。

「また寝てるのか……。チャムも一花もよく寝るな。」

「そんなに寝てるの？」

「ああ、ほぼ毎日寝てるよ。そこは一花ちゃん専用のベッドみたいになつちまつた。」

私は眠る一花の胸からチャムを抱こうとしたら、一花の目がぱつちりと開いた。そして周囲をキョロキョロと確認し、むっくりと起き上がる。私と秋庭実の顔を交互に見ながら、小さく「おはよ」など

と言っている。チャムはまだ眠いらしく。私の腕の中で大きく欠伸をしながら目をうるうるさせていた。

「遅かったね。ドライブ楽しかった？」

「それなりにね。」

私は素っ気無く答える。あまり笑顔で語ると変な誤解を招くかもしれないからだ。

「ふーん、智ちゃんもやつと女の子らしくなってきたね。」

一花が嬉しそうに私に耳打ちしてきた。完全に誤解されたいらしい。確かに今日の私の行動を分析すると、他の女の子と仲良くしている意中男性を知り、その目をこちらに向けるためにデートに誘ったとも取れる行動だった。もっと簡潔に言えば、「私のほうも見て」かもしれない。当然そんなつもりで誘ったわけではないのだけど、軽はずみな行動だったのは否めないと思う。それに今の私は耳まで赤くなってしまうているだろう。弁解の余地が無い。

「久しぶりのドライブで舞い上がっただけよ。深い意味なんてないからね……。」

「そっかそっか、お姉さんは嬉しいよ。」

「一花っ！」

「きゃあっ！怒ったっ！！！」

嬉しそうに部屋の中を逃げ回る一花。私もチャムを抱いたまま追っ

かける。ドタバタやっている、秋庭実がキッチンから顔を覗かせた。

「煩いからやめなさい……。下の人にも迷惑だからな。」

その晩は秋庭邸で晩御飯をご馳走になる。一花が準備していた具材で水炊きを作ったのだ。鍋なんて久しぶりだった。一人暮らしなんてしているとまず作らない。鶏肉の団子や白菜、椎茸、えのき、豆腐など、グツグツ煮える食材をハフハフ言いながら口に運ぶ。ポン酢の酸味がほどよいアクセントとなり、つい食べ過ぎてしまった。お腹もいっぱい、チャムと遊んで心もいっぱい。私は気持ちのいい疲労感を感じながら、いつの間にか一花専用ベッドとなったソファを占領して眠りに就いてしまっていた。

第五話 匂い（後書き）

だんだんとヒロインの性格が現れてきました。初デートは突然にっ
て感じですね。

実際、相手を意識する瞬間というのは些細なことからだと思っています
が、皆さんはどうですか？特に女性は、男性の匂いに敏感ですね。
その人の部屋に行くと、独特の匂いがあるものですから。

まだ彼女の居ない方は、意中の女性を何かにかこつけて部屋に呼ん
でみるのもいいかもしれませんよ。好意を持つ相手の匂いは自然に
女性を興奮させるものですからっ！

でもまあ容姿が良いに越したことはありませんがねへ）。）。）。
ノ

第六話 架空の契約

第六話 架空の契約

目が覚めると自分の部屋では無かった。体には柔らかな毛布がか
けられ、ソファに横になっている。ギョツとして起き上がると、胸
の辺りに違和感を感じる。恐る恐る毛布を捲つていくと、四肢をピ
ーンと伸ばして大きな欠伸をする毛玉があった。

「チャム・・・？」

その姿を目の端に捉えた瞬間、完全に意識が覚醒する。昨夜は秋庭
邸で晩御飯を食べ、一花と2人でたぷりとチャムと遊んだのだ。
その後の記憶がブツツリと途切れているが、この状況なら転寝から
本気の睡眠に入ったのだと容易に想像がつく。まさかのお泊りだっ
た。その事実に関顔から血の気が引いていく。昨日イメージを完全に
一新された男の家に泊まった。慌てて服を確認したが脱がされた形
跡は無い。

「ふう・・・、間違いは起こらなかったようね。」

まだ少し混乱状態の私だったが、とりあえず安心する。そしてチャ
ムを抱き寄せ胸に抱くと、立ち上がって再度室内を見渡す。一花の
姿は無く、カーテンからは弱い日差しが入り込んでいた。まだ外は
暗いようだ。

「さて、一花はどこに行ったのかしら？」

チャムを抱いたままソファから離れて秋庭実が来客用と呼んでいた

部屋の前に立ちノックをする。一花はきつとここで寝ているのだろうと思ったのだけれど、何の反応も無い。ノブを回すとひんやりとした空気が漏れた。ベッドを見ると綺麗にメイキングされていて、昨夜は来客が無かったことを物語っている。

「一花はどこ行ったのかしら……。」

「昨夜帰ったぞ。お前よく寝てたな。」

「きゃあうー!!」

不意の言葉に変な叫びが出てしまった。後ろで秋庭実が眠そうな目を擦りながらドアを開けていた。パジャマを着ているので今まで眠っていたことは分かった。

「私だけ置いて帰っちゃったの?」

「一花か?お前さあ、何回も起こしたけど帰らない、このまま寝たいて言ってたよ。覚えてないの?」

「覚えてない……。」

「一花も最後は諦めて帰った。あとはヨロシクってぞ。」

「ぐう……。」

「何にせよおはよう。」

「お、おはよう……。」

顔が赤くなる。どんな理由にせよ男の部屋に泊まった事実が私を焦燥させていた。秋庭実は気にも止めないと言った感じで冷蔵庫から牛乳を出してそのまま飲んでいる。

「あ、私帰るねっ!」

その場に居る理由が無いことを辛うじて思い出した私は少し大きな声で言った。

「あ? ああ、飯食わないで平気か?」

「うん、朝は野菜ジュースとパンだけで済ますんだ、私。」

「そっか、気をつけてな。」

「あ、でも電車あるかな?」

「あるだろ?」

「でも外暗かったし、今何時だっけ?」

秋庭実は無言で部屋の中を見て、サラッと衝撃の事実を述べる。

「8時40分だね。」

「8時40分・・・?」

「ああ、今日は曇りなんだろ。天气が崩れるって昨日やってたぞ。」

「一時限目始まってんじゃないっ!」

「んだね。何か余裕かましてたから聞かなかったけど講義あったのか？」

「あるっ！やばい……。もう間に合わない……。」

「送ろうか？」

「車で何分？」

「経済だよな？多分10分ちよい。」

「送ってっ！」

「ほいほい、あ、顔洗ったら？」

「化粧が取れる。」

「もう手遅れだよ。」

秋庭実はパジャマを脱ぎながら苦笑していた。慌てて鏡を見ると確かに酷い。化粧セットは簡易的なものなら持ち歩いている。

「まだ時間あるなら10分で何とかしなよ。」

「分かったっ！こっち見ないでねっ！！」

私は速攻で化粧を直す。これくらいは朝飯前だった。服は仕方が無いので香水で誤魔化そう。クンカクンカしていると秋庭実がチャムにご飯をやりながら待っているのが見えた。すぐにバッグを肩にか

けて私は秋庭実を急かす。講義は8時半から10時まで。9時20分までに講義室に入れば出席だけでもセーフ。ノートは一花に任せられない。時計はすでに9時を回った所だった。そして私は、この後の大失敗に今は気付く余裕すら無かった。

経済学部の駐車場に秋庭実の車が入る。場所は大講義室の目の前。今そこで大勢の生徒が眠い目を擦りながら講義を受けているはずだ。私は時計を見る。9時14分。間に合った。私は秋庭実にお礼を言いなから車のドアを開けて固まった。大講義室からはゾロゾロと生徒が溢れ出してきたのだ。見知った顔が怪訝な顔をしながら私と秋庭実の車を見ながら通り過ぎていく。遅刻して昨日と同じ服で男に送られる女の子。これがどんな恐ろしい誤解を招くか考えていなかった。しかも最悪のタイミングで皆に見られている。

「智ちゃんって彼氏居たんだあ。」

「げげ、俺狙ってたのにショック……。」

「やるわね〜。」

「農学の子だ〜。」

「やっぱり男付きじゃねえか。」

「智。今日は休講だって。彼氏さんもご苦労様〜。」

「誰だあいつ……。茶霧さんの男？」

「マジでむかつく。あいつ経済じゃねえじゃん。余所の女に手出してんじゃねえよ……。」

「……。おはよ智。」

「朝帰り？程ほどにしときなよ。」

数え上げたらきりが無い。私は頭が真っ白になってしまっていた。そこにニヤニヤした顔で一花が現れる。

「智おはよっ！！！！秋庭君もおっはよーっ！！！！」

私はまだ放心状態で固まっている。

「あああっ！！！！チャムも居るっ！！私に会いに来たのねっ！！！！」

違う。私を送ったら公園で散歩させるって秋庭実が連れてきただけだ。断じて違う。

「茶霧さんさ、何か固まっちゃってるんだよね。」

「んだねえ。秋庭君は講義ないの？」

「俺は4と5だけ。今日の午前中は暇人だ。」

「おおーっ！私達今日は終わりなんだ。経済で臨時の教授会があったほとんど休講になっちゃった。」

「なら飯でも食つか？茶霧さんは服も着替えたいだろうしこのまま帰るでしょ？」

「なら私乗っけてっつ！チャムも私のほうが好きだもんねえ？」

私はそこで覚醒した。皆に見られた事実はどうしようもない。起こったことは変えられないのが人生だ。深い。

「一花。」

「なに？」

「あんたは明日からこの誤解を解く証人になってもらっわ。」

「はい？」

「秋庭君。」

「何だよ？」

「家まで送って。」

「いいけど・・・どうした？」

「もう今日は一日落ち込みたいのよ。ゲームして引き籠もる。」

「そっか。何か分からんが落ち込んだらいいよ。一花ちゃん、また今度な。」

「おっけい。私も久しぶりに冒険者で遊び倒す。」

「んじゃ後で少しだけINするよ。こいつの散歩もあるし。」

そして私はまた助手席に乗って、自宅まで黙って揺られていた。

家に着くと秋庭実にお礼を言ってアパートの階段を上がる。私の部屋は2階にあった。やはり女の一人暮らしは1階だと不安もあるので、2階を選択したのだ。ここに引越してもう1年半も経つ。今ではすっかり周囲の地図も頭の中に出上がり、何不自由の無い生活を送っている。部屋に入るとまずはシャワーを浴びることにした。やはり昨夜はお風呂に入っていないこともあり、体がべた付く感じがしたのだ。変な汗も随分と掻いた気がするし。暖かいシャワーで垢を落とし、サッパリとして部屋に入る。いつもの部屋着に着替えると、PCを起動することにした。今日はオヤツも買っていないけど、アルバイトまでの時間はたつぷりある。しっかりレベルを上げてキャラを強くしなければならぬ。ハヴさんとの時間も最近あまり無い気がするので、コミュニケーションもしたい。あわよくば今日のことなど相談に乗って欲しい。私は彼が居ることを期待して、冒険者のログイン画面を開いた。

【チャットログ】

チャム：こん〜

氷の貴公子：こん^^

スノーク：あらチャムちゃん、こんな時間に珍しいね？）。

チャム：講義が全て休講になっちゃって^^；

氷の貴公子：じゃあ今日は一日遊べるんだね^^

チャム：いえ、夕方からバイトです。3時には落ちようと思ってますよ

スノーク：それまでどこか行く？（・・・）

チャム：ハヴさん居ないですか？

スノーク：今日はまだ見てないな

氷の貴公子：彼はニートだからまだ寝てるんじゃない？^^

チャム：一日中遊んでるはずなんですけどね

スノーク：でもハヴちゃんはニートって感じしないよね。うちの旦那より物知りだし、何より平日はほとんどINしないわよ

氷の貴公子：でも本人がニートだって言ってるからニートなんですよ^^

チャム：そっすかー

スノーク：ハヴちゃんに用事？

チャム：んゝ 相談ですね

氷の貴公子：僕が聞こうか？^^

チャム：いえ、プライベートに関わることなのでちょっと言えませ
んね^^；

氷の貴公子：そっか^^

スノーク：あ、ちょっと離席する。パンが焼けたみたい

氷の貴公子：いつてらっしやい^^

チャム：てらん

氷の貴公子：どこか連れて行こうか？^^

チャム：いえ、PTあるか検索してみますからいいですよ

氷の貴公子：そんな低レベルPTなんかより僕と一緒にのほうがま
いと思うけど？^^

チャム：でもちゃんと順序をこなさないでレベルだけ上がっても意
味ないですから^^；

氷の貴公子：そうだね。えらいねチャムちゃん^^

チャム：それも含めてのゲームですから

氷の貴公子：がんばれ^^

【チャットログ了】

私は少し鬱陶しさを感じながらチャットを終了させる。この盟主はあまり好きでは無かった。スノークさんに誘われて入った血盟だったけど、こいつが盟主だと知っていたら入らなかつたかもしれない。とにかくリアル女性と分かるや否や、ペア狩りに誘われる。そこで口説きに似たチャットを披露してくれるのだ。「^^」これを多用するのもウンザリしていた。どれだけ良い人を装おうとしているのだろうか。こいつには何の魅力も感じていないし、少し敬遠してる空気も発しているのに全く効果が無い。大体、たまに休講などで早く帰ってもほとんど居る。チャット内でハヴさんをニートだからと少し貶していたけど、明らかにこいつの方がニート臭を漂わせている。チャットなどでたまに仕事の話とかやってるけど、嘘ばかりだし。年収は700万くらいで夜がメイン。いつも居るのにな。仕事してくると言っては2時間くらいで舞い戻ってくる。キャラも48だけど、例のサブ職での話だ。メイン職はとくにカンストしていた。そんなにゲームして700万円も稼げる仕事などあるのだろうか。

(こいついつも居るしな)。でも血盟を抜けると一花もハヴさんと一緒に来てくれないかもしれないし、面倒だけどそつ無く付き合うしかないかなあ?)

私はまたうざいのに掴まる前に行動しようとしてPTR(パーティーイルム)を覗く。癒し募集20~30という部屋を目敏くみつけるとすぐにPTRに飛び込んだ。そして、2時くらいまで延々とPTでダンジョンを楽しんだのだった。

一花は12時頃に一度だけINしたけど、そのまま寝てしまった
ようで、PTが終わってから話しかけても返事が無かった。ハヴさ
んも現れない。秋庭実もやってこなかった。私もタイムリミットが
刻一刻と近付いていたので、INしたまま髪をセットしていると、
遂にハーヴェストがログインした。ヒーローは遅れて現れる。メキ
シコのプロレスラーか。私は後ろでアップした髪にヘアピンを刺す。
そしてすぐにハーヴェストに囁きチャットを送った。血盟チャット
ではうざい中二病の名前の盟主に居るのがばれるからだ。

【チャットログ】

チャム - > ハーヴェスト : おはようw

ハーヴェスト - > チャム : いきなり囁くなwww離席じゃないんか
い？

チャム - > ハーヴェスト : もうすぐバイトー

ハーヴェスト - > チャム : 囁き面倒だな PT組むぞ

ハーヴェストさんがあなたをパーティーに誘っています。

チャムさんがパーティーに参加しました。

【パーティーチャットログ】

チャム : ハヴさん今起きたの？

ハーヴェスト：んだ

チャム：仕事探せよwww

ハーヴェスト：働いたら負けだと思って（ry

チャム：それ最低だからwww

ハーヴェスト：学生が偉そうに・・・就職活動してんのか？

チャム：来年からするー

ハーヴェスト：そっか

チャム：今日は相談があつてね

ハーヴェスト：何だ？

~~~~~経緯を話しています~~~~~

ハーヴェスト：萌えが彼氏だと思われたのかwww

チャム：そうなんすよ どうしましょ？明日からガッコ行けないかも・・・

ハーヴェスト：しっかり説明すりゃいいだろ？友達の家で寝ちまつて朝になっただけとか

チャム：健全な大学生2人が一夜を共にしたら潔白はあり得ないで

しょ・・・

ハーヴェスト：普通はそだね

チャム：もう皆から色眼鏡で見られるのが嫌で仕方ないんですよー

ハーヴェスト：でも彼氏ってことにしとけばうざいナンパも減るんじゃないね？

チャム：でも噂は勝手に広まりますよ 萌えにも迷惑かけるし、いいことなさそ 下衆の勘ぐりって言葉もあるし、他人の不幸は蜜の味ってね・・・

ハーヴェスト：不幸じゃなく幸せだろうが・・・ チャムは萌えのことどう思ってたんだ？

チャム：猫の主？

ハーヴェスト：それだけ？

チャム：背が高い、頭は意外に良さそう、変人、ホモ、――かな

ハーヴェスト：最後の伏字はなんだ・・・ ホモって意味もよくわからん

チャム：いちかも泊まったけど手だしてないって^p^

ハーヴェスト：男としては無いってことか？

チャム：・・・w

ハーヴェスト：じゃーさ、隠れ蓑に使わせてもらえばいいだろ

チャム：どつという意味です？

ハーヴェスト：偽装彼氏とか、萌えも彼女いないんでしょ？

チャム：ええ、でもそれはあまりにも失礼じゃないです？

ハーヴェスト：聞くだけ聞いて皆よ

チャム：皆よ

ハーヴェスト：誤字だ

チャム：わかってます

ハーヴェスト：男が居れば合コンも行かないで済むし面倒ごとが  
気に減るぞ

チャム：じゃー

ハーヴェスト：じゃー

チャム：ハヴさん付き合ってください

チャム：彼氏いるって言えますから

ハーヴェスト：固まったじゃないか・・・ 本気で言ってるのか？

チャム：ええ、本名も知らないけど私はハヴさん好きですよ

ハーヴェスト：困ったな・・・

チャム：別に形だけでも男が居るって事実には変わりないと思うんですが

ハーヴェスト：むう

チャム：会ってくれとか無茶は言いませんよ ゲーム内だけでいいんです

ハーヴェスト：俺が言ってる通りの人間とは限らんよ もしかしたらキモオタヒツキーかもしれないし、50過ぎた禿かもしれない

チャム：それはきっと違うと思います

ハーヴェスト：なんでそこまで信じれる？

チャム：女の勘ですな

ハーヴェスト：ゲーム内だけでいいの？

チャム：うん

ハーヴェスト：じゃー男避けって意味で彼氏いますって公言しなよ

チャム：（。。。）

ハーヴェスト：今日から俺が彼氏でいいよ そのかわり

ハーヴェスト：いちかに言っなよ

チャム：やった！

ハーヴェスト：いちかに絶対いうなよ

チャム：yes my sweetheart

ハーヴェスト：ノリが軽いな・・・

チャム：嬉しいw

ハーヴェスト：それから約束事だけど

チャム：？

ハーヴェスト：番号は今までどおり教えない アドも同じ

チャム：・・・

ハーヴェスト：あくまでも架空の恋人だよ リアルでまで関わる気はない

チャム：いつか遭いたいって思わせる

ハーヴェスト：会いたいでお願いします

チャム：おkはにー

ハーヴェスト：マジでいちに言っなよ・・・

チャム：^ - ^

ハーヴェスト：血盟でも内緒名

チャム：名！

チャム：バイトいてくるー

ハーヴェスト：稼いできな

チャム：バヴさん

ハーヴェスト：ん？

チャム：シユキ（・w・\*）

ハーヴェスト：その乗りで血盟チャとかやめてくれよ・・・

チャム：2人のときだけw

ハーヴェスト：また夜にノシ

チャム：おつかれw

ハーヴェストさんがパーティーから脱退しました。

ハーヴェストさんがログアウトしました。

【チャットログ了】

今日は激動の一日だったのかもしれない。バイト中も夢の中のように足がフワフワと地に付かない感覚。相談事からこんなに簡単に告白出来るだなんて思っていなかった。勢いって怖いと思う。実は人生で初めての告白。チャットでは冗談のような会話だったけど、心臓は早鐘を打ったようにバクバクと激しい動悸を繰り返していた。そして形だけとは言えOKをもらったのだ。これから彼はゲーム内限定だけど私の恋人。何て非生産的な契約だろう。顔も名前も知らない相手に本気で恋をした自分。これは錯覚に近いのかもしれないけど、想いが通じるといことは素晴らしいことだと思った。これからは彼氏が出来たと誘いを断ることも出来る。今日は早く帰って恋人プレイを満喫しちゃおう。



## 第六話 架空の契約（後書き）

こんなはずじゃ無かった。何でこいつら付き合うことになったの？

ツッコミどころ満載ですが、茶霧さんは幸せそうでしたね。よく読み返してみると、この話って本当に中身が無いって言うか薄いよね。ああ、本当に恋愛小説は無理ぽとか言いそうになっています。

実際に、作者がMMORPGをしていた当時、ゲーム内で付き合い合っている方々はいました。結婚された方も知っています。メールと電話だけで会った事も無かったらしいですけどね。だがしかし、そんな人たちに言っておきたいことがある。

ちゃんとおっぱいが大きいか確認してから付き合いましょう

第七話 無意識（前書き）

どうしてこうなった？

## 第七話 無意識

### 第七話 無意識

ここは巨大な滝の上、遙か下に流れ落ちる水飛沫の轟音が心地よく響く。彼方に海が見え夕日がゆっくりと海に溶けていく。2人は滝の横に突き出した岩の上に腰を掛けて、黙って夕日を眺めていた。一人は逞しい赤い髪の青年。一人は華奢な体つきの女性。座った青年の胸に背を預けるような格好で女性は足を横に揃えて座っていた。まるで後ろから抱きしめられているような形だ。何か言葉を交わす訳でもなく、ただ男に体を預ける女性。やがて日は落ち夕闇が辺りを侵食し始める。不意に男が立ち上がると女性もつられて腰を上げた。もう少しこの余韻を楽しみたかった女性はふくれっ面をしながら青年の手を握る。そして2人はすっかり暗くなった道を街まで歩き出した。

最近、私はこのゲーム内でのデートを非常に気に入って、事あるごとにハーヴェストを誘うと冒険者の世界を連れ回していた。このゲームは美麗なマップでも知られており、狩りの他にも滝や雪山、火山帯など観光で回れそうな景色が多数ある。昨日は南国のビーチで、今日はしんと雪の降る街角で、2人は秘密のデートを繰り返していた。このゲームはソーシャルシステムと言うものがあって、笑う、怒る、泣く、おどけるなど感情を表す独自のモーションが存在し、さらに男女2人で踊る、手を繋ぐ、お姫様だっこなどの凝ったモーションも存在する。明らかにゲーム内で恋愛を楽しめるよう

に開発者が意図して作ったものだろう。私は最初の頃、このソーシヤルモーシヨンは要らないだろうと思っていたが、現在はフル活用していた。さらにキスする、抱き合うなど過激なモーシヨンも欲しいなどと思うようになってしまっている。軽い病気みたいな感じだったが、ゲームの中でないと出せない自分も居る。現実の自分ではこんな素直に相手を求めるなど出来ないだろう。手を繋ぐのだった軽はずみには出来ない。だからこそ、ゲーム内でたつぷりと楽しむのだ。直に触れなくても、体温を感じなくても、私は好きな男性と一緒に居る時間が好きだった。

午後のメインストリート。学生たちが忙しく行き交う通りから少し離れた場所にあるベンチで、私と一花は腰を降ろしていた。手にホットドリンクを持ち、他愛のない会話を楽しんでいる。話題は最近の私の奇行（？）に関する事だった。

「智さあ〜、最近いつも笑ってるよね？」

一花がチラリと私を覗き込みながら訊ねる。今一番気になっていたことだったのだろう。

「そんなことないでしょ？気のせいよ一花。」

私は素っ気無くそう答えた。一花は納得いかないという顔をしながらもそれ以上は追求しない。最近の会話の主な流れだった。一花の言う通り、私の表情にはある変化が現れていたと思う。これまでは男性にも素っ気無い態度を買き、大学内で声を掛けられても大概の

男には眉を顰めて対応していた。眉根に皺を寄せている顔がほとんどだったのだろう。常に不機嫌な顔と言ったほうが分かり易いかもしれない。

「でも本当によく笑うようになったよね？何か楽しいことあったんでしょ？」

「だから本当に何でもないんだってば……。」

しつこい一花に苦笑いを浮かべながら、私はいつもと同じ答えを口にする。ハーヴェストとの関係は血盟員は勿論のこと、特に一花には絶対に内緒にしてくれと言われているのだ。口が裂けてもゲーム内で付き合ってますなどと言えるはずもない。

「男の子に話しかけられても、最近はバリアーが張られてない気がするんだよねえ。何か柔らかくなった。」

「バリアーってあなた……。私は別にそんな空気持っていないわよっ！」

「いやいや、前の智ちゃんにはバリアー張りまくってたよ。今は何か自然に接してる気がする。男性恐怖症治ったの？」

「元々そんな病気なんか持ってないからっ！」

「むう……。秋庭君の影響かな？」

「あの男は関係ないわよ。」

「そうかな？でも結構頻繁に会ってるんじゃないの？」

「うっん？もう1ヶ月以上は顔も見えないんじゃないかな・・・。  
なんで？」

「だっていつも同じ時間に居なくなるよね。ゲームしてても同じタ  
イミングで離席するし。こっそり付き合ってるんだろうと思ってさ。」

「え？」

確かに最近私はよく離席をしていた。ハーヴェストと2人きりの時  
間を楽しむために、離席ということにしておいて影でPTを組み秘  
密のデートを楽しむのだ。ハーヴェストと同じ時間に離席すること  
を疑われるのは分かるけど、なぜ秋庭実との仲を疑うのか理解でき  
ない。

「秋庭君も離席多いよう？知らなかった？」

「うん・・・。最近はまともにチャットもしてないし、気にも掛け  
て無かったわ。」

「秋庭君もさ、暇してるだろうと囁いてみたりしても反応無いこと  
多いんだ。あの人は黙って離席するからそんなこと多々あるんだけ  
ど、実は智と一緒にデートにでも行ってるのかと思って傍観してた  
の。」

「そんな馬鹿な・・・。私と秋庭君は何の関係も無いわよ。愛して  
るのはチャムだけね。」

「チャムは私の娘なんだからっ！あ、そう言えばチャムに会いに行

ってないわ……。」

前にデートのようなドライブをして泊まった後、私は意図的に秋庭実を避けていた。大学構内で噂になったこともあるが、あの男は妙に私の琴線に触れてくる、危険な匂いもあった。チャムに会えないのは寂しいが、やはり特定の異性と交友を深めるのはハーヴェストにも悪いと思い、電話はおろかメールすらしていない。あれは9月の終わりだったから、もう2ヶ月近くまともに会話もしていなかった。

「秋庭君も忙しいんじゃない？レポート多たって嘆いてたし。一花、今度チャムに会いに行ってみる？」

「私はたまに行ってるんだけどね。秋庭君はいつもレポートだって部屋に引き籠もっちゃうんだ。」

「相変わらず手は出してこないわけね？変な男よね。」

その言葉に一花はニヤリと笑う。

「何言ってるんだか。秋庭君は智のこと好きなんだと思うわよ？」

「はいっ!？」

「だってさ、この間智が寝ちゃったじゃない？あの時の秋庭君の目、凄かったなあ……。」

「凄かったって何が……？」

「も、もう我慢できないっ!!!!!」

「きゃあっ!」

一花は某シリアル食品のCMキャラのような声を上げて、私に抱きつく。咄嗟のことに私も悲鳴を上げてしまった。

「そんな目してた。」

「うそつけ。」

私は覆いかぶさった一花を押し返しながら冷たい目を向ける。

「そっかなあ？私の女の勘がそう言ってるんだけどなあ……。」

「あんたの勘が当たったらパフェでも奢ってあげるわ。」

「やったっ!じゃさ、今日行ってみよ？バイト無いでしょ?」

「無いけど今から?」

「うむ。」

そう言うと一花は携帯電話を取り出し、凄い勢いでメールを打ち始めた。

メールの返信は早かった。講義は終わっているけど研究室に寄ら



なければいけないので17時に家に来るようにメールで送られてきた。久しぶりに秋庭実に出会う。何となく緊張してしまう。2ヶ月も前だけど1度デートもしているし、恋人に間違われた男だ。やはり多少は意識してしまうのは仕方ないことだと思う。しかも先ほどの一花の発言がそれに拍車をかけていた。私が今神妙な顔をしていることに一花は気付いているのだろうか。

「ん〜。」

一花がメールを読み聞かせた後に唸る。何か考えているようだ。そしてまた携帯電話を操作する。メールを送信した後、私に向き合った一花は腕時計を見せながら言った。

「今4時前でしょ。私は1回帰るから智はこのまま農学部へ行つて秋庭君と合流して？車で来てるはずだから乗せてもらいなよ。電車代もつたないし。」

「そう来たか・・・。」

「むふ、2時間くらい遅くなっても私は全然かまいませんからね？」

「2時間って限定するのが生々しいのよ・・・。そんな気ないからね。あんた私と秋庭君をくっ付けたいだけでしょ？」

「いやいやいやいやいやっ！」

「まあいいわ。ここから農学部まで歩いて15分くらいかかるわね。どこかで待ち合わせてみるわ。あんたもちゃんと来なさいよ。」

「ゆっくり行くからねっ！」

「はいはい。」

私は一花の冗談に付き合うのも面倒になって、さっさと彼女を駅に向かわせる。一花がメインストリートの雑踏の中に消えると、自分の携帯電話を出して秋庭実にもメールを送る。4時30分頃に農学部に着く旨と車で拾って欲しい事を伝えるためだ。すぐ事務的な文章で絵文字も無し。我ながら可愛くないと思うけど、ハーヴェストと影ながら付き合っている身としては他の男と2人になるのも躊躇われる。

（何か変に意識しちゃって嫌だなあ……。後ろめたいと言っか……。浮気する女って皆こんな気持ちなのかな？）

別に浮気では無いし、一花も来るので変な事にもならないだろうけど、やっぱり少しの罪悪感が背中に付き纏う。溜息を吐きながらメインストリートを農学部へ向かう。大学構内は広く、徒歩での移動はそれなりに時間がかかるが、秋庭実も今は研究室に居るはずだ。時間稼ぎには都合が良かった。メールの返事がなかなか帰ってこないことに多少の苛立ちを感じながら、私はゆっくりと歩いていった。

農学部の研究室棟へ向かう途中に、私は理工学部の敷地を横切る。理系は男子学生が9割を占めるために、キャンパスは男だらけ。すぐさま私に多数の視線が絡みついた気がした。ここを通る時はいつもそうだ。下を向いて出来るだけ足早に立ち去ろうとするも、すぐに知らない学生に声を掛けられる。

「ねね、経済の子だよね？こんなどこに何しに来たの？彼氏？ねえ彼氏？」

本当にこの大学の学生かも疑わしい頭の悪そうな色の髪に服装。馬鹿丸出しですと背中に貼ってありそうな男だ。

「ちょっと用事があるだけです。」

私は目も合わさずにそう言つとさつさと歩き出したが、男は後ろから着いて来る。

「どこ行くの？案内しようか？ねえねえ？」

「道はわかりますので気にしないでください。」

「俺、今暇だからさ。いいじゃん、ねえねえ。ちょっとお茶でもしない？」

「しつこいつ！」

私が少し大声を上げると、周りが何事かと目を向ける。いや、正確には最初から見られている。

「何だよ。お前ちょっと可愛いからって調子に乗ってんじゃね？」

声を掛けてきた学生が私に対して理不尽な言いがかりをつけてきた。自分が絡んできて文句を言う意味が分からない。いつものことだけど今日は最低のハズレくじだったようだ。いきなり強い力で手首を掴まれ引き寄せられた。

「待ったか？」

不意に背後から聞き覚えのある声があった。久しぶりに見る秋庭実だ。少し髪が伸びていた。もう研究室が終わったのだろう。私を通るルートを先読みして迎えに来てくれていたらしい。視線の先は掴まれた私の手首だった。

「別に待ってないわよ。行こうっ！」

私は秋庭実の出現で力の緩んだ男の手を振り解くと、男を見たまま目を細めている秋庭実を促す。

「何こいつ？」

明らかに不機嫌そうな秋庭実の声。こいつと言われたのは先ほどまで私の手首を掴んでいた男のことだ。

「何でもないわよ。唯のナンパ。どうでもいいいわそんなの。」

私はまだ不機嫌そうに眉を顰めている秋庭実の手を掴み、さっさと場所を移動しようとした。ナンパ男は固まっている。180cmを超える男が自分を睨みつけているのだ。きつと恐いに違いない。

「秋庭君、そんなの放つといていいってっ！」

私は仕方なく秋庭実の手を掴むと引つ張る。一触即発の状況だ。暴力沙汰は避けたい。しかし秋庭実は動かない。男を睨み付けたまま微動だにしない。

「もういいってばっ！あんたもさっさと消えなさいよっ！」

私は秋庭実の腕を両手で抱え込んで引っ張る。私の力ではこうでもしないと引っ張れない。

「こういう馬鹿が居るから今の学生は質が落ちたって言われんだよ。ほんと迷惑だな。」

秋庭実は毒を吐きながら私に引っ張られて歩く。明らかに相手を挑発しているが男が挑んでくる気配は無い。ナンパはするが喧嘩は出来ないのだろう。力の弱い女にだけ強気になれるとか本当に恥ずかしい男だと思った。何度も後ろを振り返りながらも、秋庭実は渋々私に引っ張られていく。

「茶霧、ああいうのはちゃんと思いき知らせないとまた絡んでくるぜ？」

「いいのよ。あしらうのは慣れてるわ。」

「そっか。」

腕が疲れた。私は両手の力を抜く。でも片手は絡めたままだ。いつまた秋庭実が暴走するか分からない。捕まえておかないと危険だと思った。やはり秋庭実は大きいのだ。こうして接触すると普段とは違う秋庭実が物珍しくなった。

（意外に太い腕ねえ。こんなので殴られたら大怪我するわ。）

私は普段滅多に触れる事の無い男の腕というものを珍しげに観察する。手は大きく女に比べて掌が厚い。指もかなり太い。当然だけど、

「花や女友達の手とは感触が違う。掌を合わせたら関節1つ分は違  
うだろう。私は好奇心からか無意識に掌を合わせてみたり、指を絡  
めてみたりして秋庭実の手をいじり倒していた。いつの間にか引っ  
張っていたはずの私が秋庭実に引かれる形で駐車場に着いていた。」

「・・・着いたぞ。」

「あ、うん。」

私はまだ名残惜しそうに秋庭実の手をニギニギしていた。ゴツゴツ  
してそうだけど意外に柔らかく暖かい大きな手。そして遅しい二の  
腕。男の生の体は少し刺激が強いななどと暢気な事を考えていた矢  
先に秋庭実が思いがけないことを口にした。

「・・・なんだか今日は随分と積極的なんだな？何だかドキドキし  
ちゃったよ。」

「へ？」

「いや、また誤解されるぞ？」

「え？あ、あああああああああつ！！！！」

私はやっと自分達の体勢に気付く。腕を組んで手を繋ぎあまつさえ  
私のほうから彼の手をニギニギしてるのだ。誤解どころの話じゃな  
い。

「いや、違うのっ！手がおっきいなくって興味本位につ！っていや、  
違うかつ！！！！」

「なんかさ……。」

「別にそんな気があつたとかじゃなくてその……。」

「お前つて意外と天然なんじゃないのか？」

今日一番シヨクな言葉に私はガツクリと肩を落とした。

第七話 無意識（後書き）

少しは甘い恋愛物のような展開になってきたのではないのでしょうか？  
仕事はまだ忙しくなっております。更新が遅れて申し訳ない（、・  
・、）



第八話 上を向いて歩こう(前書き)

突き上げて落とすっ！

作者はいつもまっさかさまですけどね)・・・(

## 第八話 上を向いて歩こう

### 第八話 上を向いて歩こう

車の中は非常に重たい空気に支配されていた。無意識には言葉、私は秋庭実と腕を組み手を繋ぎ、まるで恋人のような振る舞いで大学のメインストリートを歩いたのだ。我ながら失態だったと思う。普段はクールな秋庭実に「今日は積極的」などと言われてしまった。

（はあく、最悪だね。誰かに見られたんじゃないでしょうね・・・）

隣の彼は無表情でハンドルを操作している。相変わらずスムーズな動きだった。私は運転免許は持っているけど、AT限定だ。マニュアル車は途中で挫折してしまった。今や世の中の8割以上がAT車の時代にMT車の運転免許なんて必要ないだろうと思って。でも、男の人がマニュアルのシフトチェンジを鮮やかにこなす様は見ていて素敵だと思う。クラッチを衝撃も無く滑らかに繋ぐ彼の運転スキルは私では得られなかったものだ。少し羨望も混じっているに違いない。

（飄々としてるわね・・・。私だけ無駄に意識して馬鹿みたいだね・・・）

まるで表情を変えない秋庭実を見てみると自分の心の高揚がすごく馬鹿らしく思えた。多分、私の顔は朱に染まっているはず。それだけの体験だったと思う。秋庭実とは回数では10回に満たないくらいしか会っていないのに、妙に心を許している自分が信じられなかった。何故か彼に対して、他の男のような警戒心は沸かないのだ。

それに、先程の行動も無意識だった。無意識に彼に触れたいと思ってしまった自分も不思議な感じがする。まるで恋でもしているようだ。

（最近ハヴさんとラブラブしてたから、きつと触れ合いたい欲求が強くなっちゃってるんだ……。やっぱりゲームだと彼のことを感じられないもんね。何だか私ってエッチかもしれない……。秋庭君はハヴさんと似たところがあるし、キャラもそっくりだ。私は彼にハヴさんの面影を見ているのかもしれない。）

結局のところ、自問自答で得られた解答は自分が思った以上にエロいかもしれないこと、秋庭実に擬似的にハーヴェストの影を見てしまっていることだけだった。

（こんな気持ちで男に接したらダメね。秋庭君も勘違いさせちゃうかもしれないし、やっぱり距離は置こう。）

私は無言で椅子に背を持たれたまま口の中で小さく唸っていた。自己嫌悪だ。でも、手だけはさっきの感触を反芻するようにニギニギを繰り返していたことを、私は気付いていなかった。

駐車場に車を置くと、2人して玄関ロビーに入る。ロビーでは一花が管理人のお爺さんとミルクティーを片手に世間話をしていた。どうやら少し見ない間にかなり親しくなっていたようだ。私達の姿を見ると満面の笑みで近寄ってくる。

「みのりんおひさーっ!」

「そんな久しぶりでも無いだろう。」

「智っ!」

「な、何よ・・・?」

「腕組んでラブラブーっ!??ってメール来たんだ。」

「・・・誰から?」

「山ちゃんっ!」

「・・・嘘よそれ。」

「写メ見る?」

「・・・・・・やあ〜まあ〜おお〜くわあ〜っ!?!?!」

一花に見せられた写メールは私が秋庭実の腕に掴まっている姿がハッキリと写っていた。ご丁寧に3ショットほど。手を繋いでいるところまでハッキリクッキリだ。

「おめっ!」

一花がハイタッチを求めた。「イエ〜イツ!」とつい、いつもの女の子同士のノリでハイタッチに応える。

「っってバカッ!?!?!」

私はもう何がどうなっているのか分からずに変なテンションになってしまっていた。ノリツツコミも冴え渡る。

「みのりんっ！智のことよろしくお願いしますっ！！！」

「何だよソレ？」

「惚けたって無駄無駄あつ！ネタは上がってますよ旦那。」

私と一花の妙な絡みをずっと静観していた秋庭実は怪訝な顔をした。

「智ちゃんと付き合っんでしょ？」

「……どこからそんな話に？」

「ほら、写メ。」

「……ああ、それな。」

秋庭実は冷静に説明を始めた。

「俺が茶霧を迎えに行った時に、そいつナンパされてたんだよ。」

「智またナンパ？もてるわね。」

「その時にナンパ男と一悶着あってな。それを引き離そうと腕掴んで引っ張ったんだ。」

「……つまり腕を組んでラブラブではないと？」

「そういつことだ。」

「こっちは？手まで繋いでて・・・。」

「ああ、それはね。」

「うん。」

「俺の左手に傷があるんだよ。これな。それを珍しがって茶霧がいじってただけ。」

秋庭実左手を広げてみせる。確かに3cmほどの傷痕が掌を横断していた。

「ほお〜。まさかそんな勘違いショットだったとはね。つまらないっ！」

一花はガツカリと言った様子で山岡晴美にメールを返している。私はホツとしながら秋庭実に目配せしてお礼の意を示した。秋庭実も苦笑を浮かべる。私は決して傷が珍しくて手を繋いでいたわけでは無いのだけれど、うまく誤魔化してくれてあり難かった。秋庭実も融通の効く男で良かった。一花はメールを送信すると私達に向き直り、再度確認する。

「せっかかいい雰囲気だったのに残念。この智ちゃん笑顔なんか滅多に見れないよ？本当に付き合わないの？」

再度開かれた写メール。確かによく見ると、私は自然な顔で微笑んでいる。これだと恋人同士と勘違いされても仕方ないのかもしれない。

い。

「まあ誤解されそうな写真だけだね。今のところ、そんな事実は無いわよ。」

私も苦笑しながらそう言う。

「だな。俺と茶霧が付き合うなんてことあり得ないから。」

秋庭実もそう続けた。「あり得ないから。」そう言われた。私はその言葉が心に小さな棘としてずっと残っていていくことに今はまだ気付いていなかった。

部屋に入ると、チャムが走って来た。私は心が躍る。しばらく見ない間に、すっかり大きくなっていく。掌に乗っていた頃が嘘のようだ。思わず手を広げてチャムを抱き上げようとしたが、チャムは私をスルーして一花の足元に擦り寄る。ゴロゴロと喉を鳴らして甘えていた。これもしばらく会わなかった差なのだろうか。一花はチャムを抱き上げ私を尻目に慣れた様子で部屋の明かりを点け、ソファに腰を下ろした。秋庭実は自室に入る。

「みのりんっ！チャムのオヤツ買った？」

「ああ、この間一花が言ってたやつな？キッチンの包丁の下に置いてる。」

「あげていい？」

「3本だけな。あんまり食わずと太るから。」

「おっけーっ！」

玄関ロビーから気付いていたが、一花は秋庭実を「みのりん」と呼んでいる。2人で居る時はそうなのだろう。私と居る時は「秋庭君」なのだけど、私に分かりやすいようにわざわざそう呼んでいたのかもしれない。秋庭実も呼び捨てで一花を呼んでいた。知らない間にこの2人の関係はかなり親密になっていたようだった。私の心にまた細波が立った。2人の親密な様子を知り、面白くない。

「茶霧は何飲む？一花はサイダーでいいんだよな。ほらよっ。」

「ありがとう。智はお茶でいいんだっけ？」

「うっん、私は要らない。」

「遠慮すんなよ。どうせ長居すんだろ？」

秋庭実は強引に私の前にお茶の入ったコップを置く。一花はチャムに鶏肉のジャーキーを与えながらサイダーの入った可愛いプリントのコップを持ち、美味しそうにゴクゴクとサイダーを飲んでいく。秋庭実も自分用のマグカップでコーヒーを飲む。

「ねえ一花、それマイカップ？」

「うん、あたしのだよ。」



「ふう〜ん……。」

一花の膝の上でチャムはジャーキーをムシヤムシヤと食べていた。一花の手を抱え込むようにホールドしている。かなり懐いているのがよく分かった。私が手を伸ばすと、一瞬首を引つ込めて指先の匂いを嗅ぐ。まるで他人に対する態度だ。猫は3日で飼い主を忘れる生き物だと聞いていたが、実際2ヶ月前に少しだけ相手してくれた人間を覚えているほど記憶力は無いらしい。そんなチャムの様子を見ながら一花は困ったような顔をしていた。

「ほらチャム、智ちゃんだよ。一緒に寝たでしょう？覚えてないのかな〜？」

「2ヶ月前よ。もう忘れられちゃったみたいねえ……。」

私の声に張りは無い。当然だけどちょっと落ち込んでいる。

「案外薄情だなお前は。」

秋庭実はずちやむの頭を優しく小突く。チャムは遊んでもらっているかと勘違いしているのか、その大きな手にしがみついてガシガシと噛んでいた。そんなチャムに一花は手を伸ばしてお腹を撫でる。ニャアニャア鳴きながらチャムは一花の手をペロペロと舐め、甘えている。私がソツと手を伸ばすとバシツと猫パンチが炸裂した。明らかに態度が違う。動物は素直だなと私は寂しい気持ちになった。私がハーヴェストと付き合っているうちに、一花はまめに足を運んでチャムと信頼関係を築いていたのだろう。何もしなかった私に懐いて欲しいと言う権利は無い様に思えた。結論、ここに私の居場所は無い。私は少し考えたが、やがて立ち上がる。

「あれ？智どうしたの？トイレかな？」

「ううん、私ちょっと用事あったんだ。帰るね。」

「え？」

私はもう居た堪れなくなっていた。完全に四面楚歌と言ったところだろうか。いつの間にか秋庭実と想像以上に親密になっていた一花。まるで私が知らない顔をしている。完全に私を記憶の中から消去させてしまったチャム。そしてさっきまであんなに近くに居た秋庭実も、今は遠くで霞んで見えるような気になる。考えは悪いほう悪いほうへ暴走し、私の心に荒んだ風を送り込んだ。

「智、ほんとに帰るの？今来たばかりじゃない。」

「うん、でも用事思い出しちゃったから。」

「ほんとに用事なの？」

「うん。」

私の態度に少し不信感を持ったような一花の顔。用事が嘘だということは見抜かれているに違いない。

「用事なら仕方ないだろ。一花はちょっと待ってる。茶霧を送っていくから。」

「うん、分かった。チャム、智にバイバイしなさい。」

一花はチャムの前足を持って軽く振る。チャムは訳も分からずにさ

れるがままだった。

「じゃね、チャムバイバイッ！」

私はそう言っで一花とチャムに手を振ると、玄関に歩き出した。秋庭実も後に続く。私は廊下でクルリと向き直ると、秋庭実を制止した。

「ん？」

変な顔をする秋庭実。

「ここでいいわ。送らなくて結構です。」

「は？お前の家まで電車使つと30分は掛かるぞ。車なら10分で着くのにな。」

「うん、でもいいの。ほんとに用事なんか無いんだ。」

「用事ないって……。じゃあなんで帰るんだ？」

「何でだろ？ここは私が居るべきじゃないって思っちゃったからかな……。？」

「何だそれ……。」

「秋庭君、一花と良い雰囲気じゃない。マイカップまで置いてるなんて普通じゃないよ。このまま付き合っちゃえば？」

「……茶霧、それ本気で言ってるのか？」

「本気よ。」

「さつき一花が言ったことに対する敵討ち的な気持ちで言ってるなら怒るぞ……。」

「そんなんじゃないわよ。今見た上で自然にそう思ったんだもん。」

「前にも言ったよな？従兄妹みたいなもんだって。」

「従兄妹なら結婚できるじゃない？」

「いい加減にしるよ……。」

秋庭実 は明らかに怒りを顔に出した。これ以上言つと大変なことになるそうだ。

「ごめん……。そんなに怒るとは思わなかったわ。今言つたことは忘れて。」

私はそう言つて玄関を開けて外に出る。「またね。」の言葉がどうしても喉から出てこなかった。

「また来いよ？」

秋庭実の音がドアの閉まる音がする直前に私に届く。その声はハッキリと私に届いていたけど、私が返事をすることは無かった。閉まったドアに背を持たれて、私は暗くなりかけた街を見ながら上を向いた。淡い夕闇の中、月がボンヤリと見える。

（上を向いて歩こう。涙が零れないように・・・か。うまい歌詞だなあ・・・。）

どついうわけだろう。私の両の瞼から、熱い液体が数滴だけ流れた。これから私の、一人ぼっちの夜がやってくる。

## 第八話 上を向いて歩こう（後書き）

ふと自分の知らない友人を見ると疎外感など感じる事が無いですか？

作者は親友の初体験の話を書いたとき、たしか高校3年生の時に初めて親友でも他人だと思い知ったことがあります。

何が言いたいかと言うと、何で泣くほど思いつめているのかニユアンスを感じて欲しかったと、それを言いたかったっ！

文章が下手ですまんね。

第九話 harvest (前書き)

「おねがひ、あきわくんはらめえ・・・。」

好きなだけ妄想してから読んでね)・・・(

## 第九話 harvest

### 第九話 harvest

部屋に入ると明かりを点けて真っ先に鏡を覗く。涙の跡がうつすらと付いていた。赤く充血した目。何故自分が泣いたのか理解が出来なかった。ドアが閉まる音と同時に自分が外界から拒絶されたような感覚。全てが遠く儂い存在のような曖昧な感覚。

（ダメだ。考えるだけ鬱になっちゃう。これは私が勝手にやったことだ。一花も秋庭君も悪くない。勝手に空しくなって勝手に出てきたのは私。自爆しておいて涙が出るなんて、何て嫌な女なんだろう。・・・）

私は部屋着に着替えるために携帯をポケットから取り出した。淡く点滅するグラディエーションのライト。着信がある。でも今の私はそれを確認するのが少し恐く、億劫だった。服を洗濯機に放り込み、上着をクローゼットにしまい込むとベッドに雪崩れ込んだ。手元のスイッチで部屋の明かりを消す。今頃、一花と秋庭君は何を話しているのだろう。笑い合いながらチャムを囲んで楽しげに遊ぶ2人の姿が脳裏に浮かぶ。時間はまだ19時。用事が済んだと言ってまた戻ること可能な時間だ。でも、私にそうする勇氣は無い。

（秋庭君に宣言して出てきちゃったしなあ・・・。2人の楽しげな様子なんか見たくないし。チャムも私のことを相手にしてくれないし。考えるだけ深みに嵌りそう。2人とも私のこと馬鹿な女だと笑ってるかもしれない。いや、そんな訳ないか・・・。一花がそんなことを考える訳ないんだ。嫌な子はそんな風に思っちゃう私の方だわ。自分が哀れすぎて嫌になる・・・。）



私はベッドにうつ伏せになったまま、また少しだけ涙が流れ、気が付かないうちに深い睡眠に入っていた。

身震いで目が覚める。ちゃんと布団を着ていなかったため寒さで目が覚めた。もう11月だ。いくら日本だとは言え、さすがに寒い。

(ううーん、寒い……。今何時だろ?)

私は時間を確認するために傍らの携帯電話に手を伸ばす。着信が3件、メールが4件。全て一花からだ。 「大丈夫?」「ちゃんと家に着いた?」「何してるの?」「寝ちゃったのかな?」など、メールは私の身を案じる内容ばかりだ。

(何してるのかしら私は……。一花にもこんなに心配させて。)

私はまた自己嫌悪で胸が締め付けられた。「ゴメン、寝ちゃった」とメールを打つと送信。一花はきつと夢の中だろう。だって時間はもう3時を過ぎたところだ。起きているわけがない。

(明日ちゃんと謝っておこう……。)

私はそう思うとモソリと起き上がる。寝起きにグルグルと頭が回転したので、もう睡魔は襲ってこなかった。ふうくと溜息を吐きながら、PCの前に座ると起動スイッチをポチツとな。PCが鈍い起動音を発している間、軽く歯を磨くことにして洗面台に向かう。口の

中が気持ち悪かった。歯ブラシを啜えながらまたPCの前に座り、起動パスを打ち込み再度エンターキーを押す。これでPCは完全に目を覚ますはずだ。後はまた少し待たなければならぬ。歯磨きの続きを終えて口を濯げば丁度いい時間になるだろう。特に急ぐ理由も無いので、ゆっくりと歯を磨き私はPCの前に座った。いつものように冒険者のログイン画面を開きパスを打ち込むと、眩い光の中に出る。最後にハーヴェストと過ごした場所、世界樹の根元に私のチャムは立っていた。血盟員リストを開くと、誰がINしているかを確認する。ハーヴェスト、いちかは当然居ない。居たのは例の痛い盟主だけ。すぐに血盟チャットで挨拶されたので、ちよつと離席と打ち込むと反応が無くなった。血盟員リストを確認していて、私はあることに気付く。萌える闘魂が居なくなっていた。彼は前に言った通り、時期を見計らって血盟を脱退していたのだろう。そんなことにも気付かないくらい自分は舞い上がっていたのかと呆れてしまふ。

（ふう・・・、秋庭君抜けちゃったのかあ。私ちゃんと見送りもしてない。どんどん彼は遠くに行っちゃうのね。何だか寂しいな・・・。はあ・・・、自分で避けようと思ってたのに馬鹿なこと考えてる。）

私は一層気分が重くなる。何もこんなタイミングで知る必要は無かった。悪いことは重ねて起こるものだ。もうINしてても意味は無いしログアウトしようと思えばメニュー画面を開いた瞬間、私はある項目にチェックが入っているのに気付いた。それはメールボックス。ゲームのキャラクター同士でメールをやり取り出来るシステムだった。

（誰だろう？アイテムの商談なんかしてないし・・・。もしかして秋庭君？）

秋庭実から脱退挨拶のメッセージでも入っているのかもしれない。開けるのを躊躇ったが、いつの間にかメールボックスは開かれていた。差出人は「収穫」と言う名前で、私は身に覚えが無い。

(誰だろう・・・。とりあえず確認してみようかな?)

【メール】

こんにちは^^突然で驚かせたかな?ハーヴェストの別キャラです。付き合いだして2ヶ月も経ったし、そろそろ僕はキミに会ってみたくなりました。今は 県 市に住んでるんだよね?僕はx x県に住んでいます。意外と近くて驚いたでしょ?電車で2時間も乗ればキミに会いに行ける距離に僕は居たんだよ。一度リアルのキミを見てみたい。やっぱりゲームじゃ物足りないよ。よければ僕の携帯に電話してください。番号は080 - XXXXX - XXXXXです。時間はいつでもいいからね^^

【メール了】

「嘘っ!!!ハヴさん?」

私は思わず声に出してしまった。素直に信じられず、何度もメールを読み返す。付き合いって2ヶ月、私の所在、私が彼に言った内容に間違いない。このゲームでは一花と秋庭実しか知らない私の所在。他に知っているとすればハーヴェストだけだ。間違いない。電話番号も一花と秋庭実とは違う。手の込んだドッキリと言うわけではないようだ。私は震える手で携帯電話に番号を入力する。後は電話ボタンを押せば彼の声が聞こえる。だが、私はあと一步を踏み出せずに躊躇していた。

(何を戸惑ってるのよ……。やっと八ヴさんが重い腰を上げてくれたんだよ？私に会いたいわって言うてくれてるんだよ？私が尻込みしてどうするのよっ！頑張れ私っ！あああ〜ん、やっぱ無理かもお・  
。。。。)

私は変な小芝居を心の中で演じている。頭がテンパってしまい、携帯と睨めっこをしながら押すか押さないか考え込む。今が深夜だという考えはすでに頭から消えていた。非常識すぎるだろうとか、嫌われないかなど、その時に私には考えもつかなかった。

(押せっ！押してしまえば楽になれるのよっ！今さら止められないわよっ！いいのっ！？押しちゃうよっ！？押せっ！)

私は意を決してついに通話ボタンを押す。プップップという接続音が聞こえ、ついに呼び出しコールがなった。

(やっちゃったよ……。やっちゃったよ私……。)

プルルルルプルルルルプルルッピッ

「もしもし？」

電話の向こうから少し高い男性の声がした。これが夢にまで見たハ―ヴェストの声。

「もしもし？誰？」

私は無言だった。何を話せばいいか分からない。

「なんだ……。イタズラなら切るからね。」

「あ、あああの、私です。チャム……です……。」

「チャムちゃんっ!？」

「はい……。チャムです。」

「あああ、愛しのチャムちゃんからやっとな電話が来たっ!僕ずっと待ってたんだよ。」

(僕……。ハヴさんの一人称は僕なのかあ。ずっと俺だと思ってただけだな。)

「ああ、何から話そうか?そっか、会おうっ!一度会いに行きたい。」

「え、ええっ!?!いきなりですか?」

「だって僕達付き合ってるんでしょ?会って何か問題ある?」

「いえ……。無いですけど心の準備が……。」

「そんなの愛し合う2人には関係ないんじゃないかな?」

「ええっ!?!愛し合う2人って……。」

「違うの?」

「いえ、そんな意味じゃ。でも意外でビックリしちゃって……。」

「そんなに意外？男なら愛する女性に会いたいのは当然でしょ？」

「あ、そうじゃなくて、まさかハヴさんが愛してるとか言うって意外で……。そんなキャラじゃない気がしてたから。」

私のハーヴェストはおちゃらけているが、どこか硬派なイメージがある。愛なんて口が裂けても言いそうになかったので、度肝を抜かれたのだ。どこか違和感がある。

「あの、本当にハヴさんですよね？」

「疑ってるの？僕等しか知らない秘密でも話そうか？」

そして淡々と最近のデートの内容を語る。どう考えても本人だ。

「あ、もう分かりました。ハヴさんですね。疑り深い性格のものですみませんでした。」

「分かってもらえて嬉しいよ。」

「あ、でも会うつてどうやって？」

「僕がキミの街まで行くよ。お酒でも飲みながらゆっくり話そう。」

「あ、はい……。分かりました。」

「じゃあ今度の土曜日なんてどうかな？」

「急な話ですねえ……。」

「本当は今すぐにも会いに行きたいんだけど。」

「分かりました。私も時間を空けますので、また連絡します。」

私はその後、しばらくハーヴェストと会話を楽しんだ。イメージが随分違うけど、お茶目な人らしい。そして、妙なお願いをされた。土曜日までドキドキしたいから、ゲームで会うのは止めておこうと言うのだ。数日、冒険者にログインしないでおこうと。首を捻ったけど、彼のお願いなら聞かないわけにはいかない。私は快諾した。

私は土曜日までポーカーフェイスで過ごす。一花には学校で謝っておいたし、秋庭実には会っていない。私の心を乱す可能性は少しでも排除しておきたかった。ついにハーヴェストと会うのだ。あの夜の落ち込んで世界中から見放されたような気分はとうに消え失せ、今は世界がバラ色に輝いて見える。ハーヴェストはどんな顔をしているのだろうか。声は若干イメージと違った。低くハスキーな声だと勝手に想像していたが、ジャパネトの社長ののようなキーの高い声だった。正直ガツカリしている。顔はどんな感じなんだろうか。期待と不安で胸がおかしくなりそうだ。

「智っ！ニヤニヤ病が再発してるよ？」

「秋庭君と手なんか繋いでラブラブしてるからよ。私なんかまた彼と別れ話になりそう。うんざりだわっ！」

一花と山岡晴美が、ついニヤニヤしていた私を見ながら毒を飛ばす。ちなみに山岡晴美の彼氏はユウキ君だ。あれから付き合うことになったんだって。どうでもいいけど。

「最近の智はよく笑うと思ってたけど、これじゃ病気ね……。」

「幸せで頭が溶けてるのよ。今の顔つたらないわ。」

「失礼よあなた達……。」

「智って幸せなの？何で？どうして？彼氏も居ないのにつ！」

「馬鹿ね一花、この娘はもてるんだから、男なんてその気になればすぐなのよ。」

「その辺のビッチみたいない方やめてよねっ！」

「ビッチって何っ!？」

「誰にでもやらせる頭も下も緩い女のことよ。」

「こそ、晴美みたいなねっ！」

「言ったわねっ！」

講義中にも関わらず、女子のお喋りは火が点いたら止まらない。教授がキレてチヨークが飛んでくるまで、私達はお互いに顔を寄せ合っただけでクスクス笑い合っていた。



ついに運命の土曜日がやってきた。私は朝の5時に目が覚め、ずっとソワソワしている。約束は昼の2時。まだ5時間は間がある。

(うー、何着ていこうかな？セクシー系はダメね。やっぱり大人し目の青でコーデイネイトしたほうが無難かな？でも子供っぽく見られたらやだし、リップだけでも冒険しちゃうかな？一花と一緒に買ったけど一度も付けてない赤のグロスなんてどうかな？やばいかな？)

ずっとこんな調子で悩んでいる。結局、最近買ったマーキュリーデユオのミニのワンピースにトレンチコートを合わせ、レギンスにブーツとカジユアルにまとめる事にした。髪は後ろでアップにし、お気に入りの髪留めで一まとめにする。背中まである長めの髪は、時間を掛けて何度もセットし直す。やっと気に入った形に纏めると、メイクをバツチり決めて、私は戦闘準備が整った。4時間も掛かったのは内緒だ。全身が写る大きな鏡の前で何度かポーズを決めてみる。悪くない。

(あとは1時半に家を出れば完璧ね。気合入れすぎかな？)

時計を見るともう13時を過ぎていた。時間を掛けすぎた事もあり、意外にもギリギリになっている。私は野菜ジュースとゼリーを食べると、歯をよく磨いて口臭のチェックをし、香水を少しだけ付けるとブーツを履いて駅に向かった。一応時間通りに駅に着く計算だ。

(焦らなくて大丈夫。まだ時間はあるわ。。。)

私は逸る心をどうにか落ち着かせ、何度も深呼吸をしながら駅のホームでハーヴェストを乗せた電車が到着するのをひたすら待った。

14時10分。少し遅れた電車が駅のホームに到着したアナウンスがある。彼の指定した待ち合わせ場所で私はハーヴェストの登場を待ちわびた。首にはシルクで出来たチヨーカーを巻いて目印にしている。これですぐに分かるはずだ。彼が他の女の子と間違っ可能性は少ないだろう。駅の改札は今到着した電車からの客で賑わっている。改札を抜ける男性を自然と全て目で追った。私はまだハーヴェストの素顔を知らないのだ。メールで写メールの交換を要求されたけど、私は断っていた。直に会う前に値踏みをするような行為はしたくなかったのだ。それに、今のドキドキは簡単に経験出来るものじゃない。ソワソワしながら改札を眺めていた私は、一人の男性と目が合う。顔はまあ普通だろう。少しだけ顔が丸いイメージ。歳は30手前くらいだろうか。その彼は私を見ると満面の笑みで近付いてきた。

「えっと、チャム？」

彼は真っ直ぐに私に近寄ると私の名前の確認をしてきた。間違いない。ハーヴェストだ。私の緊張はピークに達する。顔を真っ赤にして固まってしまった。

「あれ？人違いでしたか？知り合いに似ていたもので・・・。」

何も言わない私にハーヴェストは謝罪をしてすぐにホームをキョロ

キヨロと見回した。

「えっと・・・、私がチャムです。ハヴさん・・・？」

私はやっと声を発した。少しこもった声。

「え？あつー！やっぱりね。イメージ通りだよ。」

ハーヴェストは私に再度向き直って、また満面の笑みを浮かべた。私もぎこちない笑みを返す。緊張で顔の筋肉が硬直している。

「あの、えっと・・・、どこ行きましょうか？」

「チャムに任せるよ。僕はこの街は初めてだからね。お奨めの場所があればだけど。」

「ううーん、車があれば色々あるんですけどね。徒歩か公共の交通機関だと少し遠いところばかりですね。ここは学生の多い街ですから、観光みたいなことには向かないんです。」

「そっか、じゃあレンタカーを借りよう。運転できる？」

「あ、オートマなら大丈夫です。ペーパーですけど。」

「そっか、僕も運転は出来るから心配しないで。」

そっとうとハーヴェストは自然に私の手を取って歩き出した。突然のことに一瞬体がビクツとしたが、愛しい彼の手だ。すぐに気合を入れると、私からギュツと力を入れて彼の手をしっかりと握り返した。好きな男性と一緒に手を繋いで歩く。それだけで私は天にも昇

る気持ちになつてしまふ。自然に口の端が持ち上がり、笑みが零れた。そんな私の表情を見ながら、ハーヴェストは優しい笑みを返してくれた。

駅前のレンタリースで乗用車を借りると、私のナビで車は走り出した。目的地はよく分らない。とりあえず走ってみて、色々と街の案内をしようと言う話になっている。まずは私の通う大学。それから街の目ぼしい物を次々と観光する。車はオートマ車で、ハーヴェストの巧みなシフトチェンジを見ることが出来なかつたのが少し残念だ。秋庭実のシフトチェンジのような華麗な動きをまた見たいなど心の隅で思つてしまふ。

（う……、ハヴさんとのデートなのに何で他の男が頭に浮かぶのかしら……。）

隣で笑顔のままハンドルを握るハーヴェストの顔を横目で窺い、申し訳ない気持ちが膨らむ。よく考えれば、先ほどから私は彼の言動や動きを、全て秋庭実と比較して見ていた。何て失礼なことだろうか。でもまあ仕方が無いことなんだろう。実は、私に近しい異性は秋庭実しか居ない。昔から男を嫌悪の対象と捕らえていた私は、他の友人達が驚くほど異性との触れ合いが無かつた。手を握られるのもハーヴェストで3人目という不甲斐なさである。1人目は中学生の時告白された男に強引に繋がられただけ、2人目は秋庭実。考えれば悲しくなるだけだ。

「結構広い街だね。気に入ったからちよくちよく遊びに来ようかな

「？」

「え？ああ、ぜ、ぜひ遊びに来てください。」

悲しい妄想に耽っていた私は不意をつかれ、つかえながら返答する。ハーヴェストはその様子を可笑しそうに笑っていたが、何となくその笑顔に黒いものが混じっているのに私は気付いてしまった。最初は有頂天だった私も、だんだんと冷静に対処できるようになっていたのだけれど、生のハーヴェストはやはりゲームの彼とは違って、いるように思える。優しそうな笑顔も、何だか良い人を装っているようで自然では無い。それに視線がチラチラと私の肢体を走るのも気になる。男性なら致し方ないことだと思っけど、秋庭実はこちらでは無かった。そう、秋庭実と違和感無く接触できていたのは、実は私に対する下心がほとんど見えなかったことに大きな原因があったとも言える。

（うーん・・・、やっぱりハヴさんも男なんだなあ・・・。この後変なことする気なんか無ければいいんだけど。ハヴさんなら平気だよね？いつも下ネタばかり言ってるけど、きつとピュアな恋愛でも大丈夫っ！）

私はこの時、男性の考えと言う物を少しも理解していなかったし、この後、当然起こるであろう事も頭の隅に追いやってしまった。遊びに来る目的も、純粹にこの街が気に入ったのだと勝手に解釈してしまっていた。そして、ハーヴェストと会話をするほど、行動を知るほど、彼への想いが失望へと変わり始めていた。

外も暗くなり、私とハーヴェストはお洒落なバーに足を運んでいった。郊外にある飲み屋街にその店はあった。周りは居酒屋やバー、ラウンジ、スナックなどで囲まれ、いかかわしい派手なネオンの休憩所も数多く存在する。何故こんな場所でお酒を飲むことになったかと言うと、ハーヴェストが飲み屋の情報誌でわざわざ調べていい店を見つけたので是非に、と言う事で断れなかったのだ。

「こんなお店初めて？」

「え、はい。いつもは友達と居酒屋さんで焼き鳥ばかりです。お金も無いしっ！」

「そっか、たまには大人の雰囲気味わってみてね？せっかく可愛い格好なんだから。」

「え、あ……、ありがとうございます……。」

可愛い格好というフレーズに顔が赤くなる。私は奨められたカクテルを次々に飲み干していった。甘くて美味しい。

「お、酔ってきてるな。顔が赤くなって可愛いよ。」

「そんな、可愛くなんてありませんって。」

「いや、可愛いよ。それに色っぽいな。このまま家に持って帰っちゃいたくなる。」

だんだんと話が変わるほうへ誘導されていく。私はいつもはお酒に酔わない。友人達には「ザルのサギリ」などと不名誉な称号まで頂い

ている。たかがカクテルだと甘く見ていた。しかし、明らかに酔いが回ってきている。おかしい。

（何だろぅ……。すごく体が熱い。それに眠い……。どうしよう……。）

「僕、チャムのこともっと知りたくなったよ。僕の恋人がこんなに綺麗で可愛い人で良かった。」

「そうれすか……。」

「うん、だから僕達はゲーム以外にも、もっとお互いを知った方がいいと思うんだ。」

ハーヴェストの手が私の肩を優しく撫でる。そして首筋へと手が移行していく。

「らめれすよう。ハヴさん嫌らしいころしれますね。」

「うん、チャムで興奮しちゃった。」

「らめれすつね。私ちよつろお化粧をなおしれます。」

すでに呂律が回らない。こんな自分は今まで知らなかった。軽い混乱がずっと続いている。私はこのままじゃまずいと思い、化粧室に避難する。

（何だろぅ……。おかしい。これは変だ。それにハヴさんのあの態度、確実に私を持ち帰ろうとしている。このままじゃ酔った勢いで変な事されちゃうわ……。そんなのダメだ。今日はもう帰ろう。）

でも、きっとハヴさんは私をそのまま帰す気なんか無いに決まっている。よく考えたら当たり前じゃない。それにハヴさんがあんな人だと思わなかった。やばいよ、もう私あの人のこと好きじゃない。かなり好意が薄れてきてる。何か正体見たりって感じだな……。もう帰りたい。どうすれば逃げられるかな？)

私はもう、今日一日でハーヴェストに対する病的な好意がすでに無くなってしまっていた。恋は病だ。愛とは違う。私はハーヴェストに恋はしたけど、現実の彼を愛することは出来なかったのだ。そう結論すると私の行動は早かった。携帯電話を取り出し、一花に連絡を入れる。現在地と店の名前、偶然を装い迎えに来て欲しいことなどをメールで一花に送信する。返信は来なかったが、代わりに着信がある。

「もしもし智？どういうことこれ？」

「うん、いちは、わらひいまおることお酒飲んれるんら。」

「はつきり喋れっ！！！」

「おることお酒のんれるの。れももう帰りたくて。」

「呂律が回ってないよ？男とお酒を飲んでるけどもう帰りたい。だから偶然っばく迎えに行けばいいのね？」

「うん。」

「そっか、最近浮かれてたのはその男のせいね？でも勘違いだったとっ？」



「うん。」

「分かったわ。みのりん行かす。」

「あきわくんはらめえ……。」

「黙りなさいっ！私に隠れて男と付き合おうたあ太い奴じゃ。懲らしめてしんぜよう。」

「おねがひ、あきわくんはらめえ……。」

私は秋庭実が迎えに来ると言われ、強い恐怖心が生まれた。どうしてだろう。とてもこんな姿を見られたくないと思ってしまったのだ。一花はすでに通話を切っている。私はもうどうにでもなれと化粧室を後にする。この際、秋庭実に痴態を晒すのは仕方ない。泥酔状態など見られたくないけど、このままときっとハーヴェストにやりたい放題されるだろう。それよりはマシだと思った。

覚束ない足取りで席に戻ると、ハーヴェストは怪訝な顔で出迎えた。あまりにも私の帰りが遅かったので、心配したのかもしれないけど、それは違ったとすぐに思い知った。

「何してたの？」

「ちょっと化粧を直してましら。」

「本当に？」

「はい。」

「じゃあ何で携帯持ってんの？」

迂闊だった。私は携帯電話を握り締めていたのだ。

「ちよつと貸せっ！」

ハーヴェストは乱暴に私から携帯電話を奪い取る。カウンターのバーテンが変な顔で私達を見ていた。私は豹変したハーヴェストが恐ろしくなり、黙って携帯を操作するのを見ていた。

「……………何だこのメール。迎えを寄越したのか？」

先ほどの一花に送ったメールを読まれたらしい。他人の携帯電話を見るなんて最低だ。もう私はハーヴェストに対する気持ちは完全に無くなった。

「……………はい。今日はもう帰ります。ありがとうございます。」

「偶然を装って迎えに来いだと？俺に失礼だと思わないのかお前？」

「……………もう帰ります。」

私は高まっっていく場の危機感を感じ取ってその場を離れようとした。財布を出し、カウンターで勘定を済ませる。ハーヴェストには不愉快な思いもさせてしまったので、全額私が出した。ちよつと痛い出費だけど仕方ない。早くこの場を離れたかった。揺れる視界と回る

世界を必死で安定させようと頭を振って、私は出来る限り足早にその場を離れる。後ろからハーヴェストが早足で追ってきた。

「ちょっと待てよ。このままバイバイなんて虫がよすぎるだろうっ  
！」

ハーヴェストは私の手を掴むと、逃げようとした私を強引に引き寄せる。やはり男だ。それなりに力が強く、泥酔の私には抗いようがなかった。私は弱々しい抵抗はしたが、手を掴まれ引つ張られる。ヒールだったらきつと転んでいただろう。ブーツで良かった。

「離しれくらさいっ！もう帰るんらってばっ！！」

「煩いっ！ちゃんと勘定はしてもらおう。」

「今全額払ったじゃないですかっ！」

「黙れっ！！！そんなもんで足りるわけないんだよっ！こっち来い。」

私は強引に引つ張られて歩く。いや、引き摺られる。ハーヴェストはそのまま近くのいかかわしい明るいネオンの休憩所を目指した。あそこに入ってしまえばもう迎えは来ない。私はゾツとして最後の抵抗をする。しかし、抵抗できるわけもなく、強引に腰を抱かれて入り口まで連れてこられた。

「はあはあ、いい加減に観念しろ。今日のためにわざわざ親の財布から10万もくすねたんだ。今さら逃がさねえよ。」

「やめてよっ！親の財布からってあんら何してんのよ……。」

「30ニートだって言っただろうがっ！そんなことはどうでもいいんだよっ！！」

「ひっ！やめてよう……。離ひてえ……。」

もう泣き顔の私の傍を大きな影が横切った。そして、ハーヴェストが吹き飛ぶ。明るいネオンの玄関の自動ドアにゴツンという音と共に突っ込む。私は大きな影に支えられて何とか倒れずに済んだ。大きな影の正体は秋庭実だった。一花にメールを送ってから10分ほどだろうか。随分早いお着きだったけど、私はそのお陰で事なきを得た。感謝で胸が一杯になる。

「遅くなった。」

秋庭実は吹っ飛んだハーヴェストを一瞥すると、すぐに私に向き直りそう言った。

「遅くないっ！ありあと……。」

「ありあと？」

私は呂律が回っていない。

「あ・り・が・と・う・よ。わらひもつ少しで……。ほんとにありあと……。う、ぐす……。。」

助けに来てくれた事に対する感謝と嬉しい気持ちで秋庭実の腕にしがみつく。そして私は嗚咽を漏らしてしまった。

「もう大丈夫だからな。心配いらなから泣くな。」

秋庭実私の体をしつかりと支えてくれた。肩に手が寄せられているが、この際文句は無い。ハーヴェストはゆっくりと起き上がったが、秋庭実を見て怯えたような顔をする。この前のナンパの時もそうだったが、やはり体の大きな彼は男性からも脅威の存在なのだろう。

「あんた誰だ？」

秋庭実男に問う。

「ハヴさんよ。冒険者の。ぐす。」

嗚咽を抑えながら、私が代わりに答える。

「ハーヴェスト？」

「そうよ。わらひ彼と付きあつたの。すん。」

「お前誰だ？」

再度、秋庭実ハーヴェストに問う。

「らからハヴさんらって・・・、何？」

秋庭実の顔には激しい怒りが見て取れ、私は一瞬意味が分からなくなった。私にどうしようとした事に対する怒りじゃない。新しく沸いた怒りだ。

「こいつがハーヴェスト？笑わすな。」

「どういう意味？」

「俺は彼を知っている。お前誰だっ！！！」

「ひっ！ハーヴェストですう……。」

「……。茶霧、すまんが車で待ってる。そこに停めてるから。鍵は開いてる。」

「う……、うん。グス。」

私は腑に落ちなかつたが、素直に従う。先ほどから凄まじい睡魔が襲ってきていた。もう立っていられないほどの睡魔。涙を拭いながら可愛い車の助手席に座る。

「正直に言え、お前誰だ？」

最後に聞いた秋庭実の声だった。私は座席に背を持たれると、すぐに眠りに落ちてしまった。

## 第九話 harvest (後書き)

ああ、ひどい出来だ。だが後悔はしていない (ry

また後輩から弄られそうな内容になってしまいました。ちょっと謎を残して次回に続く。ゾンビ書けよって事に対しては・・・本当に

・・・ため中・・・

すまないと思っている)・・・)

第十話 お嬢だからさ（前書き）

謀ったな！シャアッ！！！！

私の弟、諸君らが愛してくれたガルマ・ザビは死んだ。何故だっ！  
！！

坊やだからさ・・・。



## 第十話 お嬢だからさ

第十話 お嬢だからさ

水の底から浮かび上がるような浮揚感。私はゆっくりとまどろみの中から意識を覚醒させていく。傍には一花が心配そうな顔をして座っていた。チャムが私の胸の上に丸くなっている。

（ああ、チャムだ。私、嫌われたわけじゃなかったのね。思い出してくれたのかな？）

暢気な事を考えていると、一花が私を揺り動かした。軽い頭痛を感じる。

「智？智ちゃん？ここが何処か分かる？」

一花の声から私はとても心配されていたことを感じ取る。何だか暖かい気持ち溢れた。

「一花。大丈夫よ。何でそんなに心配してるの？何かあった？」

私は素直に返事をした。見る見る一花の顔が変容する。マリア様のような慈愛に満ちた顔から、修羅の顔へと。

「何かあったかですってえっ！！！！この馬鹿娘がああああああっ！！！！」

「ひひひひひっ！！」

一花の怒鳴り声。私の軽い頭痛は一気にボルテージを上げ頭の中で激しいドラムを打った。

「どれだけ心配したと思ってるのっ！あんた何も覚えて無いんじゃないでしょうねっ！！！」

「あいたたたた、一花、頭痛いよ……。」

「やかましいっ！それは天罰よこの色ボケ女ああああああっ！！！」

「ひええええ……。」

チャムは一花の大声に飛び起きて廊下に消えた。私は一花の怒りの原因を必死に脳内で検索する。結論、ハーヴェストの事。

「も、もしかしてハヴさんと付き合ってたの隠してた事怒ってる……？」

「違うわっ！！バレバレだったのっ！そんなことじゃ無くてあんたレイプされそうになったのよっ！？ちったあ反省しろっ！！！」

「そ、そこかあ……。」

「他に何かあるのよっ！みのりにちゃんとお礼言いなさいよっ！」

「わかったわよう……。」

私は布団を被って一花の攻撃を凌ぐ。

「目が覚めたか？一花、少し声のトーン落とせ。隣人に会うのが恐くなる。」

「あ、ごめんね。この馬鹿見てたらついでね。」

怒りに燃える一花とは打って変わって、秋庭実は心配そうな顔で私の傍に立つ。そしていつになく優しい声で子供に言い聞かせるように私に問診を開始した。

「なあ茶霧。頭が痛いのか？他にどこか変なところ無いか？気分が少しでも良くなったら救急病院に連れて行くからな？おかしい所があったら素直に言えよ。日曜日だから他に開いてないんだよ。」

「大丈夫……です……。何でそんなに心配してんの？2人とも変よ？」

秋庭実が一花と顔を見合わせる。「頭も打ったのか？」「記憶障害？」などと尋常じゃない会話が私の耳に入ってきた。

「ちよっ、ちよっ！何なの一体？私どうしたの？」

「智、あなた変な薬を飲まされてるのよ。何やっても起きないから私すっごい不安だったんだよ？」

「そっとうわけだ。あの偽者な、くそ盟主だったよ。ピーピング何とかって不正プログラムでお前のチャット全部覗いてやがったんだ。そしてハーヴェストに成り済まして恋愛にラリってるお前と一発やっつて自分の女にしようと企んでたんだよ。ご丁寧にデジカメとか持ってたぞ。でももう手は出させない。顔の形が変わるまで殴ってやっただけから安心しろ。免許書のコピーと念書も書かせたから。」

「そんな……。じゃああれはハヴさんじゃないの？」

「そうよ。あなたのハーヴェストな訳無いじゃない。」

「だから安心してゲームも続けていいよ。あの野郎は今日中にキラ全消去させる約束してるから。」

「そうだったんだ……。何か色々とゴメンナサイ。」

「智が飲まされた薬は通販で買った媚薬と睡眠薬だって……。どんな症状が出るか分からないからしっかり病院に行こう？ね？」

「うん……。」

「よし、じゃあ予約の電話入れるぞ。気分が良くなったらちゃんと着替えな。」

「うん、分かった……。」

私は事の重大さは曖昧に感じていたが、とにかく2人には感謝した。一花は「ちよっと待ってて。」と部屋から出て行った。私は立てそうだと思い、おもむろにベッドから起き上がって床に足を下ろした。

「な……。」

秋庭実が私を見て固まった。私は不思議そうな顔をしたと思う。確かに寝起きはあまり見られたくないし、そんなに固まる事はないと思ったのだけど、秋庭実の視線を辿って全てを理解した。私は下着の上にダブダブのTシャツ（白、無地）を着せられているだけの姿



そんなことを真つ赤に腫らした顔で秋庭実は言っていたが、私はそう割り切れない。肌を見られるのも男に手加減なしのビンタを張るのも初体験。もう嫌になるくらい初体験尽くしだ。気まずさなのか気恥ずかしさなのかも分からない。とにかく秋庭実を直視できないでいた。

「まあ異常も無かったし、良かったんじゃないか？軽い興奮剤と市販の睡眠薬だったみたいだし。」

医者診断では、あと血液検査をして違法な物がどうかを調べてもらうだけだ。一応偽者に書かせた念書と、未遂なので示談で済ませた件だけは医者に伝えてある。もし違法な薬物が検出されても、本人の意思では無いと立証するためだ。何か出たら偽者が捜査対象になるだけだろう。その辺りの詳しい話は調べてみないと分からない。禁断症状も無いし、違法なものでは無いだろうと言う診断だった。

「何だかお騒がせしました。大事になるところだったね。」

「そうだなあ。でも一花にもちゃんと感謝しないとダメだぞ？怒鳴ってたのは愛情の裏返しで、本当に心配してたんだぜ。」

「うん、分かってる……。」

一花にはすでにメールで結果を教えている。ただゲームの中の人に会っただけなのに、思った以上に周りの人間に迷惑をかけてしまった。

「なあ茶霧、これに懲りてゲームの人間と付き合うなんてこと止めないか？」

不意に秋庭実がそう言った。私は彼が何を言いたいのか感じ取る。身元も顔も知らない人間と恋愛感情で結ばれるなんて異常だと言いたいのだろう。ごもつともだと思う。でも、彼に恋してしまった私も現実に居るのだ。今回は偽者だったためにフリーリングが合わなかっただけで、本物のハーヴェストとならうまく付き合っただけの事も出来るかもしれない。ただ、そのリスクも考えろと言いたいのだろう。

「秋庭君の言いたい事は分かるよ。でも、これは私とハヴさんの問題。」

「そうなんだが、俺はもう知り合いが泣いてるとこなんか見たくないんだよ。」

彼にとって私は『知り合い』か。友人ですら無いらしい。勿論、色々な意味を含めての知り合いだと言いたかったのだろう。それでも秋庭実は私と付き合う事など「あり得ない」と言っていた。恋愛対象とは見ていないのは疑いようも無い。

「なあ、匿名って言うのは人を悪人にするんだぜ？2chなんかでも、虫も殺せないような一般人が他人を面白おかしく叩いてストレス解消してるんだ。それだけ人間は汚い生き物なんだよ。ハーヴェストだってもしかしたら・・・」

「やめてっ!」

私は秋庭実の言葉を途中で遮る。

「今回はまんまと騙された私が馬鹿だっただけ。それでハヴさんの

人間性がどうとかって話にすり替えないで。」

「いや、俺は可能性の話をしたただけであって……。」

「そんな話聞きたくも無い。私はこれからもハーヴェストと付き合い  
うわよ？それで迷惑を掛けるかもしれない。でもリアルでも恋人同  
士のイザコザなんて掃いて捨てるほどあるわ。」

「まあそうなんだが……。」

「それに秋庭君はハヴさんのこと知ってるんでしょ？」

「え？いやその何て言うか……。」

「だって言ってたじゃない？」

「そこは覚えてるんだな……。」

「うん、よければ私に彼のこともっと教えて欲しい。」

「え、あー、うーん。」

「ダメなの？」

「ああ、電話でちょっと話したただけだからな。武器について説明し  
てやるって。」

「番号とってある？」

「え、いや、無いよ。俺の携帯教えたら非通知で掛かってきたから。」



ただ声は低かった。」

「そっか……。私も同じことやってみようかな。非通知で掛けて  
つて。」

「だから見ず知らずの他人に自分の番号教えてどうすんだよ。その  
辺の危機管理をもっとしろって言ってるんだ。」

「自分も教えたのに？」

「う……。。」

「もういいよ……。私とハヴさんも運命で繋がってればどうにか  
なるわ。全ては時が解決するでしょう。」

私は面倒になって話をぶっ千切る。そのまま2人は無言で車に揺ら  
れ、私を家まで送ると秋庭実は「またな。」と言って走り去ってし  
まった。目も合わさずにコクリと頷くだけの私。

「私もちゃんと考えないとダメね。秋庭君の言うとおりだね。それ  
にもう……。。」

私は去っていった可愛い黒い車を目で追いながら、小さく呟く。直  
視できなかった理由は他にもあったのだ。

翌日から、私は嫌なことを忘れるように学校とバイト、そしてゲ

ームに没頭した。一花や他の友人と遊ぶ時間も減り、いつの間にかもうクリスマスソングが街に溢れる季節になる。単位は順調に取れそうだったし、バイトもそつなくこなし、いい先生になっていていると思う。ハーヴェストとは相変わらずで、頻繁にデートを重ねていた。当然レベル上げも頑張つて、いつの間にか40になるうとしていた。盟主はあの日の翌日、スノークさんに盟主の座を譲り渡すと、永遠に登録を抹消された。秋庭実が、彼に書かせた念書と免許のコピーを添付して運営に通報したのだ。リアルに犯罪を犯そうとした者に運営は厳しく、アカウント剥奪という重い処分を科した。ピーピングプログラムの使用も規約違反だったので、有無は言わせなかったらしい。クズには相応しい末路だ。ちなみに、本物のニートだったそう。これまた秋庭実が、免許証のコピーから親に連絡を取り、全ての事実を暴露したのだ。一花が面白そうに聞かせてくれた。これで事実上、彼からの報復は無いだろう。私はゲームで接触する以外、秋庭実とは連絡を取っていない。私は今、仮想空間とはいえ男性と付き合っている。他の異性と親しくする気は無い。正直に言うとなれば、秋庭実のことばかり考えてしまつて、気持ちが落ち着かなくなつてしまつたのだ。もう疑いようは無かつた。私は秋庭実に好意を抱いている。それも特別な好意。

（これはもう誤魔化せない。でも私はハヴさんと付き合っているし、秋庭君も私に対して特別な感情を持つなんてあり得ないと言つた。この気持ちは知られる訳にはいかない。だからもう、秋庭君とは会つちゃダメなんだ。）

ピンチに悉く駆けつけ救つてくれた男に惚れるなと言う方が無茶な話ではないだろうか。私も普通の女の子、王子様とは言わないけれど、やはり格好いいと思つてしまつた。だから私は、彼との接触は極力避ける事にした。これ以上彼のことを知りたくない。知ればきつと、私はこの気持ちを肥大化させ押さえきれなくなる。玉砕が恐

い。結果が分かっている告白ほど無意味なものはない。私は秘めたる想いを胸にしまいこみ、忙しさの中に埋没させるしか自分を守る方法を思いつけなくなっていた。

一花は相も変わらず秋庭実の家に通い、猫と遊んだりゲームをしたり、レポートを書いたり、そして寝たりしているらしい。私もある毎に誘われるが、何かと理由を付け断っていた。秋庭実の家に行けば、彼の匂いに包まれ我を忘れるかもしれない。暴走する可能性があるのだ。行くわけにはいかない。

「ねえねえ智、クリスマスは予定あるの？」

今年もあと10日というある日、一花が唐突に私にクリスマスの予定を聞いてきた。これは何か企んでる。私は直感でそう感じた。

「ある。」

「ハヴさんとデートとか言ったらしばくわよ。」

見抜かれている。だけど他に用事は思いつかない。

「ハヴさんとデート……。。」

「ハヴさんに確認してるわよ。そんな予定は無いつて。」

「これから約束するのよっ!」

「ざんねーん、ハヴさんクリスマスは居ないってさ。私が確認しといたっ！」

「く……。」

なんと用意周到なのだろう。一花は私の考えそうなことなど予想済みだったのだ。

「智ちゃん暇人けてーいつ!!!」

「何なのよー一体？クリスマスに何かあるの？」

「みのりんと……」

「行かないっ！」

私は皆まで聞かずに断る。それも強い口調で。

「何で……？」

「秋庭君のところでしょ？私は遠慮します。勝手に2人で仲良くすればいいじゃない……。」

「いや、今のところ3人だよ。」

「3人？」

思わず聞き返してしまった。秋庭君と一花と他に誰が来るのか知りたい。

「そそ、私とみのりんとみのりんの従兄妹。」

「イトコ?」

「そそ、来年からうちに来るんだって。商業高校の推薦枠で決定だつてさ。」

「へー、推薦なんかあったんだ?うち国立だよ?」

「あるよ、商業高校からなら経済だね。つまり私達の後輩ってわけ。」

「ふーん。」

(何だ、唯のイトコか。心配して損した。って何の心配なんだか。。。)

「可愛い子だよー。私はもう会ったんだ。来年から秋庭君の家に住むかもって一度見学に来てた時。」

「イトコって……、女の子っ!?しかも住むって何っ!」

「んだ。従兄妹同士だし問題ないっしょ?」

「現役JK……。」

「来年はもう女子高生じゃないよ。」

「それでもピチピチじゃないの……。」

「気になる？気になるよね。気になる訳ないんだっ！！！」

おどけた様子で私をからかう一花。

「気にならないわよヴァカッ！」

「ふっふっふ、智ちゃん、最近秋庭君と全くコンタクト取ってないでしょ？」

「よくご存知で……。」

そこまでリサーチ済みとは恐れ入る。面食らっている私に一花は低い声で言い放った。

「俺どうも嫌われちゃったみたいなんだよね。やっぱり色々見られたら女って相当シヨクなのか？」

「それ秋庭君が言ったの……？」

「うん。」

嫌っているのでは無い。断じて違うし、寧ろその反対だ。だけど、本当の理由は言えない。

「違っって言っというて。」

「自分で言えばいいじゃない。」

「言えたら苦労しないわよっ！」

「何でそんなに行きたくないの？」

「それは……、あの……。」

私は口ごもる。

「好きになっちゃったみたいなの、あ・た・しっ！でしょ？」

一花に凶星を突かれた。私は顔を真っ赤にしながら反論する。

「違うわよっ！……！」

「いやいやいやいやっ！」

「違うのっ！私はハヴさんと付き合ってるんだから秋庭君とは付き合えないのよっ！」

「付き合わないじゃなくて付き合えないなんだ？ふっふうくん。」

まるでイタズラツ子のような笑みを浮かべる一花。含んだ笑いを私に向けている。

「何が言いたいの一花……。」

「ゲームの彼に遠慮してリアルな男への気持ちを隠し通す。辛いでしょ？」

「辛く無いわよ。」

「大丈夫だよ。前にも言ったじゃない。秋庭君は智のことが好きなんだってばっ！」

そう、前に一花が私にそう言った。だけどキツパリと否定されている。

「あり得ない。」

そう、そう言われた。私と付き合うなんて『あり得ない』と。

「む？」

「秋庭君はあり得ないって言ったわ。あんた覚えてないの？」

「いつだっけ・・・？」

「11月（第八話）よっ！あんたが写メ見せたときっ！！！」

「あー、そんなことあったわね。智そんなこと気にしてたの？」

「面と向かって好きな男に言われれば嫌でも気にするわよっ！！！」

「やっば好きなんだ？」

私はハツとした。馬鹿みたいな誘導尋問に私はまんまと引っ掛かってしまった。この1ヶ月余り、胸に鬱積していた想いは事の他大きかったらしい。一花はニヤリと笑い、私の肩をポンポンと叩く。

「もう智は可愛いなあっ！よし、お姉さんに任せなさいっ！！！！」



「一花、謀ったわねっ！」

「ふ、お嬢だからさ……。」

私はガ マか。

「もうっ！ずっと秘密にしておこうと思ったのに……。」

「智、そんなこと抱えたままだと疲れちゃうよ。そろそろ現実に戻って幸せになっていいんじゃない？」

「でも……、私はまだハヴさんも好きなんだ。彼とゲームの中でデートしてると、癒されてる。」

そう、もう1つの問題はハーヴェスト。私の彼に対する恋心も何ら変わることは無いのだ。私は同時に2人の男を好きになってしまっている。それはとても罪なことで、罪悪感でうなされる夜もあるほどだった。

「それはもう問題ないわよ。全く問題無し。」

「意味が分かんないんだけど……。」

「クリスマスにみのりんの家に来れるなら教えてあげる。」

「どういうこと？」

「来たら教えてあげる。」

「……行くわよ。」

「よっしゃっ！じゃあ、ちゃんと打ち合わせもするから着てね。」

「分かった……。」

「あー、クリスマスが楽しみだなあ〜。」

「花は浮かれたような声を出して、小躍りしながら帰っていった。」

第十話 お嬢だからさ（後書き）

初ポロリでしたね。

秋庭君、お前の鼻血は何色だっ！！

どうでもいい小ネタが少し混じってましたがいかがだったでしょう  
か？

たまにはコミカルにね）。。

第十一話 k i s s (前書き)

題名がベタですね。よかよか(、・、・、)

## 第十一話 k i s s

### 第十一話 k i s s

大学の講義も22日で終了し、バイトもあと1日で終わる。そんな12月23日、私は朝から憂鬱だった。今日は一花と打ち合わせがあり、朝から大学のカフェで待ち合わせている。一花が来るまであと30分はあったが、私は黙ってカフェオレを飲みながら携帯電話を弄って時間を潰していた。声を掛けてきた男が2人、クリスマススの予定を聞いてきた男が3人、嫌味な言い方もしれないけど、相変わらず私はモテる。でも、本当に好きな男には振り向いてもらえない哀れな女。

(あー、憂鬱で死にそう……。一花まだかなあ……。)

私は早く着いたことを呪う。自分のせいだけど他人に当たりたい気分だった。

「茶霧じゃねえか。何してんだ？」

また男。私はイラツとしながら振り返り、そして固まった。そこに居たのは秋庭実。今一番私を悩ます罪作りな男だ。途端に顔が熱くなり赤面したのが分かる。ああ、私はやっぱり彼が好きなんだと再認識させられた。

「……一花と待ち合わせだよ。」

私はやっとそれだけ答える。

「ふう〜ん、俺も一花に呼び出されてるんだ。ここいいよな？」

秋庭実はそう言って向かいの席に座る。「コーヒー1つね。」などと注文を取りにきたお姉さんに愛想良く笑顔を浮かべながら注文していた。当然、その笑顔に意味は無い。単にコーヒーを注文しただけ。それでも他の女に笑顔を向ける秋庭実が少し憎たらしく見える。

(・・・私って最低。ウェイトレスに嫉妬してる。)

私はまた軽い自己嫌悪に浸りながらテーブルに突っ伏した。秋庭実にはかなり愛想の無い嫌な女に見えていると思うけど、実は心臓が破裂しそうなほどドキドキして、顔を合わせられないというのが正直なところだった。小学生みたいな私。

「何だ？今日もご機嫌斜めだな。」

「・・・そんなんじゃないわよ。」

「そっか？でも機嫌悪そうに眉に皺を寄せてる顔のほっぺが見慣れるかもな。うん、いつもの茶霧だ。」

面白そうに笑う秋庭実にジト目を向けながら、私は一花の登場を待ち望んだ。2人きりなんて耐えられそうに無い。2人の間に沈黙だけが流れる。まるでお通夜だ。

「・・・やっぱり俺はお前に嫌われてるんだなあ。」

「！」

いきなり口を開いたと思ったらとんでもないことを言う秋庭実。私

は思わず目を見開いて顔を上げた。逆だよ逆。私はあたなのことを好きだから顔を見れないだけ。本当はすっかり目を見て会話したいんだよ。でも出来ないの。

「一花は何も教えてくれないし、やっぱりあれ以来ろくに口も聞いてくれないとさ、堪えるよ。」

「・・・そうじゃない。」

「え？」

「き、嫌ってなんかいないよ。だからそんな顔しないで。」

秋庭実は落ち込んだような神妙な顔をしていたが、私の言葉に安心したように息を吐く。でもすぐにその顔は曇った。

「そうなのか？でもずっと避けられてる気がしてたんだけど・・・？」

それはそうだ。だって避けていたんだもの。

「だ、だって秋庭君には色々と変なとこばかり見られてるし、何だか恥ずかしくて・・・ね。」

半分本当で半分は嘘。

「そんなこと気にしないでいいのに。お前ってやっぱり真面目なんだな。」

真面目か。そんな女じゃない。私は真面目なんかじゃない。もし真

面目なら、同時に2人なんて好きになれないと思う。そう思うとまた気分は沈み、言葉は喉奥でキープアウト。

「一花のやつ遅いな。もうとっくに時間は過ぎてるのに。」

秋庭実は何も喋らない私に気を使って別の話題をふってくる。その気遣いは嬉しいけど複雑な気持ちになった。その時、私の携帯が点滅して、メールの着信を告げた。

【メール】

やつほートモ！

みのりんと買い物してきてねw

私はちょっと用事が出来ました。ってか作りました。

ドキドキワクワク楽しいおっかいもの〜

買う物は、後でまたメールします。みのりんの携帯にね

2時間くらい遅くなっても私はぜんっぜん構いません！がんばれ〜

( > . . < )

【メール了】

「死ねばいいのに。」

私はメールを読み終わってから深い溜息を吐く。こんなことだろうと予想はしていたけれど、ここまでの中すると一花を呪いたくなる。



「メール誰から？」

秋庭実が大体分かってますと言った顔で私に訊ねる。

「一花よ。用事できたから秋庭君と一緒に買い物してきてだって。」

「何を買っただ？」

「メールするってさ。」

私はそう言うとかフェオレを一気に飲み干して立ち上がる。秋庭実も慌ててコーヒーを喉に流し込んだ。熱かったのか舌を出している。

「どうすんだ茶霧？買い物行くか？」

「行くしかないでしょう？」

「だよな。」

その時、秋庭実の胸ポケットから太鼓の音が響いた。「いよう！ドンドンドンドン」と。

「あ、メールだ……。」

何て着信音なのだろう。思わず吹き出す。

「お、何か久しぶりに笑ったとこみたな。」

秋庭実はそう言いながらメールを開き、数秒後無言で私に差し出し

た。今吹き出したおかげで私は自然な感じを取り戻す。少なくとも拳動不審な態度では無くなったと思う。

【メール】

一花ちゃんですよ！

指令1：買い物中は手を繋ぐこと。腕を組むのも可

指令2：キスとかしちやってもいいのよ！

指令3：2時間だけなら遅れていいからね！

指令4：守らなかつたらわかってるわね？）（

【メール了】

「何コレ・・・？」

「指令だって・・・。2と3は意味不明だけど・・・。」

「本当に意味不明だわ・・・。」

「買い物中は手を繋ぐって・・・、ちよつとなあ？」

「そうね。秋庭君も困るでしょう？」

「え？いや・・・、お前がまたいらぬ誤解を受けるのが・・・。」

（またそんな気を使ってるのか・・・。そうね、彼は真面目だから。

「そうね……。でも指令4は何なの？あなた一花に弱味でも握られてるわけ？」

「うん、そうだな。これをばらされると俺は首を括るか学校を辞めるかしないといけないかもしれない。」

「そんな秘密なのっ！？秋庭君何したわけ??？」

「はははは……。それは言えないから困るわけで……。」

「そりゃそうね。いいわ、ハイッ！」

私は右手を差し出す。顔は自然にしているつもり、多分真っ赤だけど。秋庭実は驚いていたが、周囲をキョロキョロと見回し、最後に私の顔をマジマジと見つめた。私の心臓は早鐘のように鳴りつ放した。仕方なくという空気を一緒に纏う。これが私の精一杯の勇気だった。

「何の真似だ？」

驚いたような秋庭実の視線が私の右手と顔を何度も往復する。

「だからハイ。いいよ、手を繋ぐくらい。」

「おいおい、一花のおふざけだぞ。見張られてるわけでも無いのに律儀に守らなくてもいいよ。」

「でも、万が一見られてたら秋庭君が困ったことになるんでしょ？」

「まあ、そりゃあね……。」

「いいわよ。別に減るもんでもないし。」

「ほんとにいいのか……？また要らない誤解を……」

「1回も2回も同じよ。それとも私とじゃ嫌？」

「え？そ、そんなわけないだろうっ！」

秋庭実の声に力が入る。本気で拒絶されたら私はきつと立ち直れなかつただろう。全力でネガティブな私の言葉を否定してくれた秋庭実に感謝したい。

「私もう手が疲れてるんだけど？」

まだ握ろうとしない秋庭実にイタズラツ子のような視線を送り、早く手を繋ぐように促す私。

「あ、ああ。悪いな……。」

秋庭実はそう言って、ソツと私の手を握る。暖かい、そして頼もしさをを感じる彼の手。私は繋がれた手をジッと見てしまった。

「あのさ、やっぱり照れるよな？」

「当たり前でしょう？私も心臓が痛いくらいよ……。」

「お、俺もかなり。」

「後で一花にはきついお灸を据えてやらないとねっ！」

「だな。頭を撫で撫でてやらなきゃな。」

ニヤリと笑う秋庭実。冗談を言う余裕があるのなら、言う程の緊張ではないのかもしれない。単に社交辞令かも。

「もうっ！冗談ばかりなんだから。さあ、早く買い物済ませちゃおう？」

「ああ、行こうか。」

私は秋庭実に手を引かれてカフェを後にし、懐かしい黒い車まで案内された。

突然、けたたましい「いよう！ドンドンドンドン」

「あ、またメールだ。」

車の鍵を開けた瞬間、また秋庭実の携帯が太鼓を奏でる。私はもう吹き出さなかつた。

「ちよっ！うはっ！これは・・・、馬鹿じゃねえのか一花はっ！」

車に乗り込んでからメールを開いた秋庭実は、隣の席で奇声を上げ

ながら悶絶した。よほど衝撃的なメールだったに違いない。

「何よ？どんなこと書いてあったの？」

秋庭実は無言で携帯電話を手渡した。私は訝しく思いながらも携帯電話を受け取る。何を買えと言ってきたのか気になる。しかし、メールは買い物に関しての記載は一切無かった。

【メール】

一花ちゃんだよ！次の指令いつくぜい！！！！

指令1：手はちゃんと指を絡めましょう。テーマは祈りです。

指令2：買い物は後でいいので、2人でドライブでも楽しんできて  
^-^b

指令3：ギアのチェンジは2人でやろうね？初めてのドキドキ共同作業。

指令4：なんなら夜まで帰ってくるなコノヤロウ

RayしたらPlayしてもいいのよ！って誰つまー！！！！

【メール了】

「・・・馬鹿よねあの娘は。そこは同意する。」

「だよな、絶対に馬鹿だ。」

「祈りつて何よ……。あれ？あの恋人繋ぎ？」

「多分俺も同じ形を想像してる。これだよな？」

秋庭実は両手を胸の前で合わせて握る。左右の指が交互に重なり、まるで祈りを捧げるようなポーズを取った。

「うん、きっとそれよ……。」

その時、私の携帯電話が着信を告げた。電話だ。当然だが一花だ。私は少し躊躇ったが電話を取る。

「もしもし……。」

「もしもしっ！それで合ってる。じゃねっ！」

そこで電話は切られた。私は呆然と電話を握り締めていたが、秋庭実が不安そうな顔をしていたので状況を説明する。

「それで合ってるってさ……。あの娘どこから見てるわよ。」

「嘘だろう……。どこだっ!？」

「分かんないけど、ちゃんとしないと秋庭君やばいよ……。」

秋庭実は顔面蒼白だ。それほど大きな弱味だということだろう。私は溜息を吐いた。

「やっべえ……。マジでこれはやべえ……。」

秋庭実は頭を抱えていた。きっと一花はお遊びではなく、本気で私と秋庭実をくっ付けようとしている。これは彼女なりのエールなのだ。いつまでもイジイジと悩む私を見て、過激なプレゼントのつもりなのだろう。ただ、そんなことに付き合わされる秋庭実も気の毒だと思った。私はポリポリと頭を指で搔く。ゲームはここで終了。

「分かったわ秋庭君。一花は私が説得するから、こんな馬鹿げた遊びに付き合わなくていいよ。」

「へ？」

「だからここで終わりにしましょう。付き合ってくれてありがとう。」

私はそう言っつて車のドアを開けた。助手席から出るとスタスタと歩く。一花の居場所は大体目星が付いていた。

「お、おい待てよ茶霧っ！」

秋庭実が慌てて私を追いかけてきた。彼は弱味を握られているのだ。顔は不安で一杯。

「大丈夫よ秋庭君。」

「いや、意味わかんねえっつてっ！俺が遊びに付き合っつてどっいう意味だっ！？」

「いや、そのまんまの意味だけど？」

「付き合わされてるのはお前の方だろうっ！？」



「うづん、それは違うわ。」

「どういうことなんだ？説明してくれよ。」

「だから、これは一花が私とあなたを付き合わせようと仕組んだことなの。ごめんね……。」

私は少しだけ寂しそうな笑みを浮かべていたと思う。真面目な彼はきっとこのゲームを本気でやるだろう。好きでもない女との恋人ごっこなんて、苦痛なだけなのに。

「意味わかんねえし。それに何で謝る？」

「謝った方がいいかなって？」

「何でだっ!？」

「何となく……。」

「ちゃんと説明してくれっ!俺に何をさせたかったんだっ!？」

秋庭実の声に怒気が混ざる。混乱したのだろう。私はビクリと肩を竦める。

「あ……、悪い。怒ってるんじゃないんだ……。でも何か納得できなくてな。」

「うづん、いいの。そう思うのが当たり前だと思う。いきなり恋人ごっこなんて不愉快だと思うもの。」

私の素直な気持ちは隠し通したい。でも私にはうまい説明は思い浮かばなかった。目が宙を泳いだ時、秋庭実が私の目を見ながら私に問いかけた。

「なあ茶霧。俺と恋人みたいな振りさせられて、お前は嫌じゃないのかよ？」

そんなことを聞かれても困る。私は嫌どころか嬉しいに決まってるんだ。だけど、それは遊びであって本気じゃない。後に残るのは空しさだけ。でも私は嫌とは答えられず、素直な気持ちを口にする。

「別に嫌じゃないよ。私は嫌じゃない。」

「何でだ？お前俺のことずっと避けてただろ？それにハーヴェストと付き合ってるんじゃないのか？」

「そうね、正直避けてた。それにハヴさんともまだ続いているわ。でもあなたとの恋人ごっこは嫌じゃない。軽蔑する？」

「軽蔑ってお前……。そんなこと思い付きもしなかったよ。ハーヴェストはどうでもいい。だが何で俺を避ける？俺はお前に避けられる理由が全く思いつかないんだ。そんなにひどいことしたか？」

「あなたのことを知りたくなかったから。もうこれ以上何も知りたくないの。」

これも私の本音。でも秋庭実は悪い意味で受け取った。

「そこまで嫌われてたのか……。俺は……。」

秋庭実は愕然としてその場に立ち尽くした。私は彼を深く傷つけたのかもしれない。でもこれでいい。これでいいんだ。そう思った私に、誰かが囁きかけた気がした。「本当にいいの？」と。

「秋庭君……。」

その後の行動は、本当に無意識。私の頭が考えたことでは無く、体が勝手に動いたのだ。私はいつの間にか、秋庭実の胸にしがみ付き、爪先立ちをしていた。そう、それは私と彼との距離を縮めるための爪先立ち。そうしないと届かないのだ。彼の唇に。長い長いキス。でも本当はほんの数秒だったのかも知れない。突然のことに秋庭実は時が止まったように固まってしまった。

「ごめんね秋庭君。あなたのことを知りたくないのは、これ以上傷つきたくないから。私はあなたを知るたびに近付きたくない。あなたの傍に居たくない。でもそれは許されないのよね。」

そこまで言った瞬間、私の瞳から涙が溢れた。

「ごめんね秋庭君。好きになってごめん。ハーヴェストも好きだけど、あなたも好きなの。こんな私でごめんね。サヨナラ。」

私はそのまま秋庭実の背を向けると、駐車場を離れようと歩き出した。

「待てっ！ちよつと待て茶霧っ！！！」

秋庭実は硬直から解けて私を呼び止める。でも私は止まらなかった。もう彼の顔を見れない。早歩きからいつしか駆け足になる。視界は

グチャグチャで何も見えない。不意に何かに躓いて転んだ。それは見慣れた噴水の前のベンチ。いつも一花とお昼を食べるお気に入り場所だった。その噴水の影に木に囲まれたベンチがあることを思い出す。私はそこまで走って行くと、やっと人の居ない空間に辿り着き安心して泣いた。涙はいつまでも、まるで涸れない泉のように後から後から流れ続けた。

## 第十一話 kiss (後書き)

もう次も書きちゃってるんだからねっ！

こんにちは、作者です。

タグに甘くない恋物語などと付いてますが、見事に甘いですね。こういう展開はハッキリ言って嫌いですが、でもこうなっちゃうのは何故なんでしょうね？

作者はこんなドキドキ展開、リアルに知りません。妄想力の賜物です  
ね(´・`・´・`・´)

第十二話 From Dusk Till Dawn (前書き)

題名の意味はぐぐれば分かると思います。

## 第十二話 From Dusk Till Dawn

### 第十二話 From Dusk Till Dawn

もうお昼を回った頃だ。私はまだ鼻をグズグズ言わせている。何故あんなことをしたのか自分でもよく分からない。分かるのはもう秋庭実と向き合えないだろうと言う事だけ。時間を確認しようと携帯電話を取り出すと、着信が20件近くあった。秋庭君、一花、秋庭君、一花、一花……。「何処に行った？」「何してるの？」「俺の話もちゃんと聞いてくれ。」「私がやりすぎたわ。戻って。」「などと、メールも大騒ぎだ。事の成り行きは2人とも突然すぎて混乱しているに違いない。最初の着信からすでに2時間が経過していた。随分と長い間、私はベンチで悲しい涙を流していたことになる。携帯電話の着信も気付かないほどに。

「2人とも心配してくれてるなあ……。これから私どうしよう……。」

私の心境は、もうこのまま放っておいて欲しい、構わないで欲しい、だった。突然のキスは秋庭実は勿論のこと、どこかで覗いていた一花も相当の衝撃だったはずだ。もう穴を掘って埋まりたい気分。何て莫迦な事をしたのだろう。溜息を吐いてまたベンチに腰を降ろしてしまう。顔は涙で化粧も落ちて、最低だろう。コンパクトを取り出すと、私は座ったまま化粧を直し始める。どこか冷静な自分もまだ居たようだった。鏡の中には目を真っ赤に腫らした知らない女性が居る。こんな顔の私は知らない。何て無様なことになってるんだろう。

(ふう……。もういいや。今日のあなたはこんなものよ。最低な

一日……)

私はコンパクトの中で何とか体裁を整えた女性に向かって語りかける。その時、鏡の中に大きな水玉が落ちて弾けた。私はハツとして空を見上げる。途端に大粒の雨が私目掛けて降り注いだ。今日は午後から曇りの予報だったけど、まさか雨が降るとは思っていなかった私は、慌てて近くの校舎に逃げ込む。確かここは教育学部の校舎。何度か主題の授業で来たので、内部は少しだけ分かる。もう講義も昨日で終了しているので、校舎内はひんやりとした空気だけが感じられた。人の気配は無い。遠くで電車の走る音や、メインストーリーの雑踏の響きが僅かに聞こえるだけだった。濡れた髪がべったりと首筋に張り付いて気持ちが悪い。でも傘を持っていない私は外に出ることも出来ないでいる。一人廊下に佇んでいた私だったが、ブルツと身震いをしてとりあえず避難出来そうな場所を探すことにした。ここは寒い。教室内だと暖房も入っているが、廊下は外と同じ気温だ。寧ろ、外より寒く感じる。1Fには事務室や掲示板などがあり、安心して座っていられる場所は無かったはずだ。もっとも、今は一部の学生が院生くらいしか訪れないだろうけど、それでもこんな顔を見せる気にはなれない。

(上に何個か個室の教室もあったはずだね。鍵が開いてたらラッキーなんだけどなあ……)

私は、そう思って階段を上がっていった。

また携帯電話が鳴る。相手は一花。これで累計32回目だった。



暇潰しに最初の着信から数えている。もう履歴はほとんど一花と秋庭君で埋め尽くされていた。私は溜息を吐きながら携帯の着メロを聞いている。当然出る気は無い。電源を切ってしまおうかと考えたが、そうすると余計な心配も掛けることになると思い、止めておいた。私は今、教育学部の校舎の3Fに居る。ここならまず所在はバレない。鍵の開いている個室を見つけた私は、自習室と書かれたその部屋に居座ることにしたのだ。誰か来たら人を待っていると言いう言い訳も出来る。休憩用のソファも置いてあるので、1Fの自動販売機で買ったココアをチビチビと飲みながら時間を潰す。一花達は自宅にも来るだろう。だから私は家にも帰れないでいる。それに外は雨が本降りになってきたし、駅までダッシュするのも億劫だ。

(よく諦めずに電話するわね。私怒ってるんだからっ！)

私はここに座って数時間、冷静になって考えていたが、今日の事態は事の発端である一花のせいだと勝手に決め付けてしまっていた。だから携帯にも出ない。よく考えれば、一花は私のことを思ってくれた事は明白だ。だけど頭に血が上った私は、自爆した自分を棚に上げて、一花に全ての責任を転嫁してしまった。そうしないと、壊れてしまいそうだったのだ。

(一花のバーカッ！秋庭君のバーカッ！)

よく考えればひどいことをしている。まるで子供だ。でも私は考えを改めることをしない。怒って落ち込んで泣いてを繰り返す私。もうとつくに心は壊れていたのかもしれない。そして私は、いつしか疲れきってソファに横たわり眠りについてしまった。辺りは夕闇もとつくに終わり、雨の降る闇夜となっていた。

クシユン！

私はクシヤミで目を覚ます。ここはどこだろう？暗くて狭い部屋。本の匂いとカビの匂い。そして仄かにココアの匂い。

（あ、そっか、私寝てたのか・・・。）

ココアの匂いで私は全てを思い出す。外は真っ暗だった。今は何時なのだろうか。携帯電話を手探りでポケットから出して開くと、画面は真っ暗だった。何度も着信を繰り返していたため、電池が無くなったようだ。ついてない。

（とりあえずここを出よう。学校の中で寝ちゃうなんて信じられな  
いわ・・・。）

私は荷物を持って立ち上がるとドアを開けて外に出る。吹さらしの廊下は凍えるような寒さだった。いつの間にか雨は雪になっている。うっすらと積もった雪が電灯の灯りを反射して、外は思ったほど暗くはない。3Fから見えるキャンパスは人っ子一人居ない。

（うわー、やばいよこれ。ばっちり深夜だよ。もう帰らなきゃ。う  
う、タクシーかな。やだなあ・・・。）

気分は思ったほど沈んでいない。タクシーだとお金掛かるなど現実的な悩みが私の頭を支配している。どうするか迷いながら1Fまで降りると、私はさらに現実の壁に突き当たった。全ての出入口が施錠されており、私は校舎から出られなくなっていたのだ。

(まいった……。どうしよう……。)

外は雪が降るほどの気温。間違いなく風邪を引くか凍死する。私は仕方なく暖かい飲み物で気分を紛らわせようと自動販売機の前で財布を開けたが、運悪く小銭が73円しかない。お札を崩すかと考えて札入れを開けて、愕然とした。5千円札と万札しか入っていない。詳しく言えば1万5千円73円が私の所持金だった。お金はあるのに飲み物が買えないなんて不幸だ。

(やばい。こりゃガチでやばい。私死ぬかも……。)

私は仕方なく自習室に戻り、冷たくなったソファに座り膝を抱く。こうでもしないと震えが起こり、奥歯が鳴るほど気温は下がっていた。

(うー、寒い。今何時なんだろう……。)

時間も分からない状態でひたすら朝を待つしか今の私に選択肢は残っていないかった。ここは真冬の陸の孤島だ。眠ったら死ぬかもしれないのだ。リアルに命が脅かされていると気付いた瞬間から、私は凄まじい恐怖に支配されていた。助けも来ないこんな場所になんか来るんじゃないかったと今さら後悔する。

(これは罰だ。一花も秋庭君も無視したからこんな目にあってるのね……。)

そんな後悔の念に襲われていた私に、さらに恐怖を与える音が聞こえた。最初は幻聴だと思ったが、廊下を人が歩く音が聞こえる。誰も居ないはずの校舎内を、カッン、カッンと足音が上っていた。先

ほど1Fから3Fまで上がってくる時、人の気配などまるで無かった。ここは3Fが最上階。ここまで人が居ないということは、校舎内に居るのは私だけのはずだ。だけど、足音はだんだんとハッキリしてくる。私は以前に聞かされた一花の話を思い出す。それは学内を徘徊する子供の幽霊の話。その子供は、昔に学生が墮胎させた子供の霊の集合体で、母親を求めて大学内を彷徨っていると言うのだ。

（嘘っ！霊なんて居る訳ないじゃないっ！！こんな真冬に休業もしないで彷徨うなんてあり得ないっっ！オバケなんて無いさっ！オバケなんてっっそさっ！）

私は子供の頃に習った悪霊退散の歌を頭の中で大声で歌う。そうでもしないともう気が狂いそうだった。足音はすでに私の居る3Fへ上ってきている。もう疑いの余地は無かった。何者かがやってくる。ガチャガチャ、ガチャガチャとドアノブを回す音が何度も何度も繰り返された。これはきっと人が居ないか探しているに違いない。

（違うのっ！私はお母さんじゃないのっ！そんな事経験したこともないんだから私は違うのよっ！！こないでえ……。）

ガチャツ　　ギイイイイ

ついに私の居る自習室の扉が開かれた。私はソファの影に四つん這いになって隠れている。もう心臓は口から飛び出さんばかりに脈動し、目からは涙がボタボタと零れ落ちている。

「あれ？学生が閉め忘れたな。おい、鍵持ってきてくれっ！」

間の抜けた声が室内で響く。足音の主は見回りにきた2人の守衛さんだった。

暖かい部屋でお茶を啜りながら、私は毛布を掛けられていた。無事に守衛さんに救助されたのだ。時間は午前の4時。もう1時間も経てば始発もあると言うことで、守衛室に保護されていた。四つん這いで泣いていた私を見つけた守衛さんの叫び声は凄まじかったが、今笑い話として守衛室は大いに盛り上がっている。私は顔を真っ赤にしながらかお茶を飲み、出された饅頭をパクついていた。考えれば朝にカフェオレを飲み、昼にココアを飲んだだけだった。お饅頭は甘くて美味しい。

「しっかしお嬢さんも何であんなとこ居たの？ここの学生なのは知ってたけど、おっちゃんビックリしたよ？」

「えへへへ……。自習してたら寝ちゃってて。取り残されちゃいました。」

「何かセンサーに反応があったから行ってみただけど、良かったなあ。あんな寒いとこで独りで恐かったでしょ？」

「ええ、まあ。」

「見つけた時泣いてるんだもの。相当恐かったに違いないだろ。」

「いや、それが俺のことバケモンだと思っただとよっ！！！」

そしてまたガハハと守衛さん達は笑う。私は居た堪れない気持ちで

飽きもせずお饅頭をパクパクしていた。3個あったお饅頭は全て私の胃の中に消える。1時間強も談笑して、私はスッキリした顔で始発に乗るために守衛室を後にした。守衛さん達は笑顔で送ってくれた。

( いい加減に充電して連絡いれないと、さすがの一花もキレるわね。まずいわ。 )

私は5時30分発の始発に飛び乗ると、一路自宅へと急いだ。

駅を出ると自宅までは歩いて5分だ。やっと帰れる。私はもう安堵していた。家に帰ってすぐ一花に連絡を取ろうと、急ぎ足でアパートを目指す。3分もすると自宅アパートが見えてきた。私は階段を駆け上がって絶句する。私の部屋の前には秋庭実が座り込んでいた。足音に何気なく顔を上げた秋庭実は、私の姿を認めるとパツと顔を輝かせた。ゆっくりと立ち上がる。雪の降る寒い中、ずっと私を待っていてくれたのだろうか。胸がジーンとするが、私の取った行動はメチャクチャだった。その場で回れ右をすると、全力で階段を駆け下りたのだ。今捕まると自分が何を言うか見当が付かない。防衛処置で逃げる。

「ちよっ！茶霧っ！！！」

秋庭実は慌てて追いかけてくる。私はスカートにブーツ。そんなに速くは走れない。100mも走るとあっさりと秋庭実に捕まっちゃった。

「ハアハア。離してよ秋庭君っ！」

「離すわけ無いだろうがっ！どれだけ心配したと思っただこいつっ！」

秋庭実はギュッと私の手を掴んで離さない。痛いくらいだ。かなりご立腹の様子だ。無理もないだろう。私の携帯は電源が切れ、ずっと繋がらなかったのだ。心配されても無理はない。いきなりキスして逃げ出して、そのまま失踪。尋常ではないのだ。秋庭実の手は驚くほど冷たかった。きつと一晩中あそこに居たのだろう。よく見ると上着にうっすらと霜が降りている。

「痛いわよっ！離してっ！」

「離さないっ！」

「痴漢ですっ！……！」

「違いますっ！……！」

「あんもっ！離さないとひどいわよっ！……！」

「とにかく俺の話も聞いてくれっ！……！」

今さら私に何を話すと言うのだろうか。綺麗に振って美しい思い出にでもして欲しいのだろうか。

「話なんて私は無いっ！」

「俺があるんだよっ！」

「聞きたくないっ！」

「いいから聞いてくれっ！」

「あーっ！あーっ！聞こえないっ！！！」

「子供かお前はっ！」

「子供だから逃げてんのよっ！」

「ああもう面倒くさいっ！！！」

急に強い力で体を引き寄せられ、ガツチリと抱きしめられる私。一瞬、キョトンとして抵抗を止めてしまった。私は秋庭実の腕でスツポリと包まれていた。冷たい上着に頬が埋まる。ちよつと顔が痛いけど、嫌じゃない。

「・・・何の真似？」

「こつでもしないと暴れるだろう・・・。」

「うん・・・。」

「だからしっかり拘束してる。もう逃げないなら離す・・・。」

「・・・うん。」



秋庭実は、何度も私に逃げないか確認してから、私を解放した。そのまま、私の手を握ると、車まで連れて行き助手席に乗るように促した。私は素直にそれに従う。どうせ逃げても捕まるのだ。こうなったら納得のいく振られ方ってのを経験するのも悪くない。

「とりあえず適当に流すぞ。」

「好きにしてよ。」

「ああ。」

私は秋庭実にそっぽを向いて窓の外をゆっくり流れる景色を見た。夜の間に積もった雪はもう解けて路面は濡れている。これならスノータイヤも必要ないだろう。そんな事を考えていると、秋庭実は車をコンビニの駐車場に入れる。

「何か飲み物を買ってくる。何がいい？」

「別にいらないわよ。」

「そうか、じゃあ待ってて。逃げないでくれよ？」

「もう逃げないわよ……。」

「すぐ戻るから。」

そして秋庭実は1分も経たずに戻ってくる。缶コーヒーを2本手に

持っていた。1本を私に渡すと、1本を開けて飲む。

「ふう〜、暖まるな。」

私はそれには応えずにドリンクホルダーを開けると缶コーヒーを突っ込んだ。飲む気はしない。

「飲まないのか？」

「そんな気分じゃないわよ。」

「なあ茶霧。」

「何よ？」

秋庭実は真面目な顔で私を見る。私はどうにでもなれと言う態度だ。まな板の鯉状態で何を言われても表情に出さないようにする。

「最初に俺の気持ちを言うておく。誤解されたくないからな。」

やっぱりそう来た。私をキツパリと振るつもりらしい。

「どうぞ自由に。最初から覚悟してるわ。」

「そこから間違ってるんだよ。お前もつ振られること前提で話をしてるだろう？」

「何よ。違つとでも言つなの？」

「ああ、全然違つ。俺はお前が好きだ。春に初めて会った時からな。」

「  
目が点になる私。まさかの展開だった。だって彼は私と付き合うなんてあり得ないと一花に公言したではないか。混乱で頭の上にとくさんのクエスチョンマークが飛び回っているのが見えるのではないだろうか。」

「そんな嘔吐かないでいいわよ。気を使ってるつもり？私って子供だから本気にするわよ？」

「本気にしてくれ。じゃないと俺が勇気を振り絞った意味が無くなる……。」

「ほんとにほんとなのっ！？だってあなた、一花の前で完全否定してたじゃないっ！」

「あの場面じゃああ言うっしかないだろうっ！お前も誤魔化せって目をしてたじゃないか。」

「あ、そうだよね……。冷静に考えたら私だってそう言うわ……。」

「そうだ、あの時私は、うまく誤魔化してくれた秋庭実随分と感謝した記憶がある。」

「だからあれは真意じゃないよ。普通に考えれば分かりそうなもんだろうが……。」

「そんなの気づく訳無いじゃないっ！あの時の私はハヴさんで頭が馬鹿だったんだからっ！……！」

「ああ、相当いかれてたもんな。」

「・・・何よ？私うまく隠してたつもりだったけど、そんなにバレバレだったの？」

「いや、そういう訳じゃないんだ・・・。」

「何なのよ？あつ！私ちゃんと返事しなきゃダメだよ？昨日も言っただけど、私はハヴさんも好きなのよ・・・。どうしよう？ハヴさんに何て言ったらいいの・・・。私から付き合っって欲しいと言っておいて、他に好きな人が出来ましたじゃ最低だよね・・・。」

「いや、返事はまだいいよ。それにハーヴェストに言う必要は無い。実はこれからの話が本題なんだ。」

「告白より大事な話なのっ!？」

「ああ、俺はお前にちゃんと謝りたいことがあるんだ。その上で返事を聞かせて欲しい。」

秋庭実はそう言うと車を適当な駐車場に入れ、私の目を真っ直ぐに見て話し出した。

第十二話 From Dusk Till Dawn (後書き)

次の展開はあなたが考えている通りです。

賢明な読者の皆様はお気づきになったと思いますが、今までの話の中に様々な伏線を張ってきました。後で読み返すのも面白いのでは無いでしょうか？

分かったよヴァカッ！とか言わないで〜( ? \* )

第十三話 彼の秘密？【秋庭実side】（前書き）

知ってた人はごめんなさい。

作者の頭の限界はこの辺りです（？　？\*）

### 第十三話 彼の秘密？【秋庭実side】

第十三話 彼の秘密？【秋庭実side】

真剣な目、彼は何か思いつめたような顔をしている。私は緊張した。

「実は、俺はずっとお前を騙してたんだ……。」

「騙してたって何っ!？」

「ちゃんと順を追って説明する。聞いてくれるか？」

「聞かないと帰してくれないんでしょ……?それに私も、騙してたって話に興味があるわ。」

「ああ、聞いてくれ。この話が終わったら俺はきつとお前に殴られると思うし傷つけると思う。それでも聞いて欲しい。」

「話によるわよ。」

「じゃあ、結論から言っぞ。」

「……うん。」

秋庭実は一瞬躊躇ったが、覚悟を決めたような顔をして口を開いた。私は心臓がドキドキと鳴りっ放しだ。

「俺がハーヴェストだ。」

私は目の前が真っ暗になった。

もう大学の2年が始まる。俺は大学の1年次、TOTTOで200万ちよつとの金を当てた。学生には大金だったけど、無駄に使うのも勿体無いので、俺はデイトレーダーを始めた。これで全て無くなつてもどうせあぶく銭だ。そう思っていたが、次第に波に乗り、いつしか俺は大学も頻繁に休んで嵌るようになってしまっていた。金はどんどん膨れ上がり、我に返った時はすでに大量の単位を落とし、7億ちよつとの大金を手にしていた。こうして俺は新しい住居へ移動して、心機一転で2年次から真面目に学校に通うことを心に誓った。金は十分にあるし、基本的な単位は2年次でもダブルらずに取れる。1年間頑張れば、他の学生に十分追いつけるだろう。その代わりに、レポート地獄だけは覚悟しないといけない。春休みに学校で調べた取得単位は14単位。他の学生の約半分だろう。まだ十分に許容範囲だった。俺は引越しも済ませ、大きなマンションで一人暮らしを満喫していた。車も以前から欲しかった車種を買う。2人しか乗れない軽自動車だったが、オープンカーにもなるので満足だった。それに俺には隣に乗ってくれる女性も居ない。例え1人乗りだったとしても事足りた。

「新しいPCも買ったし、これで安心だな。どうせ講義開始は4月だし、3月は目一杯遊ぶかーっ！」

しかし、デイトレードに嵌っていた俺には、数少ない友人しか居ない。当然男だらけだった。野郎と2人でドライブなどゾツとする。



そこで新しく始まるMMORPGのオープンに応募し、俺は冒険者の住人となった。そしてその場所でチャムといちかに出会うことになる。

2人は初心者丸出しで連れ添って歩き、危なっかしかった。俺は彼女達を狩りに誘い、友人登録までしてしまった。自分は彼女達より10日ほど早くこの世界に着いたので、予備知識もあつた。彼女達は色々と教える俺に懐き、いつしか共に行動をするようになっていった。どうせネカマ(ネットオカマ)だと思っていたが、愛らしい女性キャラにチャホヤされると悪い気はしない。すぐにリアルでは何をしてるか聞かれたが、俺は適当に30のニートですと自己紹介していた。当然受け狙いのつもりだったが、彼女達はあっさり信じ、自分達は大学の学生ですと名乗ったのだ。同じ大学の学生。しかも2人も女の子だと言う。俺のテンションは急上昇し、そして絶対に自分の素性はばらせないと思った。同じ大学に通うのなら、すでに顔見知りの可能性もある。とっくに素の自分を晒してしまっていた俺はもう30ニートを演じ続けるしか無くなってしまうていた。まさに自分の首を絞めたのだ。どうせいつか2人も飽きて止めるのだ。それまで俺は30ニートで通せばいい。そんな軽い気持ちも混じっていた。

今日もチャムといちかは、俺のハーヴェストと狩りをする。3人

でスノークと言う自称主婦に誘われ、血盟にも入った。そこで3人の親睦は深められ、もはや俺はこの2人と居たくてゲームを続けているようなものだった。学校は始まって忙しくなったし、予想通りレポートの嵐だ。1年生に混じって英語や第2外国語にも通う。ただ専門の講義は3年次からしか選択できないので、前期である程度は皆に追いついた。家に帰るとレポートをし、一段落すると冒険者にログインして2人と遊ぶ。彼女も居ない俺には悪くない生活だった。天然全開のいちかも好きだが、やはり俺はチャムと仲が良かった。もう血盟内では半分夫婦のような感じに扱われている。実際のチャムはこのすぐ傍で生活していることは知っているし、会いたいと思う。でも、俺は自分の素性を明かせない。いや、明かさないが正解だろう。MMOでは当たり前のことかも知れないが、俺はもう嘘で半分塗り固められていた。こんな俺の素性など知られる訳にはいかない。俺はこの生活がいつか終わりになるのを恐れるようになっていた。

7月に入り、夏休みも間近になったある日、俺は子猫を拾った。マンションの裏で箱に入ったまま雨に濡れてニャアニャア鳴いていたのだ。子猫は3匹居たが、すでに2匹は雨に打たれ続けたせいで息が無かった。俺はずぶ濡れの生き残りを部屋に持ち帰り、ドライヤーで毛を乾かして毛布で包み、必死で看病した。翌日は動物病院に連れて行き、子猫はすっかり回復した。兄弟の墓はマンションの管理人の爺さんと一緒に裏の空き地に穴を掘って作ってやった。いつかは家が建つのだろうけど、それまではゆっくりと休ませてあげたい。それが俺に出来る精一杯だった。俺はこの死んでしまった子猫達のためにも、生き残った1匹を生涯面倒見ようと心に誓った。

今日も空いた時間で冒険者にログインする。居たのはいちかだけだった。暇してるので、30台の狩場である亡者の城に狩りに行くことと誘われる。ここはソロだと厳しいが、ヒーラーやエンチャンターとペアなら何とか狩りになる場所だ。敵は30台前半のレベルで、29のハーヴェストでは少し荷が重かったのだが、いちかのエンチャントがあれば火力も耐久力も大きく上がる。これは行くしかないと思い狩りの支度を始めると、チャムがログインした。何ともタイミングがいい。やはり俺とチャムは何か運命的な繋がりでもあるのかもかもしれないと思ってしまう。当然、病的な俺の妄想だったが、やはり心が踊る。馬鹿なチャットで盛り上がりながら、今日は合コンだと言う情報入手してしまった。チャムは行きたくないと言っていたが、いちかが無理にでも誘っているようだ。余計な事をしてくれると思う。

「合コンなんか行くなよな！。すっげえ心配になるじゃん。チャムは美人だっていちかが言ってるし、大学の男なんて放っておかないだろうな……。頼む、断ってくれっ！」

しかし、俺の願いも空しく散って、チャムは合コンに行くことを渋々承諾したようだった。俺はPCの前でガックリとうな垂れる。自分から正体を明かすことは無いが、やはりチャムやいちかが他の男とイチャイチャしている現実は見たくない。我ながら勝手な事を考えてると思うが、男なら仕方がない。好意のある女は全て、他の男と仲良くするのは我慢できない。もう7時近くなっている。もうすぐ姫君達は合コンに行ってしまうのだからと思うと、やはり寂しく

なった。悶々としていると携帯が鳴る。俺は何の気なしにキーボードで電話の件を伝えると、コールに出る。相手は結城だ。工学部で学部は違うが、スポーツ講義で一緒になって以来、学校ではつるむ事もある。その程度の知り合いだった。用件は飯でも食わないかと言っ話。

「たまには男同士で友情でも深めるか」。他誰が来るんだ？」

俺は膝に乗って甘えているダンゴムシの喉をコチヨコチヨしながら会話を続ける。ふとチャットを見るとチャムといちかはまた合コンに行く行かないで揉めていた。チャムも往生際の悪いことだ。俺はチャットで飯に行く旨を伝えて後押ししてやる。チャムも渋々と合コンに行く準備をするようだ。電話を切った俺はダンゴムシを抱きながらPCの電源を落とし、適当に服を着る。男同士の食事でお洒落などするだけ無駄だ。それでもそれなりに高いTシャツにジーンズ、腕時計も機能重視の日本製だがけっこうな値段の物だった。

「髪はつと・・・、どうでもいいや。」

俺はそう判断して適当に手櫛で毛先だけを解して無造作ヘアを作ると、鳴くダンゴムシの頭をよしよしと撫でて玄関を出て行った。

飯だと言いながら居酒屋を指定した結城の言葉に疑問を感じながらも、約束より少し遅れて居酒屋に到着する。俺は車だ。酒を飲む気は無いのだ。しかし、駐車場で俺を呼ぶ結城の姿を認めて、全てを察する。

(チツ、合コンじゃねえか。欠員でも出て仕方なくって感じの数合わせかよ。ついてねえ。)

全てを分かっているながらも、そこで車をUターンさせる気にはならなかった。貴重な友人だ。たまには付き合っただけでやるかという気になる。結城は俺の傍まで小走りやってきて、皆に見えないように胸の前で手を合わせて拝むような格好をする。

「どつ言つ事だ?」

「悪い、今日は合コンなんだ。」

「見りゃ分かるわ。勘弁してくれ。俺何の準備もしてねえよ……。」

「お前はナチュラルに男前だし背も高いから関係ないだろうが。頼むよ。俺今日はマジなんだよ。」

「あの娘か?」

俺は結城の目線である程度の目星を付けている。そこに居るのはTシャツに赤いジーンズのとびきりの美人だった。思わず目を奪われるような美貌。でも気の強そうな目をしている。結城には荷が重いだらう。

「そそ、あれが有名な経済の雪女だよ。お前、実物見たことないだら?」

「ああ、初見だな。でもあれだけ美人なら納得できるよ。」

「だよなっ！だけど今日は俺を立ててくれよ？」

「それは状況によるよ。」

「お前に出てこられると勝ち目無くなるんだよな……。頼むから大人しくしてくれ……。」

「分かったよ。だけど俺は好きにさせてもらっ。」

「よし、じゃあもう行こうぜ。彼女達待たせてるし。」

「女に手は出さないけど、好きにさせてもらっぜ。それは許せよ？」

「頼むから空気だけは読めよ。」

「いえっさ。」

「マジで頼むぞ……。」

そして俺は、自己紹介から宴も酣たけなわとなったり時頃まで、ずっと壁を背にしてタバコを吹かしていた。

（ああ、つまんねえな。どいつもこいつも盛りやがって、ダンゴムシと遊んでたほうがよっぽど有意義だぜ。ん？）

「悪いけど。」私、髪を染めてる男って嫌いなんです。「それとお喋りな男もね。」

結城が経済の雪女に見事に振られた。いい気味だ。思わずニンマリ

と笑みが零れる。その後、雪女はバツバツと他の男も斬り捨てた。

(すげえ女、ありゃ相当手強いね)。不沈艦じゃねえか。無理無理つと。)

そこに山なんとかと地味子さんが来て、俺に話しかけるが適当にあしらう。

「今日は数合わせって言ったでしょ？俺は空気だつてば。」

「何よそれ」。」「結城君とこ行くつと。」

女達はへらへら笑うだけの俺に呆れて連れ立って行ってしまった。他にやることも無いので、焼き鳥をツマミながらコーラをグイグイと飲んでみると、雪女が俺の所に来た。多分所在無げな俺の所で暇でも潰そうと思ったのだらう。

(どうせ暇だしな。相手してやるか。)

「ねえ、アキバ君でいいのかな？」

「ああ、あんたはサギリさんだよね？」

俺はそう言ってマジマジとサギリトモを見る。本当に美人だ。大袈裟ではなく、こんな美人には今まで縁が無かった。思わず目がマジになる。でも相手は経済の雪女だ。惚れても無駄なことくらい分かってる。

(まあいいや。俺にはチャムといちかが居るし。って寂しいな俺・

。。)

心の中で自分にノリツッコミをしていると、意外にもサギリトモは自己紹介など始めた。俺も釣られる。そして、少しの間お互いに言葉を交わして、猫の話題が始まるとサギリトモが食いついた。

(お、やっぱり猫つえー。釣れた釣れたっ！)

猫の話ですっかり俺に気を許したような感じになったサギリトモ。態度も柔らかいそれに変化したように感じる。意外にいい雰囲気かもしれない。

「あれ〜？智が男の人と仲良く話してるのって初めて見たかも？」

不意に俺の幸せな時間をぶち壊す声があった。ほんわかして如何にも天然な感じ。ふわふわしたイメージの女の子が俺とサギリトモを交互に見比べている。確かカンザキさんだ。

「仲良くないわよ。猫の話で少しだけ盛り上がったただけなんだから。。。」

「猫？アキバ君は猫好きなの？」

「飼ってる。」

「行く。」

「はい？」

「一花？」



イチカ？俺の嫌な予感が膨らむ。そう言えば同じ大学に通う彼女達も今日は合コンだと言っていた。サギリトモは確か漢字で茶霧智だったはずだ。茶と霧で強引に考えればチャとムだ。それにイチカ。俺の閃きは確信に変わる。

(やべえ……。こいつらがチャムといちかだ。間違いないだろうこれ……。)

俺は焦る。つい会話にも焦りが見え隠れしたと思う。尤も、イチカが俺の家に行くと言い出したので焦っていると思われてるだろうけど、俺は全く違う理由で焦っていた。

(大丈夫だ。俺がハーヴェストだなんてバレるわけがない。だって30ニートじゃないもの。)

結局、イチカが俺の家に行くと言う話は無かったことにされたい。茶霧が猛反対したからだ。俺も少し安心する。

「今日は楽しかったです。もう会うことは無いと思いますが、今日のことには忘れません。」

これは帰り際のエピソード。茶霧が他の男達に言った言葉だ。徹底している。そして、俺とイチカと茶霧は2次会をパスして駐車場に取り残され、結局2人して俺の家に来ることになった。

2人が部屋に来て、お腹の音で茶霧がいじけたり、猫の名前で悲鳴をあげたりでドタバタもあったが、俺は自室でレポートを書いていた。明日までに提出のレポートが2枚あり、俺はまだ1枚しか仕上げていなかった。やっとレポートを完成させ保存して、ワードを閉じる。すでに時計は夜中の2時を指していた。もうこんな時間かと思いつつ、クラシックの作業用BGMに繋いでいたヘッドフォンを外す。部屋の外で物音が聞こえた気がした。何だろうと思いでアの前に移動すると、「どこだよっ！」と言う大声が聞こえた。茶霧だ。

「夜中に大声出すなよ……。何か用か？」

「ノックしましたけどね……。って言うか、反応してよっ！」

意味の分からない茶霧に俺は顔を顰めたと思う。どうやら帰りたけれど電車が無くなったので送っていけということらしい。

(面倒くさ……)

俺は泊まる事をお勧めする。歩いて一花の家に行くと言う案も出てきたが却下した。夜は何かと危険だ。茶霧は仕方ないと一花を客室に寝かせる。その後、彼女は俺のPCの冒険者を発見した。

「ねえ、あんた冒険者やってるの？」

突然の茶霧の言葉に面食らってしまった。PCの電源を切っていなかったことを激しく呪う。

「え？あー、これはほら、あれだよ。」

「どれよ？」

「前にやるつもりでDLまでしたんだが、結局やってないんだよ。」

「は？インストールまでしててやってないの？」

「あ、ああそう、インストールまでしたんだった。」

俺はテンパってしまった。当然、普段ハーヴェストでログインするためのアイコンだ。アップデートまで完璧にインストールされている。キャラを見せるだなんて言われたら全てが終わるだろう。それだけは避けたい。とりあえず、まだ始めていないと言い訳してみた。すると茶霧は、俺にアカウントを作って今からやるうと言いつた。

（冗談じゃねえよ……。アカウントって言ってももう自分の名前で作っちゃったよ。仕方ない。実家の住所でもう1アカウント作成するしかないか。名前は重複しても大丈夫だろう。面倒なことになつたな。）

仕方なく新しいアカウントを作成し、茶霧にいいようにキャラを作成され、『ハーヴェスト』と『萌える闘魂』の二重生活が始まってしまった。

翌日、一花の策略に嵌められた俺は血盟『銀の翼』に勧誘されてしまった。これで血盟内でも一人二役だ。嫌になる。時期を見てとっとトングラした方が良さそうだ。萌える闘魂を育て上げる気は

無い。ハーヴェストで一杯一杯なのに、もう1匹養える訳が無かった。

(何してんだる俺……)

激しい後悔が俺を襲う。自分で自分のキャラクターにツッコミを入れてそれをきり返す。我ながら馬鹿みたいだ。他人に見られたら切腹ものの屈辱だ。寂しい男全開だった。当然知っているスノークや薩摩大根、メイルにも「初めまして」の連発だ。これは痛い。

「あーっ！やつてらんねえっ！！！」

俺は馬鹿みたいに^^を付けるハナクソ盟主にイライラしながらPCの横にあるベッドに寝転んで、キーボードだけ引つ張つてくると適当に血盟チャットの返事をしていた。たまにデスクトップの画面を切り替えてハーヴェストと闘魂をうまく使い分けながら会話を終了させようと努力したが、結局チャムもやってきて血盟ハントになると言っ。

「Lv8で巨人とかアホかっの。何回死ぬんだこれ？範囲で一発じゃねえか。」

そう愚痴を言いながらも、俺は忙しくPCを操りながら何とか2キヤラを動かして血盟ハントを乗り切る。終わる頃にはもうクタクタだった。今日はもう落ちたほうがいいと思い、萌える闘魂の方のアカウントを落とす。ハーヴェストは売りたい装備があったので、そのまま露店放置させた。今日はもう店じまいだ。

……ピンポン……

「誰だこんな時間に？」

俺は時計を見る。もう23時過ぎだ。インターホンのTV画面に手を振る一花が映っていた。

「一花ちゃん？何してんだ？」

「チャムに会いに来た〜っ！」

「いやいやいや、時間やばいっしょ？」

「だいじょぶー。」

「待つてな。今開けるから。」

「やったっ！」

俺は玄関の自動ドアを開けると、嬉しそうに中に入った一花を見届けて自宅の玄関に回る。程なくチャイムが鳴り、一花がドアを開けて顔を覗かせた。

「やったっ！」

「一花ちゃん、こんな夜中に男の家に来たらダメでしょう？」

「だいじょぶだよ。ちゃんと痴漢避け持ってるから。」

そう言うとポケットからスタンガンを取り出してバチバチやっつけてせる一花。俺はゾツとして一花に変なことをする気が全く無くなっってしまった。痺れるどころじゃ済みそうに無い。

「チャムは？」

靴を脱ぎながら一花がキョロキョロする。チャムを探しているようだ。そして玄関で勝手に来客用のスリッパを履いてパタパタと音を立てながらリビングに向かう。

「やれやれ……。無邪気だね。」

「秋庭君、チャム居ないよーっ！」

俺は先ほどまでゲームをしていた。恐らく自室にチャムは居るはずだ。

「ああ、多分俺の部屋だと思っつてっ！ちょっと待てええええええええええっ！……！」

一花は俺の言葉を聞くや否や自室のドアを開けて入ってしまった。

「あああああああああああああっ！……！」

俺は思わず叫び声を上げる。PCでは看板を上げたハーヴェストがアップで座っているはずだ。

「ハヴちゃんが居るっ！……！」

時すでに遅し。昨日必死で守った秘密はあっさりと一花にバレた。

第十三話 彼の秘密？【秋庭実side】（後書き）

痛いので物を投げないでください。ベタすぎてワロタって反応の方が嬉しい作者です（、・・・、）

実際にMMOで知り合いの人間にリアルで会うのなんて凄く確率だと思いますが、作者はネットカフェで横に座った人が思いっきり知ってる女の子だったことがあります、実はオッサンでビビッた事があります。ネカマってやーねっ！当然バレル前に移動しましたとさ（、・・・、）

第十四話 彼の秘密？【秋庭実side】(前書き)

ハハハッ！一気に行きますよっ！



## 第十四話 彼の秘密？【秋庭実side】

### 第十四話 彼の秘密？【秋庭実side】

一花に秘密を知られてから、俺はもう彼女に強いことを言えなくなっていた。一花は事ある毎に俺の部屋へ来ると、まるで自分の部屋のように寛ぎ、チャム（猫）と戯れていた。いつの間にか自分のコップや歯磨きセットまで持ち込み、俺のPCで冒険者をするなど完全に自分の城としてこの家に住み着いた。俺もレポートや学校の課題に追われ一花の面倒は見ないが、いつしか妹が出来たような感覚になり、この生活も悪くないと思うようになっていた。周りから見れば同棲に近いが、2人の間には恋愛感情は無かったと思う。一花は男性に興味が無い様子で、猫に夢中だった。まだまだ子供なんだなと思わせる。さすがに合鍵は渡せなかったが、自分が居る間は好きにさせている。

「みのりん、最近チャムと仲良くやれてる？」

「ああ、俺によく懐いてると思うぞ？見てて分かんないか？」

「あの智がそんなに可愛いこと出来る訳ないじゃん？」

「ああ、茶霧の話な。」

「そだよ。相変わらずゲームではラブラブじゃない。そろそろちゃんと告白したら？」

「出来ると思うか？それにまだ俺はリアルの茶霧には一度しか会ったこと無いんだぞ……。」

「大丈夫よ。あれだけゲームで仲良ければもう恋人と同じよ。さあ勇気を出してっ！」

一花は最近、頻繁に俺を告白するように誘導するようになった。一応、世間体もあるので俺の家に入り浸っていることは茶霧にも秘密にしているらしいが、どうも俺達にリアルで仲良くして欲しいらしい。俺はリアルで茶霧に出会ってから、当然のように恋に落ちていた。レポートを書いている間、夕食を作っている間、彼女の姿が脳内に浮かび上がる。ツンとした美人。腰近くまで長く伸ばされたサラサラの髪に、細い腰や、それでいて出るところはしっかりとして出ている悩ましげな肢体。男なら皆、彼女を自分の物にしたくなるだろう。だけど、俺はその容姿以上に彼女のゲーム内で見せる天真爛漫な性格に惹かれていた。妄想の中で俺に微笑みかける茶霧智。

「あ、妄想全開になってる。」

不意に一花に声を掛けられ、俺は現実に戻される。

「絶対に智のこと考えていたでしょ？」

につこりと微笑む一花。俺は焦って「そんなことねえよ。」とだけ応えた。

「智は可愛いからね。ライバルも多いけどみのりんなら落とせるってっ！この間の態度なんか、私見たことないよ。あんなに可愛い笑顔の智って滅多に見れないんだから。」

一花はウフフと笑いながら俺をその気にさせようとどんどん持ち上げる。

「でもまあ、俺はハーヴェストだって言い出せないし、どっちにする振られて終了だよ。一花の期待に応えられなくて悪いな。」

「じゃあさ、私が明日ここに入り浸ってるって智に教えてみるよ。

絶対に乗りに込んでくるから、その時にデートでも誘ってみたら？案外と引つ掛かるかもよ。」

「デートねえ……。」

「頑張れみのりんっ！」

「ふう〜む……。」

茶霧はあつさりと一花の罫に掛かったらしい。午後に電話があった。前回の時に番号は交換していたし、俺は速攻で登録していたのだけど、いざ掛かってくるとどう接していいか分からない。

「なんだ？どちら様でしょうか？」

「……あんた舐めてる？」

思わず出た憎まれ口にしつかりと反応してくれた茶霧に俺は嬉しくなった。やっぱりリアルな茶霧は声も可愛らしいと思う。会話で迎えるに行くことになったが、俺は勝手に約束を取り付けるとすぐに電話を切る。気が変わったら目も当てられない。また茶霧が家に来る

と思うと気分も弾む。待たせては悪いと思いつながら目的の郵便局に向かった。しかし、茶霧が来たのは俺が着いてから30分近く過ぎたからだ。ちよつと怒った振りをしたら、困ったような顔をしていた。困った表情も可愛らしい。もう虐めたくて仕方なくなっていた。だけど俺は、車内に茶霧が居るという事実には緊張してしまい、素っ気無い態度しか取れない。

「少しドライブして欲しい。」

もうすぐ俺の家に着くという辺りで、茶霧がそう言った。思わず耳を疑う。先ほどから妙に大人しかったが、彼女も俺同様に緊張していたのだろう。了解するとパツと顔を輝かせた。それから俺は、茶霧と楽しいドライブをすることが出来た。彼女は意外とよく喋る。いや、こつちが本当の茶霧智なのだろう。ゲームではいつもテンションが高くお喋りだ。普段の澄ましたクールなイメージは余所行き顔なのだろうと思う。そんな彼女の一面を見ることが出来て本当に良かった。ダムで夕陽に目を細める彼女の姿は、ただ美しかった。

ソファで横になり、チャムを抱いて眠る茶霧を一花と一緒に眺めていたが、彼女は起きる気配が無い。スウスウと寝息を立てている。

「可愛いでしょ智？」

「ああ……。」

「このまま置いていくからねっ！勢い余って襲ってもいいわよ。あ、

「一応起こそうとしたとだけ言っておいて。後で色々言われると面倒だからね。じゃっ！」

「ちょっと待てっ！一花、俺を犯罪者にさせたいのっ！？」

「我慢してもいいし、本能のまま襲い掛かってもオツケーじゃない？この場合悪いのは智なんだから遠慮は要らないと思っけど？」

そう言つと一花は帰っていった。俺は2人きりで残される。

「やばい、絶対やばいぞこれは……。どうすりゃいいんだ？」

とりあえず毛布を出して彼女に掛ける。「ううん……。」「と艶かしい声を出しながら毛布を引き寄せ自らの体に巻きつける茶霧を見て、俺のテンションは一気にMAXまで上がる。

「やっべえ……。可愛すぎるんだけどこいつ……。」「

今襲い掛かれれば俺の大勝利は間違いない。ただ人としてそれをやっていいのが悪いのが非常に迷うところだ。

（やっちまえてっ！男の部屋で無防備に寝てるほうが悪いんだよっ！）

（ダメだよ実っ！そんな欲望に負けちゃダメっ！）

ありきたりな天使と悪魔の葛藤が頭の中で繰り広げられる。何も出来ずに金縛りにあつたように俺はその場に立ち尽くしていたが、茶霧の寝息に混じって小さな小さな声が聞こえた。俺はハッキリとその声を拾ってしまう。

「ううん、ハヴさん……。」

愕然とする。俺の名前でも囁かれていたら、もう我慢が出来なかっただろう。だが彼女の口から出たのはハーヴェストの名前だった。俺は自分自身に負けた。そう知った瞬間、テンションは一気に冷めて俺は自室に引き籠もってしまった。

翌日、俺は朝から茶霧を学校に送り、見事に恋人と勘違いされた。だけど俺は、浮かれることも出来なかった。彼女が本当に好きなのはハーヴェストで俺では無い。その事実が俺をへこませていた。そしてその日、ハーヴェストとして茶霧から告白され、有耶無耶のうちにつき合うことになった。面白くない。俺はこれからずっとハーヴェストとして彼女の気持ちを独占できるというのに、ただただ空しかった。毎日ゲーム内では恋人としてチャムと接する。だけど現実の俺は彼女から電話はおろかメールさえ来ない。彼女は『ハーヴェスト』に夢中なのだ。俺だと知らないから、こんなにも甘え、こんなにも愛を囁く。俺は茶霧と知っているから、愛しくてたまらない。だからこの関係を止めようとは思わなかった。だけどやはり、本当の彼女からは何の連絡もないまま、季節はもうすぐ冬を告げようとしていた。

突然の茶霧からのメール。研究室にレポートを提出した俺は、彼女を迎えに行くために急いでいた。メールの返事はしていない。と言うより忘れていた。茶霧のルートを予想して工学部へ向かう。経済から農学へ移動するには一番の近道だ。必ずここを通るに違いないと思っていた。別名はナンパ交差点。ここを通る女の子は、飢えた理系の男子学生に高確率で声を掛けられる。俺の茶霧が変なナンパ男に引っ掛かるのは許せない。ハーヴェストとして彼女と付き合っ出してから、俺は彼女に対する想いを一層と強いものにしていった。案の定茶霧は、工学部の馬鹿男に言い寄られていた。しかも手首を掴まれている。イラツときた。

「待ったか？」

俺は急ぎ足で2人に近付くと男を威嚇する。頭の悪そうな格好だ。背も低いし喧嘩になれば一方的にぶちのめせるだろう。恐くも何とも無い。むしろ殴りたい。俺は男を挑発したが、茶霧に制止される。それでも俺は睨む視線を外さない。焦った茶霧は俺の手首を引っ張る。しつとりとした手の感触。胸がドキリとしたが、まだ動かない。困った茶霧は俺の腕を抱え込んで引っ張った。

（うはっ！何か色々当たってるっ！超やわらけえ。）

腕が何か柔らかいもので挟まれている感覚。今度は別の意味で動けなくなる。まだ動かない俺を茶霧は懸命に引っ張る。頑張ってる顔も可愛い。色々押し付けられて嬉しいやら気持ちいいやらで俺は意識が遠くに飛んで行きそうだった。寸でこのところで意識を保ち、茶霧に腕を引かれながら歩く。もう両手で抱え込んでいなかったが、片手は俺の腕に絡みついたままだ。ハッキリ言おう。横乳も最高だ。

（やべ、鼻血出るかも・・・。）

駐車場へ行く間、茶霧は俺の腕に興味を示したようだった。いつもハーヴェストとイチヤイチャしているので、リアルの男の体にも興味が出たのかもしれない。俺はおいしいと思ひ、茶霧の好きにさせていると、あるうことが彼女は手を弄くりだした。自分の掌と合わせてみたり、指を絡めてみたり。俺の心臓はもう破裂しそうなほど鼓動していた。彼女の手は少し冷たく、途方も無く柔らかかった。

自宅に茶霧を連れて行くと、一花はすでに腕を組んで歩いていて、ことを知っていた。さすがは狭い大学だ。意外に見られているもんだと少し感心する。一花に問い詰められ困っていた茶霧が可哀想になり、俺は誤解を解いてやる。感謝の眼差しを向けた彼女だったが、その目は少し憂いも含んでいたことを俺は見逃していた。彼女の態度はその後余所余所しくなり、「私はここに居るべきじゃない」と言い残して帰ってしまった。

「一花っ！どうしよう。完璧に誤解されたぞっ！？」

「いいんじゃない？どうせ智と付き合う気無いんでしょ？」

「そんなこと言ったってお前……。」

「大丈夫だって。あれは嫉妬よ。みのりんが私と仲良くしてるから嫉妬の炎に焼かれただけよ。」

「俺はお前にSHITだよバカヤロウッ！」



「誰がうまいことを言えと……。」

「やべえ、絶対に嫌われたって……。」

「だいじょぶだいじょぶ。」

一花は余裕をかまして茶霧にメールを何度か送るが、一向に返事は無い。

「みのりん、結構やばいかも。今回は重症ね。」

「アホかっ！どうしてくれるんだっ！？」

「こうなったら日本男児らしくKAMIKAZE ATTACKよっ！」

「死んでしまっわ。」

「だよね。いいわ。明日私がちゃんと説明してあげる。」

そして翌日、一花は俺の部屋に着くなりブーたれた。

「智のやつ今日ずっとニヤニヤしてんの。昨日あれだけ心配させておいて、心配した私達が馬鹿みただったわっ！」

「どっしてそうなった……？」

「知らないわよっ！あれは昨日何かあったわね……。ずっと携帯に出なかつたんじゃないやなくて出られなかつたとか？」

「まさか……。」

「男かもっ!」

「やべえ、首括ってきます。」

「早まったらダメだつてっ!」

勿論冗談だが、俺は気が狂いそうだった。もしかしたら昨日茶霧が知らない男と抱き合ってたのかもしれないなどと、妄想が頭の中でスパークする。一花も心配そうにしていた。チャムまで脛をペロペロ舐めて俺を慰めている。そして、俺は数日間鬱々と悩む羽目になった。

確か土曜日だった。俺はまだ立ち直れないでいる。一花と2人で駅前の某有名ハンバーガー店で昼を食っていた。大好きなビッグマツも今日は何だかパサパサして味気ない。食欲が無いのであまり食べていなかったが、ちゃんと食べると言われて渋々口に運んでいる。

「しっかし智も謎よね〜。絶対何かあったと思うんだけど、今日まで目立った動き無しなんて。」

「もうその話は止めてくれ。胃が痛くなるよ。」

「うひひひ、大丈夫だって、智ちゃんがそう簡単に男に靡くとは思えないし。」

そんな事を言っていた一花だが、何気なしに外を見て目が点になった。俺も釣られて外を見たが激しく後悔する。そこには、男に手を繋がれて嬉しそうに歩く茶霧が居た。まるで恋人同士だ。

「一花お前、超嘔吐き……。」

「こんなはずじゃあ……。」

「何だあれ……？ハーヴェストに夢中じゃ無かったのか？俺って単に遊ばれてただけで本命はあつちか？オッサンじゃねえか……。」

「でも何か匂わない？あんなオッサンと智と一緒に居るのって凄く不自然。」

2人はそのまま近くにあった大手レンタリースに入っていく。車で移動するようだ。レンタカーと言う事は、あの男は地元の間人じゃない事は明白だった。駅で連絡を取り合い、一緒に何処かへ出かけるらしい。

「親戚とかじゃない？」

「でも親戚で手を繋ぐっておかしいだろ？」

「ん〜、みのりんここは尾行よ。私もちょっと引つ掛かる。」

「珍しく意見が合うな。俺もそうしようと思ってた。」

俺達は急いで店を出ると、駐車場で2人が出てくるのを待つ。車は仕方ないので、一花はニットを目深に被り、俺は日差し避けに備え付けていたサングラスを掛ける。程なくして、2人を乗せた車がレンタリースから出てきた。俺は緊張した手でハンドルを握り、その車の3台後を延々とくっ付いて運転した。

車は大学や市内の目ぼしい観光地を順繰りに回っているようだ。やはり観光に来た親戚とも思えるが、男は車から降りるたびに茶霧に手を繋ぐように要求している。はつきり言って心臓に悪い光景だ。今すぐ飛び出していつて男を殴りたくなる。

「みのりん、今は我慢よ。尻尾を掴まないとダメ。タイミングを間違えると命取りだわ。」

そんな俺の焦りを見透かしたように一花は俺を制す。しかし、意外だったのは茶霧が俺達に全く気付かないことだ。いくら顔を隠していても、俺の車だと気付いてもおかしくない。この車は頻繁に街で見かけることはない車だ。そこそこ売れてはいるが、200万円を越す軽自動車はやはり趣味で乗るものだ。一般的ではない。しかも黒。目立ってなんぼの車である。

「しかし全く気付かんな。そこまでのオッサンに逆上<sup>の</sup>せてるのか？」

「考えたくは無いけど、その可能性あるなあ……。でもあれって

さ、ハーヴェストとデートしてるようにも見えるわよね。」

「いや、あり得ないのは分かってるだろ？」

「でもさ、何かおかしくない？それに智の顔、さっきからだんだん辛そうになってきてるわよ。最初の浮かれた笑顔が消えてる。」

「それは俺も感じてた。何か違うって顔してるよな？」

「うん、これは最後まで尾行したほうが良さそう。」

「最終目的地がラブホとかだと俺死ぬぞ、マジで。」

「それは流石に・・・あるのかな？」

「あつてたまるかつ！！！！」

俺は妄想を打ち消す。そんな事あつてたまるか。

「みのりん、でも覚悟だけはしててね。」

「・・・・・・・・・・。」

日も暮れて、2人を乗せた車は飲み屋街に移動する。ここ周りはネオンに囲まれ、いかかわしいホテルも多数あつた。そう、分かり易い街なのだ。近くのパーキングに車を停めると、2人は連れ立

って歩き出す。一花を車から降ろして尾行させたが、すぐに戻ってきた。

「どこに入った？」

「見失ったっ！」

「この役立たずっ!!!」

俺と一花は仕方なく2人が車を停めたパーキングに入り、そこで待つことにした。俺は悶々としながら2人が帰ってくるのを待つ。一花の話では、2人を見失ったのは飲み屋が軒を連ねるエリアだそう。ホテルに直行では無さそうだった。2時間ほど待ったが、2人はまだ現れない。俺のイライラはすでにピークに達している。タバコも1箱以上吸っている。その時、一花の携帯にメールが届いた。

「誰からだ？」

俺の問いに答えずに一花はすぐに電話を掛けた。

「もしもし智?どついうことこれ?」

その第一声で、茶霧に電話したことは分かった。

「はっきり喋れっ!!!」

「呂律が回ってないよ?男とお酒を飲んでるけどもっ帰りたい。だから偶然っぽく迎えに行けばいいのね?」

茶霧は迎えを望んでいる。俺はホツとした。このまま男と一夜を共にする気は無いと言うことだ。

「そっか、最近浮かれてたのはその男のせいね？でも勘違いだったと？」

「そっか、勘違いだったか……。」

俺は小声で安堵を口に出す。本当に安心したのだ。一花が横で「ちよつと黙つて。」と小さく呟いた。

「分かったわ。みのりん行かす。」

どうやら俺が迎えに行くようだ。心配させた分、ちよつとお灸を据えたほうがいいかもしれない。

「黙りなさいっ！私に隠れて男と付き合おうたあ太い奴じゃ。懲らしめてしんぜよう。」

一花も同じ気持ちのようだ。あとでお説教になりそうだなと考えていると、一花は俺に所在地を教える。行った事は無いが、よく聞く名前のバーだ。酒を飲んでいたのでろう。呂律が回っていないという一花の台詞から、相当飲まされているようだ。

「みのりん、ちよつと急いだ方がいいかも。」

「でもあんまり早いと不自然だろ？一本吸ってから出るよ。」

俺はそう言つてタバコに火を点ける。

「そもも言つてられないわ。あの子つてザルなのよ。いくら飲ませても酔わないの。でも今日は明らかに泥酔してるみたいだった。ちよつと変なのよ……。まだ2時間くらいじゃない。強いお酒でも2時間くらいじゃ、ああならないと思うんだ。」

「つまりは？」

「何かされてるかも……。」

俺はすぐに車を出し、バーのある通りまで移動する。キョロキョロと周辺を見回すと、すぐにお目当てのバーが見つかった。車を停めて外に出る。その時、茶霧が出てきた。何だか急いでいるが、足元がフラフラとしている。俺は声を掛けようとしたが、すぐにオッサンが後を追って出てきた。どうも言い争いになっているようだ。

「一花、悪いがタクシーで俺の家に来てくれ。この車は……。」

「2人乗りだもんね。いいわ、智ちゃん乗せてあげて。その代わりにっ！」

一花は右手を出す。金を寄越せと言う意味らしい。

「私の所持金みる？」

「いや、やめとくよ……。お札が無さそう。」

「400円しかありませんっ！」

「……ほむ。」



俺は一花に5千円札を握らせる。目を輝かせる一花。

「無駄使いするなよっ！」

「オツケーご主人様っ！」

「頼むから茶霧に前で絶対言つなよ……。」

「むふふ、じゃあ後よろしく。ってアッー！！！」

一花は驚いた様子で一点を指差す。そこには腰を抱かれて今まさにホテルに連れ込まれそうになっている茶霧が居た。すぐ側にホテルがあるじゃないか、一花の言葉はもう信用できない。

「こんなことしてる場合じゃねえええええっ！！！」

俺はそのまま50mほどダッシュして、男のどてっ腹を蹴り飛ばした。勢いがついた蹴りを不意に受けて男は吹き飛ぶ。茶霧はフラッシュしたが、すぐに俺は彼女を抱き留めた。

「遅くなった。」

俺の腕の中でボーっとした顔をしていた茶霧だったが、俺の顔を見上げると途端にクシャツと顔が歪んだ。

「遅くないっ！ありあと……。」

「ありあと？」

呂律が回っていない。

「あ・り・が・と・う・よ。わらひも少しで……。ほんとにありあと……。う、ぐす……。」

「もう大丈夫だからな。心配いらなから泣くな。」

茶霧は俺の腕にしがみ付くと、嗚咽を漏らす。相当恐かったようだ。小刻みに震える肩がそれを物語っている。俺の頭に血が上り、フラフラと立ち上がった男にキツイ睨みをきかせた。男は怯えた表情を浮かべる。

「あんた誰だ？」

「ハヴさんよ。冒険者の。ぐす。」

代わりに茶霧が答えた。俺は耳を疑う。ハヴwestは俺だ。

「ハヴwest？」

「そうよ。わらひ彼と付きあったの。すん。」

「お前誰だ？」

再度、俺は男に問う。

「らからハヴさんらって……。何？」

茶霧も俺の変化に気付いたようだ。不思議そうな目で俺を見ていた。

「こいつがハヴwest？笑わすな。」

「どういう意味？」

「俺は彼を知っている。お前誰だっ！！！」

「ひっ！ハーヴェストですう……。」

「……。茶霧、すまんが車で待ってる。そこに停めてるから。鍵は開いてる。」

俺は一花がもう居ないことを確認すると、指を差して茶霧を車へ誘導した。

「う……、うん。グス。」

茶霧は訳が分からないと言う顔をしていたが、素直に従って助手席に乗った。目がトロンとしている。どうも様子がおかしい。単に酔っている感じじゃ無かった。俺は怒りを感じながら再度男に質問した。

「正直に言え、お前誰だ？」

「ひいつ！だからハーヴェツ！！！」

俺は拳で男の鼻っ柱を殴りつける。

「もう1回だけ聞けど、お前誰だ？」

「……だからハツ！」

さらに殴る。俺はチラリと車を振り返ると、茶霧は意識を失っているようだった。それを確認すると、男に続けた。

「いいか、よく聞け。俺がハーヴェストだ。だからお前が嘘を言っていることは分かる。正直に言えよ。お前誰だ？」

「お、お前がハーヴェストだってっ！？そんなことあるか。あいつは30のニートじゃないかっ！」

「そんなこと鵜呑みにしてんのチャムとお前ぐらいなもんだぜ。」

「馬鹿なっ！僕がハーヴェストなんだっ！」

「だから俺が本人だつての。殺すぞ。」

さらに拳を振り上げると、男は慌てて真実を叫ぶ。

「ひっ！ぼ、僕は氷の貴公子だっ！お願いだからもう殴らないで……」

俺はその事実にも特に驚かない。偽善者っぽい振る舞いや茶霧を舐め回すように見ていた視線から、不思議とハナクソ盟主を連想していたのだ。ゲームにはしつかり性格が出ると言うことだ。

「お前、盟主だったのか。やっぱりハナクソだったな、お前は。しかし、一体どうやって俺に成り済ました？」

「そんなことお前に関係ないじゃないかっ！僕はチャムちゃんを心から愛してたから想いが届いただけっ！あぎゃっ！……！」

顔は止めて、手を踏みつけた。傷を残しすぎても都合が悪い。

「本当は？」

「チャット覗いてたんです……。」

「はあ？意味わかんねえ。」

「そういうソフトがあるです……。」

「しっかり日本語しゃべれっ！あるですって餓鬼かお前はっ！？」

「ひいっ！」

「とりあえずお前、レイプ未遂の現行犯だっって自覚ある？これっって歴とした犯罪なんだぜ。」

「そんなっ！同意ですっ！」

「本人に聞けば分かるさ。警察呼ぶか？」

「すみません……。警察はやめて……。」

俺は急に従順になったハナクソに不信感を覚える。何か隠してると直感で感じた。

「お前まだ何か隠してるな？」

「そんなっ！隠してなんていませんっ！」

「茶霧に何した？あいつ酒じゃ酔わないんだよ。あそこまでベロベロって見たことないんだけど？」

「ぼ、僕は何もっ！」

そう言いながらスーツの胸ポケットを押さえたハナクソ。俺はすぐに手をつ込んで、妙な袋を引っ張り出す。中には錠剤が数個入っていた。慌てて奪い取ろうとしたハナクソを足で押さえつけ、俺はその錠剤をマジマジと見る。

「何だこれ？」

「風邪薬だっ！」

「いいや、やっぱり警察呼ぶ。」

「やめてくれっ！」

「じゃあ何だ？素直に言ってみる。」

「ネットで買った睡眠薬だ……。」

「こっちは？2種類あるんだけど。」

「大きい方が……、媚薬だ……。」

「睡眠薬に媚薬ねえ……。とことん腐ってるなお前。」

「……。」

俺はそう言つと髪を掴んでハナクソを引つ張つた。そのまま近くのコンビニまで引き摺っていく。そして、睡眠薬と媚薬を使って茶霧をレイプしようとした事実と今後二度と彼女に近付かない等を念書として書かせ、左手の親指で拇印を押させる。それから免許証のコピーを数枚取らせて、念書と一緒に封筒に入れさせた。全てコンビニで購入した物だが、効力はあるだろう。店員はカウンターで頭を何度も押さえつけられている男を見ても、こつちに何一つ言わなかった。飲み屋街だ。厄介事には首を突っ込むなと指導されているだろう。さらに男の実家の番号も聞きだす。携帯は茶霧が知っているだろうから省いた。そして、全てが終わると顔の形が変わるまで殴りつけて車に戻る。茶霧は死んだように眠っていた。

第十四話 彼の秘密？【秋庭実side】（後書き）

今回は長いですね。書くの大変でしたよガチで。

自分で話を読みながら台詞をコピペして貼ってちゃんと繋げて。

意外に時間かかります。



第十五話 彼の秘密？【秋庭実side】（前書き）

私の戦闘力は53万です。 byポロリの中の人

深い意味はありません（・？ ・？）

## 第十五話 彼の秘密？【秋庭実side】

### 第十五話 彼の秘密？【秋庭実side】

マンションの駐車場で一花と落ち合った。茶霧はまだ眠りから覚めない。仕方ないので、俺が背負って行こうとするが、四肢に力が無いためにズルリと落ちてしまう。面倒なのでお姫様だっここで部屋へ連れ帰った。一花も一緒なので、管理人には眠って起きないなどと言いつけておく。来客用のベッドを俺がメイキングしている間に一花はトイレに茶霧を連れて行き喉に指を突っ込んで胃の中身を全て吐かせた。茶霧はひどく咽たが、それでも目を覚まさない。口に水を含ませよく濯ぐと、顔に付いた汚れを落として、ベッドに寝かせた。

「あ、服が皺になっちゃうわね。ちょっと脱がすからみのりんは消えてっ！」

「消えてって……。」

「見たいの？」

「いや、そっいうわけじゃ……。」

見たいに決まっている。

「じゃあさっさと出て行ってね。レディの着替えなんて見るものじゃ無いわよっ。」

一花に恐い笑顔を向けられて、俺は渋々退散する。本当は見たいの

もあるが、一向に目を覚まさない茶霧が心配で片時も傍を離れたい  
なかつたのだが、仕方ない。身の回りの世話は、やはり同姓の一人  
が一番だった。20分もすると、一人からお許しが出て部屋へ入る。  
茶霧は清潔なTシャツを着て、化粧も綺麗に落とされている。アッ  
プされていた髪も結び紐を解かれて綺麗に櫛で梳かされていた。スウ  
スウと寝息が規則正しく聞こえる。薬は一応1個ずつ奪ってきた。  
いざと言うときにきつと役に立つだろう。勿論悪用するのではなく、  
医者に見せる為の物だ。一人は脱がせた服を持って部屋を出て行く。  
ピンクの紐っぽいものが垂れていたけど、女性の服はよく分からな  
い。確かピンクは着ていなかったはずだと思いついたが、どうでも  
いいことなのですぐに忘れてしまった。それで後々痛い目を見るが、  
その時は何とも思わなかった。その夜、一人はずつと茶霧の傍に座  
り込み、俺は落ち着かずリビングや自室を忙しなくウロウロしなが  
ら、結局一睡もできなかった。

翌日、長い眠りから目覚めた茶霧は頭痛があっただけで、ケロリ  
としていた。薬による副作用は無いようだった。ただ、昨夜の記憶  
はほとんど無いらしく一人を激怒させ、心配していた俺は迂闊にも  
彼女のあられもない姿を見て全力でビンタを食らった。念のために  
病院へ連れて行ったが、薬も多分市販されている睡眠薬と、軽い興  
奮剤だろうということだ。血液検査だけ待って、違法な物かどうか  
判断したいと医者に言われた。俺は、帰りの車の中で、ハーヴェス  
トとの関係の清算を持ちかけたが、あっさり拒絶された。彼女は  
この後もハーヴェストと付き合っていくつもりらしい。どうやら俺  
はまだハーヴェストとして彼女を支えてあげないといけないようだ。

(いつか秋庭実として彼女の傍に立ちたいもんだな……)

俺の願いが叶うのはいつの事になるやらだ。今回の騒動で、少しは彼女の核心に迫れたつもりだったが、その後、1ヶ月以上も彼女からの連絡は無かった。そう簡単には心を許してくれないらしい。俺はまだしばらくハーヴェストとして、元氣一杯のチャムの傍にいようと思っていた。その期間が長ければ長いほど、彼女の前に真の姿で出られなくなることを気付いていながら。

もうすぐ学校の講義も終わる12月12日、従兄妹が俺の家に来てきた。名前は秋庭朋美。親父の妹の娘だったが、母親が離婚したので秋庭の性を名乗っている。俺の2歳年下で18歳、現役の子高生だ。尤も、来年は卒業してうちの大学の経済学部に入學すると聞いた。馬鹿だと思っていたが、入學した商業高校では常にトップをキープする才女だったらしい。でもそれは商業高校のレベルだ。普通科の連中と違って、簿記やパソコンの資格などを大量に持っている以外、英語、数学などの知識はほぼ無い。なので商業高校からの生徒は初年度から一般教養で苦戦するらしい。その辺りを補助して欲しいので、俺の部屋に住まわせると叔母からのお達しがあった。

(冗談じゃねえよ……。何で俺がチンチクリンの相手をせないかんだ。)

でもこの街を案内はしないといけない。俺は地方から飛行機に乗ってやってきた従兄妹を迎えるために空港へ着ていた。もう3年は会っていない従兄妹。空港の掲示板は俺が到着した時には、すでに従

兄妹の便の到着を掲示していた。

「もう着いてるな。たしかロビーで待ち合わせのはずだけど。」

広いロビーにはたくさん人間が溢れ、荷物を持ち行き交っている。トランクをゴロゴロ引きながら歩くサラリーマンや旅行のような服装の家族連れ。多種多様な人間が交錯するロビーで3年前の面影だけを頼りに従兄妹を探さなければならない。手っ取り早く携帯に電話を掛けたが、搭乗した時に電源をOFFにしたのだろう。

「この電話は、電波の届かないところ……」

「ちっ。」

俺は舌打ちしながら尚もロビーを見る。ふと1人の少女と目が合った。何処と無く見覚えがある。

「朋か？」

「実ちゃん？」

それでハッキリした。こいつが探していた従兄妹のようだ。いつの間にかすっかりと大人びている。前に会ったときは薄っぺらだった体もすっかりと成熟した女性のそれになっていた。従兄妹とは分かっている、ついついその体に目を走らせてしまった。

「うわ、この人久しぶりに会った従兄妹にエロイ視線送ってるよ……。そんなだったっけ？」

言われて気付くがもう遅い。俺は慌てて否定したが、一緒に住む話

はその日のうちに叔母に電話して却下した。

「実、従兄妹同士は結婚できるんだからあんたの嫁にやってもいいんだよ?」

叔母は大笑いしながらそう言ったものだ。ちなみに彼女と勘違いされた一花は朋美に鋭い視線を向けられて困ったそうだ。

明日はメリークリスマス・イブ。俺は一花に呼び出され大学のカフェに向かっていた。茶霧からはこの1ヶ月何の連絡も無い。ハーヴェストとして毎日会っているのも、彼女が相変わらず元気になっているのは知っている。だが、やはり顔も見れないのは苦痛だった。恋人として毎日会いながら、手の届く場所で指を啜えているしか出来ない自分にも嫌気が差す。どうしようもないが、これは自分が招いた結果だ。甘んじて受け入れるしか無いだろう。当然彼女をクリスマスに誘うなど無理な話だった。憂鬱な気持ちでカフェに向かう。今年のクリスマスは、冬休みに入った朋美と一花で3人寂しく(?)クリスマス会でもやろうと言う話になっている。朋美はもう大学進学を決めているので、就職活動や進学で必死な同級生とは遊んでもらえないらしく、俺に飛行機代をせびって遊びに来る予定だ。着くのは明日の午前中の予定だった。

(虚しい……)

俺はまだ茶霧との楽しいクリスマスに未練タラタラだったが、もう一花には決定事項としてクリスマスを明けるように命令されていた。

カフェで一花と待ち合わせも珍しいなと思いつながら駐車場に車を停めると、メインストリート沿いにあるカフェに入る。店内を見回すと、一花の姿は無く、一人でボンヤリとしているとびきりの美女の姿を確認した。突然の事に声を掛けるか戸惑ったが、意を決して声を掛ける。

「茶霧じゃねえか。何してんだ？」

我ながら平静を装うのはうまいと思う。心拍数はすでに跳ね上がっていた。茶霧は、伏せていた顔を上げたが、その顔に一瞬引いてしまふ。何故なら睨まれたからだ。

(何でキレてんだよっ！俺何かしたっけかっ!?)

「・・・一花と待ち合わせだよ。」

俺だと確認すると、茶霧はまた顔を伏せる。どうやら元気ではないらしい。俺は不思議に思っていた。昨日も冒険者で楽しくデートをしたはずだ。こんなに暗く沈んでいる理由が分からない。

「ふう〜ん、俺も一花に呼び出されてるんだ。ここいいよな？」

そう言うと茶霧の向かい側の席に座り、コーヒーを注文する。また茶霧に睨まれた。意味が分からない。

「何だ？今日もご機嫌斜めだな。」

「・・・そんなんじゃないわよ。」

「そっか？でも機嫌悪そうに眉に皺を寄せてる顔のほっぺが見慣れて

るかもな。うん、いつもの茶霧だ。」

またやってしまった。どうして悪態が先に立つのだろう。俺って奴はいつもそうだ。好きな女の子に意地悪したい小学生から成長してきたいないのだろう。男は何時まで少年の心を持ち、変わるのはオモチャの値段だけだと言う例え話を聞いたことがあるが、正にその通りだと思う。

「・・・やっぱり俺はお前に嫌われてるんだなあ。」

俺は素直にそう言ってみた。この際、その辺をハッキリさせて自分にケジメを付けたいと言う気持ちが強くなっていたのだ。驚いたよくな目をして俺を見た茶霧だったが、また目を伏せる。

「一花は何も教えてくれないし、やっぱりあれ以来ろくに口も聞いてくれないとさ、堪えるよ。」

これも素直な言葉だ。

「・・・そうじゃない。」

「え？」

「き、嫌ってなんかいないよ。だからそんな顔しないで。」

嫌っていない。その事実は俺に微かな希望を持たせた。だけど、目を伏せている茶霧を見ているととてもそう楽観的には思えない。やはり俺は嫌われているなと結論せざるを得なかった。

「そうなのか？でもずっと避けられてる気がしてたんだけど・・・」



「？」

「だ、だって秋庭君には色々と変なとこばかり見られてるし、何だか恥ずかしくて・・・ね。」

そんなことを気にしてまともに目も合わせられなかったらしい。確かに覚えはあり過ぎる。まあ女の子なら無理もないかと思った。

「そんなこと気にしないでいいのに。お前ってやっぱり真面目なんだな。」

返事は無い。無言の時間だけが過ぎていく。俺は耐え切れずに息を吐いてしまった。

「一花のやつ遅いな。もうとっくに時間は過ぎてるのに。」

我ながら白々しい台詞だった。でも何か切欠は欲しいのだ。茶霧はまだ無言だったが、不意に携帯を取り出して呟く。

「死ねばいいのに。」

俺はギョツとして茶霧を見てしまったが、茶霧は表情も変えずに一花からのメールがあつた事を俺に告げる。そして、この後2人で買い物に行かねばならないことを教えてくれた。一花の意図は読めないが、俺は素直に2人で居られることを嬉しく思っていた。

茶霧のメールから数分、俺の携帯も太鼓の音を奏でる。これは最近気に入って使っている着信音だ。茶霧はツボに入ったようで笑っている。そんな様子を見て俺も先ほどよりは幾分気分も楽になった。

「お、何か久しぶりに笑ったとこみたな。」

自然にそう口に出る。やはり茶霧は笑っている顔が最高に可愛いと思う。だがメールを開いた瞬間、俺は言葉が出なかった。

【メール】

「花ちゃんですよ！」

指令1：買い物中は手を繋ぐこと。腕を組むのも可

指令2：キスとかしちゃってもいいのよ！

指令3：2時間だけなら遅れていいからね！

指令4：守らなかつたらわかってるわね？（ ）

【メール了】

「何コレ・・・？」

メールを見せた茶霧の反応は淡白だったが、やはり不信感はあるらしい。怪訝な顔をしていた。

「指令だって・・・。2と3は意味不明だけど・・・。」

「本当に意味不明だわ……。」

「買い物中は手を繋ぐって……、ちよつとなあ？」

「そうね。秋庭君も困るでしょう？」

「え？いや……、お前がまたいらぬ誤解を受けるのが……。」

俺が困る理由は何一つ無い。だが、茶霧はまた要らぬ誤解を受けることになる。これ以上関係を悪化させるのは避けたかった。

「そうね……。でも指令4は何なの？あなた一花に弱味でも握られてるわけ？」

弱味と言えばそうだ。だけど、それを茶霧本人に知られるのは絶対に避けたかった。

「うーん、そうだな。これをばらされると俺は首を括るか学校を辞めるかしないといけないかもしれない。」

本当にそうしそうな自分が怖い。

「そんな秘密なのっ！？秋庭君何したわけ??？」

(あんたのせいだ。俺がこんなに恐がってるのは。)

「ははははは……。それは言えないから困るわけで……。」

俺は乾いた笑い声を上げながらそう弁解するしかなかった。茶霧は少し考えたような顔をしたが、不意に右手を差し出す。

「そりゃそうね。いいわ、ハイッ！」

俺は軽いパニックになる。何で素直にこんなアホな指令を実行する気になったのか疑問だったのだ。

「何の真似だ？」

驚いた俺は何度も茶霧の顔と手を見比べる。

「だからハイ。いいよ、手を繋ぐくらい。」

「おいおい、一花のおふざけだぞ。見張られてるわけでも無いのに律儀に守らなくてもいいよ。」

「でも、万が一見られてたら秋庭君が困ったことになるんでしょ？」

「まあ、そりゃあね……。」

「いいわよ。別に減るもんでもないし。」

俺は色んな物が減っていくと思う。

「ほんとにいいのか……？また要らない誤解を……」

「1回も2回も同じよ。それとも私とじゃ嫌？」

嫌な訳が無い。寧ろ金を払ってでもお願いしたい。

「え？そ、そんなわけないだろうっ！」

声も上ずる。

「私もう手が疲れてるんだけど？」

まだ握ろうとしない俺ににイタズラツ子のような視線を送り、早く手を繋ぐように促す茶霧。最高だ。こんなシチュエーションをくれた一花にキスしてやりたくなる。

「あ、ああ。悪いな……。」

俺はそう言って、ソツと茶霧の手を握る。少し冷たくしっとりした感触。そしてとろける様に柔らかい。

「あのさ、やっぱり照れるよな？」

「当たり前でしょう？私も心臓が痛いくらいよ……。」

「お、俺もかなり。」

茶霧も同じ気持ちでいてくれる事を嬉しく思う。

「後で一花にはきついお灸を据えてやらないとねっ！」

「だな。頭を撫で撫でてやらなきゃな。」

俺は調子に乗って冗談を口走る。しまったと思ったが茶霧も困ったような笑顔を向けた。

「もっつ！冗談ばかりなんだから。さあ、早く買い物済ませちゃ

おっ?」

「ああ、行くところか。」

俺は浮き足立つ足を押さえながら会計を済ませると駐車場へ向かった。

### 【メール】

一花ちゃんだよ! 次の指令いつくぜい!!!

指令1: 手はちゃんと指を絡めましょう。テーマは祈りです。

指令2: 買い物は後でいいので、2人でドライブでも楽しんできて  
^-^b

指令3: ギアの子エンジは2人でやるうね? 初めてのドキドキ共同  
作業。

指令4: なんなら夜まで帰ってくるなコノヤロウ

R r a y したら P l a y してもいいのよ! って誰つま!!!

### 【メール了】

( うまくねえよバカヤロウが。何のプレイだ。 )

「何よ？どんなこと書いてあったの？」

急に焦った俺に茶霧が不思議そうな目を向ける。吸い込まれそうな大きな瞳にドキドキしながら俺はメールを見せる。

「……馬鹿よねあの娘は。そこは同意する。」

「だよな、絶対に馬鹿だ。」

俺達は同じ考えのようだ。

「祈りって何よ……。あれ？あの恋人繋ぎ？」

「多分俺も同じ形を想像してる。これだよな？」

俺は両手を胸の前で合わせて握る。左右の指が交互に重なり、まるで祈りを捧げるようなポーズを取った。

「うん、きつとそれよ……。」

その時また茶霧の携帯が鳴る。先ほどとは違う着信音で、電話だったようだ。短い会話であったりと通話は終わったようだ。茶霧は呆然として耳から携帯を離すと俺に悲しそうな目を向ける。

「それで合ってるってさ……。あの娘どこからか見てるわよ。」

「嘘だろう……。どこだっ！？」

「分かんないけど、ちゃんとしないと秋庭君やばいよ……。」

心配そうな目で俺を見る茶霧。これは下手すると全て暴露する用意をしているってことだろうか。

「やっべえ……、マジでこれはやべえ……。」

俺は頭を抱えるしかなかった。これを言われると俺は終わる。茶霧は絶対に俺を許さないだろう。茶霧は何か考えていたが、やがて俺の方を向くと言った。

「分かったわ秋庭君。一花は私が説得するから、こんな馬鹿げた遊びに付き合わなくていいよ。」

「へ？」

何のことか分からない。

「だからここで終わりにしましょう。付き合ってくれてありがとう。」

茶霧はそう言って車のドアを開けた。助手席から出るとスタスタと歩く。

「お、おい待てよ茶霧っ！」

俺は慌てて茶霧を追いかけた。このまま去られては本当にまずいと思う。

「大丈夫よ秋庭君。」



「いや、意味わかんねえってっ！俺が遊びに付き合っってどっいう意味だっ！？」

「いや、そのまんまの意味だけど？」

「付き合わされてるのはお前の方だろうっ！？」

「うっん、それは違うわ。」

「どっいうことなんだ？説明してくれよ。」

「だから、これは一花が私とあなたを付き合わせようと仕組んだことなの。ごめんね……。」

意味が分からない。一花は茶霧にも俺と付き合いえとしつこく言っていたのだろうか。

「意味わかんねえし。それに何で謝る？」

「謝った方がいいかなって？」

「何でだっ！？」

「何となく……。」

「ちゃんと説明してくれっ！俺に何をさせたかったんだっ！？」

俺は思わず大声を出す。彼女がビクリと肩を竦めたのが分かった。当然恐がらせたかった訳じゃない。

「あ……、悪い。怒ってるんじゃないんだ……。でも何か納得できなくてな。」

俺はもう完全に自分を見失ってた。どうしても彼女の真意を知りたいと強く思ってしまった。

「ううん、いいの。そう思うのが当たり前だと思う。いきなり恋人ごっこなんて不愉快だと思うもの。」

そう言うと茶霧は視線を宙に彷徨わせる。何かうまく誤魔化そうとしている。俺は我慢できなくなり核心に触れた。

「なあ茶霧。俺と恋人みたいな振りさせられて、お前は嫌じゃないのかよ？」

一番知りたいのはこれだ。よく考えれば彼女が大人しく一花に付き合った理由もよく分からない。俺が本当に嫌われているのなら是非でも断つただろう。だけど彼女の曖昧な態度ではうまく理解できない。そして彼女は静かに口を開いた。

「別に嫌じゃないよ。私は嫌じゃない。」

「何でだ？お前俺のことずっと避けてただろ？それにハーヴェストと付き合ってるんじゃないのか？」

そう、彼女の彼はハーヴェストだ。それは俺が一番知っている。ハーヴェストをどれだけ好きか知っている。何度もその1/10でも俺に気持ちを欲しいと思ったのだから。

「そうね、正直避けてた。それにハヴさんともまだ続いているわ。」

でもあなたとの恋人ごっこは嫌じゃない。軽蔑する？」

意味が分からない。嫌じゃないのは嬉しいがそこは問題じゃない。軽蔑って何だと思った。

「軽蔑ってお前……。そんなこと思い付きもしなかったよ。ハーヴェストはどうでもいい。だが何で俺を避ける？俺はお前に避けられる理由が全く思いつかないんだ。そんなにひどいことしたか？」

俺には茶霧に避けられる理由がよく分からなかった。そこまで親しくもないが、良好な関係だと思っていたのはどうやら俺の勘違いだったらしい。それは今までのことからよく分かる。そして、次の言葉で俺は地獄に落とされた。

「あなたのことを知りたくなかったから。もうこれ以上何も知りたくないの。」

これはもう終わりのサインだ。俺のことは知りたくも無い。つまり、これ以上自分に関わらないでくれという彼女のサインだ。もう会いたくもないと。

「そこまで嫌われてたのか……。俺は……。」

ショックで視界が暗くなる。正直立っているのがやっとだ。腰が砕けた。足に力が全く入らない。もうこの世の終わりのような気がした。

「秋庭君……。」

遠くから聞こえる彼女の声。もう愛しいこの声を俺は聞くことが出

来なくなる。ここまで拒絶されたのは初めてだった。涙も零れないが、茫然自失となる俺。暗い世界。ただ、目の前に霞んだ茶霧の顔が近付いてきた。そのまま、彼女の唇が俺の唇に重なる。これは夢だと思った。それも最悪の悪夢。頭の中にあっただのは、この時が止まればいいと、ただそれだけだった。しかし、俺の願いも叶わず、柔らかな唇は遠ざかっていく。

「ごめんね秋庭君。あなたのことを知りたくないのは、これ以上傷つきたくないから。私はあなたを知るたびに近付きたくない。あなたの傍に居たくない。でもそれは許されないのよね。」

また遠くで彼女の声が聞こえた。意味は分からない。ただ彼女の瞳から涙が溢れ出すのを俺はボンヤリと見ていた。

「ごめんね秋庭君。好きになってごめん。ハーヴェストも好きだけど、あなたも好きなの。こんな私でごめんね。サヨナラ。」

（サヨナラ・・・か。ハーヴェストも俺も好きだけどサヨナラか・・・。意味わかんねえ・・・。）

俺は去っていく茶霧を呆然と見送る。動ける気がしない。ただ茶霧の言葉が頭の中をグルグル回る。

（好きになってごめんか・・・。俺って別に嫌われてなかったんだな。でもごめんって意味わかんねえ・・・。）

どんどん遠ざかっていく茶霧。俺はその時、あることに気付いた。

（好きになってって・・・。俺達両思いじゃないかっ！！！どういうことだっ！？）

その言葉の意味がよく分からないが、彼女はサヨナラと言った。

「待てっ！ちよつと待て茶霧っ！！！」

俺は慌てて彼女を呼び止めたが、彼女は一気に走り出す。俺も追いかけたが、何せ足に力が入らない。あつと言う間に彼女を見失った。

目の前には一花が居る。彼女も茶霧を見失っていた。詳しい事情は先ほど全て話した。その上で、一花は茶霧の複雑な心境を全て俺に話してくれた。

「馬鹿か俺は……。そんなに彼女を追い詰めてたなんて。」

「だよ。あなた達は大馬鹿だよ。何のために私が色々画策したか分からなくなる。ここまで盛大なすれ違いって珍しいわよっ！」

「だよな……。茶霧はもう電話も取ろうとしない。どれだけ俺が傷つけたんだ……。」

「もう終わったことは仕方ないわ。みのりんはもう全てを智に伝えなさい。その上で決着つけないとダメよ。私はもう助けてあげないんだからっ！！！」

「ありがとう一花。俺ちゃんと彼女に向き合うよ。怒るだろうし、そのせいで振られるかもしれないけど、このまま不誠実な態度を取

りたくない。だからもう一度茶霧に会いたい。」

「それじゃ、あの困ったお姫様を見つけないさ。私も連絡取ってみるけど、多分探せないと思う。みのりんの家でクリスマスディナーを作って待つとくわ。鍵っ！あ、それと材料費……。」

俺は一花に家の鍵と金を渡すと、車に乗り込んだ。この広い街から彼女を探し出さないといけない。すでに3時間、彼女は一度も電話を取ろうとはしなかった。俺を見たらきつと逃げる。探して探してどうしようも無くなったら、家で待つしかない。それから俺は夜中まで街中を探し回ったが、茶霧の行方はようとして知れなかった。

翌朝の6時過ぎ、俺は行く当ても無くし彼女のアパートの部屋の前に座り込んでいる。携帯の充電も残り少ない。一花は全ての下準備を済ませてるから、意地でも茶霧を引っ張って来いとメールを打ってきたきりだ。寝てるに違いない。アパートの住人が俺をチラリと覗きながら何度も通り過ぎた。明らかに不審者と思われている。だがここを離れられないでいた。

「何処行つたんだ一体……。」

最悪の事態も頭の隅を過ぎる。その時、階段を駆け上がる軽快な足音が響いた。

（茶霧じゃないな。こんな浮かれた足音はたてられないだろうってオイッ！）

階段から現れたのは紛れも無く茶霧智本人だった。俺は一瞬目を疑う。何だか晴れやかな顔をしていたからだ。だがすぐに俺の姿を見つけると、彼女は回れ右をして逃げ出した。

第十五話 彼の秘密？【秋庭実side】（後書き）

長い長い秋庭実編でしたね。

もう男視点で書きたくないです。だって作者は乙女だものっ！

死んだ方がいいとか思った方はいい病院を紹介してください（、？  
?????、  
）



第十六話 智と実（前書き）

渋滞きらい・・・。

上り線は混んで大変でした。皆どりでトイレしてるとどしゃぶらね  
？（、・・・、）

## 第十六話 智と実

### 第十六話 智と実

もう黙り込んでどのくらいの時間が経っただろうか。私はただただ混乱している。秋庭実の真実は、それだけ私には青天の霹靂となっていた。もう何がどうなっているのか分からない。ただ自分は今まで何も知らずにハーヴェストとして秋庭実に甘えていたと言う事実が恥かしかった。まともに秋庭実の顔を見られない。だって私は匿名なのをいいことに、素の自分で思いっきり彼に甘えていたのだから。

「ねえ、私達って今この世界で一番幸せなんじゃない？」

「この世界に生まれたかったな。そうすれば何も考えずにあなたと一緒に居られる。」

「もっといっぱいギュってして欲しいな。」

「キス出来ないのがもどかしいね。」

「ちゃんと触れてあなたを感じてみたいな。」

「秘密のデートって大好き。何だか悪いことしてるみたいだよな。」

「ずっと大好き。」

今までチャットでハーヴェストに囁いた甘い言葉。彼からはちゃんとした答えをもらったことはほとんど無い。当然だ。相手が誰か分

かっついていれば、私でもゲーム内とは言えとても口に出せなかっただろう。いつかハーヴェストに出会ったら、きっと恥かしさで私は押し潰されると思っていたし、彼の目を見れなくなっていたと思うから。それが唐突に本人を前にしているのだ。耳まで真っ赤に染まりながら、私は動くことも出来ない。

「やっぱりシヨックだよな……。」

動けない私に秋庭実は済まなそうな目を向けていた、と思う。彼の顔を見れないのだから、私の憶測だ。

「そりゃあね……。あなただって分かるでしょう？今まで私が何をして何を言っていたか知っているんだっただら。」

「俺を恨むか？」

「出来れば殺して何も無かったことにしたいわ……。」

「だよなあ。」

だけどそれは無理な話。犯罪だし、何より大好きな彼を手にかけることなど出来ないだろう。数え切れない愛の言葉、それは紛れも無く自分の本音だった。ゲームじゃなければ、一生こんな大胆な言葉は出てこなかったと思う。秋庭実は私に許してもらえないと言ったが、許されないのは私も同じ。裏返せば、彼は私と別の男のデートを常に目の当たりで見せ付けられていたという事。私は好きな相手だが、ゲーム内でも別の女とベタベタしていたら耐えられないと思う。彼はそれに数ヶ月もの間耐え続けたのだ。決して自分に向かない言葉と知りながら、私のラブラブアタックに耐え続けていたと言うこと。どれだけ彼に傷を与えたか分からない。

「秋庭君、何だろう。私は何を言えばいいのかな？」

「何をつて？」

「私はあなたに謝られてるけど、私のほうが知らなかったとは言え、あなたに対してひどいことをしたと思うわ。黙ってて悪かったとかじゃなくて、言い出せない状況を私が作り上げていただけだと思う。だって、一花にバレた時には、もう私達に自分の素性を明かせない所まで来てた訳でしょ？」

「それは俺が悪かったよ。だって30歳のニートだなんて自己紹介しておいて、今さら同級生です。ましてや同じ大学ですなんて言えなかったんだから。最初の嘘から、俺は君に本当の自分を晒せなくなっていった。合コンで出会ったときは本当にびっくりしたよ。」

確かに最初に嘘を吐いた彼が悪いのかもしれない。些細な嘘が次の嘘を産み、嘘はまた一つまた一つと詰みあがり、遂には私達の間にも巨大な壁を作り上げたのだ。一花はその壁をいとも簡単に飛び越えて彼の真実に飛び込んだ。あの娘のそんな所は、凄い才能だと思う。私なら嘘を見抜いた瞬間に平手でも出そうだけど、彼女は笑って「それがどうしたの？」くらい言ったのかもしれない。

「とにかく一度、俺達の間を清算したい。その後の展開は君に任せろ。」

「清算って・・・、もう終わらせるって事？」

「そうだ。この関係は一度終わらせないと、俺は次に進めない。君もそうだろうか？」

この関係を終わらせる。それがどういふ事なのかは分かる。もう二度とハーヴェストとして彼は私の傍に居てはくれないと言ふこと。そう考えると、自分が如何にハーヴェストに支えられていたか分かった。考えただけで足がガクガクと恐怖に震えているのだから。

「ちょっと待つて、突然過ぎて私は今決められないわ。」

「でももうハーヴェストは居なくなる。俺ももう君に二度と連絡は取れなくなると思う。」

ハーヴェストが居なくなる？秋庭実と連絡が取れなくなる？何故そこまで話が飛躍するのだろうか。

「だから待つてよっ！大体、居なくなったら私困るんだけどっ！？」

「何で困るんだ？」

「それはその・・・、兎に角ちょっとだけ返事を待つてっ！」

私はもう叫んでいた。秋庭実もハーヴェストも同時に私の前から消えてしまう。そんなことが今の私に耐えられるわけが無い。

「じゃあ、一度君を送っていくよ。答えが出たら連絡をくれ。」

「……………うん。」

車内は沈黙だけが支配する。私は、アパートに着くと何も言わずに部屋に入った。秋庭実は私のことを『君』と呼んでいた。これが今

の2人の正確な距離なのかもしれない。小さな溜息と共に、私は玄関で座り込んでしまった。

すでに時計は昼を回っていた。彼の打ち明け話は長かったが、こんなに時間が経っていたとは思わなかった。私は暗い気持ちでお風呂の準備をする。とにかくサツパリして考えたい。今は頭の中がグチャグチャで、何を考えても纏まりはしないだろう。落ち着かなければならなかった。私はたっぷりと湯を張って、熱いお湯に体を沈める。昨日から体を洗っていなかったので、お湯がとても心地よいお気に入りの入浴剤も、ハーブのいい香りで私を満たしてくれた。

「清算か」。何だか別れ話みたい。」

私は一人呟く。冷静に考えれば、これは別れ話の類に入るのだろう。でもゲームのキャラクターと別れ話など、ちよつと現実味が無い。私は秋庭実と付き合っていたわけでは無いのだから、彼との別れ話とはとても思えないのだ。ハーヴェストは未だに私の中では別人で、何だか全部現実では無いような気がしてくる。

（ハヴさんと別れる。そんなことあり得ない。秋庭君が私の前から居なくなる。もう会えなくなる。そんなこと考えたくない。もうどうしたらいいのか分からない。）

決断はもう迫られている。だけど私は、どちらも失いたくないのだ。我ながら最低だと思う。どっちも私のなんて贅沢な話だ。同一人物なのだからそれは違うのかもしれないけれど、私はどうしても別人

だと思ってしまう。

（秋庭君には、色んな醜態も見られてるし、自然に接するなんて出来るのだろうか？それ以前に、次からはちゃんと付き合うことになると思う。その時、私は彼とちゃんと恋人になれるのだろうか？ハーヴェストとの関係は、どうすればいいのだろうか？ゲームではハーヴェストとして、私に接するつもりなのだろうか？そもそも、彼は冒険者を続けるのだろうか？もうっ！私はどうしたらいいのよっ！??）

私はもやもやしなからお風呂を出る。そして1つの結論が出た。今からまた彼に会おうと。彼の顔を見れば、きっと答えが出る。

彼は今、従兄妹を迎えに空港に出たという。例の可愛い従兄妹だろう。午前中に着くはずだったけど、私との騒動で忘れていたらしい。激怒して電話してきた従兄妹に平謝りしながら、急いで空港に行くところだそうだ。家には一花を待たせているから、良ければ家で待っていて欲しいとメールが着た。

（そう言えば、今日はクリスマス・イブだったな。昨日の一件ですっかり忘れてた。どうりで皆浮かれた顔をしているわけだ。）

電車に揺られながら、私は車内を見渡してそう思った。午後5時、もう帰宅するサラリーマンや学生、他にも様々な人で車内は混雑していた。皆が幸せそうな顔をしているような錯覚に陥るけど、半分は当たり前だろう。現にカップルで手を繋いでいる人や、プレゼント

のような物を抱えた人、楽しそうに笑う親子など、今の私は目を背けたくなるような光景もちらほら見える。秋庭邸の最寄の駅に、私は初めて降りた。考えてみれば、タクシーか送迎でしか彼の家に行つた記憶が無い。一花の家に遊びに行く時に、何度も通り過ぎた駅だつたけど、初めて降りてみると、新鮮で違つて見える。ちなみに一花と秋庭実には嫉妬した夜はタクシーで帰っている。早く家に帰り着きたかつたからだ。あの後、酷い目にあつたっけ。

(よく考えれば、秋庭君は私を何度も助けてくれてるな……。それだけ自分に隙があつたつてことなんだろうけど。でも彼が居なければ盟主に全てを奪われていたかもしれない。思えばあの時から私は彼を好きだと確信したんだつた。それまでは漠然とハーヴェストと重ねて淡い恋心があつただけ。二又なんて言いたくないけど、彼らを別人と認識しながら好きになつて随分悩んだなあ……。)

駅を出ると、秋庭実の家まで歩く。時間にすれば10分くらいだけど、私は随分と遠回りをして彼の家に辿り着く。遂にここまで着てしまった。エントランスまで行くと、秋庭実が私を待っていた。

「遅かつたな？」

「うん、色々考えながら着たんだ。」

「そつか、家は今、従兄妹と一花が睨み合つてるから外で話そう。」

「睨み合つてるのっ!？」

「そそ、チャムの取り合い。」

「ああ、そういう意味か。」



私は漠然と想像して、まだ見ぬ従兄妹さんの顔も知らないのに笑ってしまう。

「それで、ちゃんと考えてくれた？」

「ええ、ちゃんと考えたわ。」

ここに着くまでに、私は1つの結論を出していた。

「聞かせてくれるか？」

「ここではちよつとね。ねえ、車でまたドライブに連れて行ってくれない。誰も邪魔の入らない場所へ。」

「いいよ、落ち着いて離せる場所へ行こう。」

そして2人で駐車場へ向かう。一花と従兄妹さんにはもう少し待ってもらわなければならない。

案内された場所は何時かのダム。随分と長い時間、2人で車に揺られていた。終始無言。ダムに向かっているなと気付きながら、私は何も言わなかった。ここは2人の始まりの場所かもしれない。この時から、私は彼に淡い気持ちを持っていたのだから。

「……着いたぞ。」

車を小さな駐車場に停めた秋庭実は小さく言った。緊張しているのが凄く伝わってくる。私はもう結論を出していたので、そう緊張はしていない。

「あの時以来だな。どうしてもここを、もう一度君と見たかったんだ。」

「ここが初めてのデートだったから？」

「そうだな、あれがデートならそうだろうな。」

照れくさそうに微笑んだ秋庭実。私も釣られて笑う。

「で、どうするんだ？先に言わせてもらえば、俺の気持ちは変わらない。」

「結論を急いじゃう？」

「何だか焦らされてる？」

「そうかも。ちょっとは意地返し返したいじゃない。」

「意地悪ってお前……。」

「秋庭君、あのね、私やっぱり今のままじゃ付き合うつか無理だと思っただ。」

「やっぱりそうか。何となく分かってたよ……。」

「秋庭君に茶霧、そんな呼び方しか知らない私達じゃ恋人同士なんて無理でしょ？」

私は言葉を続ける。秋庭実はずっきりしたような顔をしていた。やはり少し沈んではいるが、やっと開放されたような晴れやかさも感じられる。そして、何か思いついたのだろう。私に向かうと、口を開けた。

「茶霧、俺を殴ってくれ。」

「どうしたの急につ！？」

「男としてちゃんとケジメを付けたい。もう振られてるけど、これは君を騙っていた俺への罰だ。思いつきり頼む。」

どこまでも真面目な男だなと私は苦笑いする。でも、これはいい切欠かもしれない。これから全てを始めるためにも。

「とんだ変態ね。ドMだったのかしら？」

「勘弁してくれよ……。これ以上言われるとダムに飛び込むぜ俺……？」

「冗談よ。じゃあ、きついのを一発あげるわ。目を閉じて齒を食いしばってっ！」

「わかったっ！」

そう言って秋庭実は目をギュッと閉じて口を真一文字に閉じる。私は左手を彼の頬に添えた。

「いくわよっ！覚悟はいいっ！？」

「！」

私は右手を振りかぶる。そして、ゆっくりと振り下ろして、そっと彼の左の頬に添えた。

「！？」

ビクリと一瞬だけ彼が体を揺らす。でも、私は彼の顔を固定して離さない。

「何だっつてんだ？」

彼がゆっくりと目を開ける。殴られると思っていたのだから顔は疑問の色を隠せない。

「きついのを一発って言ったでしょ？」

私は微笑んで、そのまま彼の唇に自分の唇を重ねた。ぴったりと重ね合わされた唇の感触に、彼はもう動かなかった。

彼が動けないのをいいことに、私は随分と長い間唇を重ねていた。人生で2度目のキスは、ちゃんと自分の意思で出来たことに満足して私は彼を解放する。開放された秋庭実は、目をパチクリさせながら

ら私を見た。

「茶霧っ！何の真似だよっ！？」

彼はひどく狼狽していた。きついビンタをもらうはずが、甘いキスをもらったのだ。その慌てた様子に、私はイタズラっぽく笑い返す。

「おっかしい。秋庭君の顔。」

「えっ！？あ、いや、何て言うかつ！？」

「あ、もう秋庭君じゃダメね。ねえ、実って呼んでいい？」

「え、はい、あの、どうぞ……。」

「私の事も、今後は智って呼ぶことっ！いいわね実？」

「あ、はい、何と言うか……、はい。」

「よろしいっ！じゃあ、帰ろうっ？」

「はい。」

まだ腑に落ちない秋庭実は、車の中でも不思議そうな顔をしている。

「なあ？」

「何？どうしたの？」

「俺って振られたんだよな？」

「そだよ、どうして？」

「いや、意味わかんないっす……。」

「私、茶霧さんは秋庭君を振りしました。でも私、智は実と付き合い  
たいと思います。」

「どういう意味でしょうか……？」

「最初に言ったでしょ？茶霧、秋庭君って呼び合うんじゃない無理だっ  
て。でも、今後は名前で呼び合います。するとどうでしょう。私達  
はちゃんと恋人になれそうです。これでいい？」

「いやさっぱり……。」

「何よ？それとも嫌なの？やっぱりもう会わない？」

「いやっ！それは勘弁して欲しいです……。」

「じゃあ文句言わないっ！」

「……はい。」

私も不器用だ。実はとっくに心は決まっていたのだ。彼とちゃんと  
付き合おうと。でも、秋庭実とハーヴェストとしての彼には、きつ  
と蟠わたかまりを残すと思った。だから、全く新しい私達の関係を無理やり  
にでも作りたかったんだ。ただ名前で呼び合うだけだけど、無理や  
りだけど、私はこれでいいと思った。そして、微笑むとギアに掛け  
られた彼の手に、ソツと自分の手を重ね合わせた。

## 第十六話 智と実（後書き）

とりあえずのフィナーレになります。

この後、後日談なんか数話書くかもしれませんが、恋は決着を着けました。

続くようにしてますけど、これで最終話の可能性もあります。

感想としまして、作者には設定が無理すぎたという点ですね。オンラインゲームなんてほとんど噛んでないですもん。もう少しこの設定をうまく使いたかった。勿体無いことをしました。

登場人物は、やはり一花に一番の愛着がありましたね。天然は書きやすくいい。茶霧さんは美人という設定が少しハードル高かったです。後半はキャラを意図的に変えて、感情移入しやすくしたつもりですが如何でしたか？

初の恋愛小説、楽しんで頂けましたら書いた甲斐もあります。次はファンタジーか中二設定でも書いてみようかな？w

**最終話 さよなら茶霧智（前書き）**

ちなみに戦闘力にしたら100万以上は確かか b yポロリの中の人

本当に意味はありません（．．．）



## 最終話 さよなら茶霧智

最終話 さよなら茶霧智

私が大学を卒業して、もう3年経った。25歳になった私は、実家に戻り地元の商社に勤めている。所謂OLをしていた。地元に戻ったのは理由があった。うちの父はそれなりの企業で部長をしていた為、就職難の現在でも簡単に良い仕事をみつ付けてくれたのだ。大学3年次から就職氷河期を味わっていた私は、その誘いに乗ってしまったのだ。実は大学在学中も順調に交際を進めていたし、私としては傍に居たかったのだが、彼も大学院を北海道に決めてしまっていた。うちの大学から北大の大学院など快拳だ。どうしてもやりたいことがあると言っていた彼を、私は引き止められなかった。離れても心は繋がっていると、そう信じて地元に戻ったのだけど、やはり年月は全てを風化させるらしい。もう1年以上彼を見ていない。メールや電話もかなり回数が減ってきていた。実はもう院を出て、北海道の企業に就職しているのだけど、一向に私を呼び寄せる気配を見せないでいる。私を呼び寄せる、つまり結婚だ。25歳、そろそろ私は適齢期に入っているのだけど、彼はまだプロポーズはおろか、忙しい忙しいと会話すらしない日々が続いていた。

(何だろ・・・、このまま自然消滅なんてことないよね?)

私はまだ彼しか交際経験が無いので仕事仲間に相談したりするのだけど、皆が一概に「ヤバイ」と言っている。私が遠距離恋愛の真っ最中なのは社内でも知れ渡っていたけど、最近では男性からよく誘われるようになった。昔は男付きだと明言していた為に猛烈なアタックなんてされなかったのに、今は唯のガードが固い寂しい女と見られているのかもしれない。遠距離中の彼からはほとんど連絡が無く

なっているのなんて同じ部署は勿論、他の部署にまで筒抜けのようだった。

（このままじゃいけないわ。今度会った時にハッキリさせよう・・・）

私はもうじき、ある事で彼と再会することになっていた。その時に全てを決着つけようと、私は決意してその日を待ち焦がれていた。

季節は秋になっていた。明日は一花の結婚式だ。場所は私がいる九州からかなり離れていたけれど、出席しないわけにはいかなかった。一花は地元に近い都市で旅行代理店に就職していたのだけど、そこをよく利用する男性と付き合うようになったと聞かされていた。彼は釣りが趣味で、よく地方へ釣り旅行をする人らしい。歳は私達より8歳も上だったけど、優しい笑顔の人だ。安心して彼女を任せられると思った。時折送られてくる写真に写る一花の笑顔が幸せですと物語っていたし、私は羨ましくさえあった。いつも好きな人と一緒にいられる一花が、とても羨ましかった。一花は大学で一番の親友、当然結婚式の通知を受けた時は快諾した。実も同じく快諾し、私達は久しぶりに会うことになった。ただ、結婚式の数日前、実から私宛の手紙が届いていた。いつもはメールや電話、そんな便利なツールで済ませるのに手紙が来たのだ。内容は短いものだったけど、とてもシヨツキングなことが書かれていて、私は思わず涙が頬を伝ってしまふ。遂に来たかと思った。

【手紙】

茶霧智へ

今回、手紙にしたのは言いにくかったからだ。

俺は茶霧智にさよならしたいと思う。詳しい話は会って話そう。

一花の結婚式は笑顔で出席するようにしたいしな。

秋庭実

【手紙了】

今日は一花の晴れ舞台。涙は禁物だ。これから一生を伴侶として旅立つ2人にとても失礼だと思う。それでも私は、浮かぬ気分で朝を迎える。当然だ。今日は朝から実と会うのだ。きつと別れ話が待っていると思うと、逃げ出したくなった。結局、数多の遠距離恋愛のカップルと同じく私達も例外にはなれなかったのだ。必然的な別れが待っている。距離は全てを臍にして薄れさせる物らしい。普通は女性側が寂しさに絶えられずに崩れるケースが多いと言うが、私は北の大地で頑張る恋人を想って耐え抜いた。話せない、触れ合えないのは辛いけど、それでも一生懸命に他の男性の誘いを蹴飛ばして彼だけを想った。私達は異色の結ばれ方はしたものの、うまくやれていたと思う。何がいけなかったのか全く見当が付かない。彼が向こうに私よりも素敵な女性を見つけてしまったのか？それとも私に愛想が尽きたのか？疑問は次々に浮かぶけど、どれも違う気がする。

た。

（あの手紙は別れを告げる物だった。はつきりとさよならと書かれていたし。でも私は納得できない。今日は実の真意をちゃんと確認しなきゃいけない。私達の将来のためにも……。）

私はある種の決心をようやく固めて、朝一番の便で到着する実を待った。新千歳を7時30分発の便は8時30分には最寄の空港に着くはずで、私は9時30分にホテルロビーで待ち合わせている。朝っぱらから重い話だと思っただけど、一花の結婚式には笑顔で出ようと思っていた。15時の披露宴には気持ちの整理も済ませたい。一花の人生最良の日が私の人生最悪の日とならないことをただ祈っていた。

ホテルのロビーで待つこと20分、ソファに埋もれるように腰掛けていた私の目に、懐かしい人影が写った。秋庭実その人だ。礼服に身を包み、手には土産物が入った袋と重そうな鞆を持っている。ゴロゴロと引き摺るように鞆を運んでいたが、私を見つけて手を上げた。

「遅いつ！20分も遅刻だよっ！」

怒る私に、特に悪気も無さそうな目を向ける。相変わらずの長身だ。仕事を始めて、学生時代の雰囲気がるで無くなっていた。良い意味でだけど、男の顔をしていると思った。

「飛行機が朝一から遅延したんだよ。これでも急いだんだ。」

飄々とそう言う実に私はまだキツイ視線を送る。この5年間、私達は付き合いながら関係が変わっていた。昔は実が私にベタ惚れしていたために、私のほうが我侘したい放題だった。でも今じゃ、私のほうが彼を必要としているのは明白で実も私の不機嫌にわざわざ付き合うことはしなくなっていた。またかと言う顔で私の怒りを簡単に受け流す。当然ご機嫌を取ろうとする気配は無い。

「全然反省してないでしょ？」

「反省する要素が無い。悪いのは遅延させた方だし、俺は最短で最速のルートを選んだ。ここまでタクシーだぞ？」

「何よっ！飄々としちゃって腹立つわね……。」

「相変わらず怒ってるな？でもらしいよ智。」

「うるさいっ！で、話とやらを聞こうじゃない。その為にわざわざ朝早くから待ってたんだから。」

「ああいいよ。今からチェックインするから、部屋で話そう。」

そう言うと、実はホテルのカウンターに向かう。そこでチェックインして部屋の鍵を受け取ると、私について来いと促した。私は黙って彼の後ろを歩く。彼は久しぶりに会った私に何か掛ける言葉の一つも無いのだろうか。私達は黙ってエレベーターに2人並んで立った。

部屋に着くと、実は荷物を適当な場所に置いて私にベッドに座るよう指差した。自分も荷物をゴソゴソやったあと、小さなバッグを出して備え付けのテーブルにポンと投げ出すと私の横に座った。そして、小さな声で話し始めた。

「ずっと放っておいて悪かったな。元気にしてたか？」

「私はいつも元気だよ。お陰様でね。」

「そうか、それは良かった。仕事も順調？」

「うん、もう一人前だって課長からお墨付きも出たわ。」

「へえ、頑張ってるんだな。お前って会社の話全くしないから心配してたんだよ。」

「実に心配されるなんて、私もまだまだね。」

一年以上も会っていない恋人にしては他人行儀な余所余所しい会話が続く。私の事を本当に想ってくれているなら、キスの1つでもして欲しいと思った。付き合っている時は毎日キスしてくれていたのに、離れてからはそれも出来ていない。たまに会っても、土産話に花を咲かせて帰っていく。離れた3年間は、本当に数えるくらいしかキスをしていなかった事実にはハツとした。もうその頃からサインが出ていたのを、私が見逃していただけなのかもしれない。ただ振られる私を不憫に思って、彼は恋人の振りをしていてくれていたんじゃないだろうかと思ってしまう。それで今回、決心して私に

別れ話をしにきたのかもしれない。

「そんなのヤダ……。」

横でまだ口を閉じない実の話など、すでに聞こえていなかった。悪い想像が頭の中で膨らみ、愛しい声も歪んで遠くに聞こえる。きつと別れ話を切り出すと思って覚悟は決めてきたけど、捨てられる現実には私が想像していたよりもずっと重かった。リアルにその恐怖で胸が一杯になり、張り裂けそうになる。胸が、痛い。本当に痛い。

「智?」

「ヤダよう……。」

「おい?どうした智?」

急に話を無視して呟きだした私を、実が怪訝な顔で覗き込んでいる。いきなりブツブツ言い出したら誰だって恐いだろうけど、私はそれどころでは無くなっていた。胸を押さえて俯いてしまう。

「おい、具合悪いのか?どうした?おい、智っ!」

ただ事ではないと察した実は私の肩をユサユサと揺らす。その衝撃で、私はやっと口を開いた。

「……実、どうして私を置いていったの?私のこと嫌いになった?私ってうざかった?ねえ、どうして?」

「は?お前何を言ってるんだ?急にどうした?」

目を見開いて私の豹変ぶりに驚く実。私はもう想いと一緒に言葉と涙が溢れた。

「だって、あんな手紙じゃなくてももつとちゃんと私に言う機会はあったでしょっ!？わざわざ一花の結婚式の日こんな事言わなくてもいいじゃないっ!なんで?どうして?どうして今日なの?」

「えっと?だって今日は一花の結婚式だろ?今日じゃないと俺もその決心と言うか、言い出せなかったんだ……。」

「だからどうして今日なのよっ!私あなたに会いたくなかったっ!もうあなた無しじゃ人生楽しくもないものっ!せっかくの一花の晴れの日に、涙しか見せられない……。ヤダよう……。私を捨てないで……。」

私の言葉に驚いたような目をした実は、やっと理解したようだ。

「ああ、そういうことか。困ったな。ちょっとした悪戯のつもりだったんだが、そう受け取ったか……。」

実はそう言っただけの悪そうな顔をする。私はもう泣くしか出来ない。覚悟は決めていた。だけど、もう泣くしか出来ない。女って弱いなと思う。黙って肩を震えさせるだけだった私を、実はゆっくりと抱きしめてくれた。同情のつもりなのだろうか。同情はいらないけど、もっときつく抱いて欲しかった。今はこの手の中に包まれていたい。例え最後だとしても。でも実は、そんな私に優しく囁いた。

「智、悪かったな。かなり不安にさせちゃったみたいだ。俺はお前



を捨てたりしないよ。」

「・・・本当？」

「ああ、これは意趣返しだったんだ。ほら、俺がお前に告白した日、お前がやったことに仕返しをしたかったっつか・・・。」

「私何したっけ・・・？」

「ひっぱたくって言ってキスしたじゃないか。」

「あ・・・、そうだったわね・・・。」

「だからそのお返し、ちょっと不安にさせようと悪戯したかっただけなんだ。」

「でもさよならって・・・。あんな風に書かれたら誰だって別れ話と思うわよっ！」

「ハハハ・・・、だよな。我ながらやりすぎたと思うよ。」

「馬鹿ツ！本当に最低・・・。私がどれだけ苦しんだか・・・。」

「手紙の本当の意味を教えてやるよ。目を閉じてくれるか？」

「・・・うん。」

私は待ち望んだキスが来ると思い、素直に目を閉じる。でも実は、私から離れると先ほどの小さな鞆をゴソゴソやり始めた。お預けのつもりなのだろうか？私は待ちきれずに目を開ける。



「本当よっ！最低のプロポーズッ！」

「あのさ、プロポーズ、受けてくれるか？」

「やり直しっ！ー！！」

「これもう一回やるのかっ！？」

「違うわよ。もっとちゃんとプロポーズして……。ほら、まだだし……。。」

私はそう言って、目を閉じた。

披露宴は素晴らしかった。一花は純白のウェディングドレスに身を包み、旦那様の腕にしっかりとしがみ付きながら各テーブルを回る。今はキャンドルサービスの真っ最中だ。私と実の座る席に近付いてきて、笑顔でキャンドルに火を灯す。私達も笑顔でそれに応えた。

「ねえ、智。ブーケ欲しい？狙って投げてあげようか？」

「一花……。そういうのは不正するもんじゃないわよ。」

「だってみのりん、まだプロポーズしてくれないんでしょう？ブーケ見せて脅迫しちゃうっ！」

「そうねえ、ブーケがあればちゃんとしたプロポーズしてくれるかな？」

私は悪戯っぽい笑みを浮かべて実を見る。実は困ったような顔で一花に苦笑を向けた。

「もう勘弁してくれよ……。智、一花にちゃんと教えてやれ。」

「そうね、フッフ。一花、次は私の式に来てねっ！」

そう言っただけで私は左手の薬指に光るリングを一花に見せる。私達の会話を聞いていた周りの席からは歓声とどよめきが溢れた。

「あああああああっ！智やったねっ！！！」

「ありがとうっ！そしておめでとっ！一花っ！！！」

「ありがとうっ！そしておめでとっ！智っ！！！」

そう言っただけで私と一花はお互いの相手もそっこのけで泣きながら抱き合った。実も一花の旦那様も呆れたように見ていただけだったけど、これからも長い付き合いになるようにお互いに握手を交わしてくれた。そう、これからも私達は親友で、そして一生お互いに泣き笑いしながら生きていくんだ。当然、実も一緒にね。抱き合う新婦とその友人に、いつまでも拍手は鳴り止まなかった。

最終話 さよなら茶霧智（後書き）

智も一花も幸せになれたと思います。これからは彼らは人生を共に歩んでいきますよ。でもそれはここで語る必要は無いと思います。

本当にこれで終わりです。お付き合い頂きありがとうございました。

追記

チャム（猫）に関して全く触れていませんでしたね。チャムは実が北海道に行く前に一花が引き取りました。引き取ったというよりはチャムとの別れを泣いて嫌がった一花に、ちゃんと世話をすると言う条件で里子に出した感じですが。当然、現在は一花の家でのんびりと暮らしていますよ（？ ＊）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0599p/>

---

Gamer ' s Lover

2011年1月14日11時54分発行